明治二十六年九月十日發行

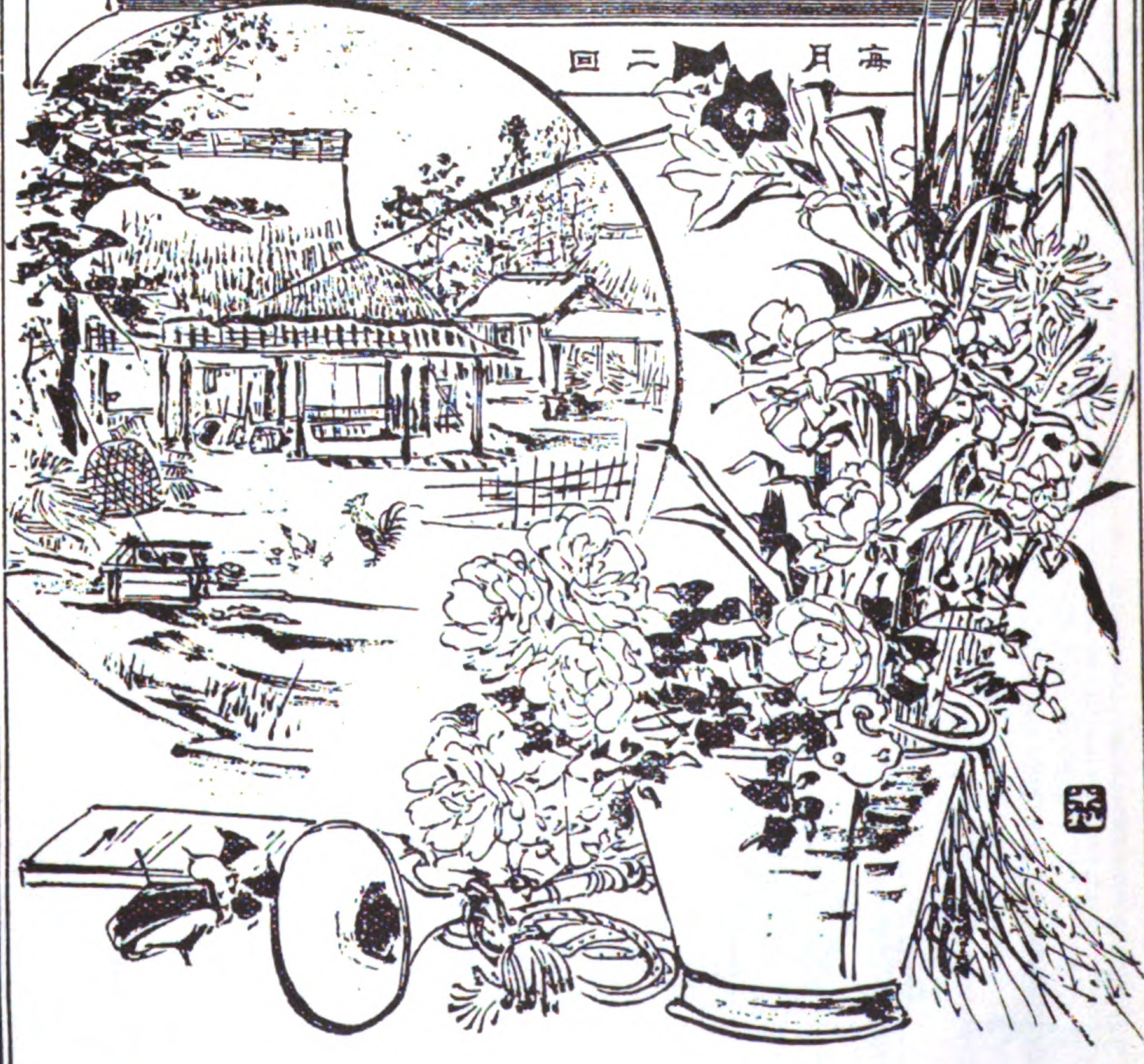
THE HOME MAGAZINE

家庭雜誌

東京家庭雜誌社發兌

定價全五錢

毎月二回



第拾三號

博文館發兌雜誌廣告

幼年雜誌

正價 一冊(毎號六十頁)金三錢六冊前金十八錢十二冊前金三十五錢二十四冊前金六十八錢郵税一冊一錢

毎月二回(一日、十五日)發兌●本誌ハ一ケ年ヲ一卷トシ毎年一月ノ初刊ヨリ卷數ヲ改ム可シ●明治二十六年ハ第三卷(第一號ヨリ第二十四號マデ)ヲ一月ヨリ十二月マデニ發行ス

我明治の兒童諸君は、家庭の學問に於ては、太た飢を叫ふものなり。社會の繼兒を以て、遇せらるゝものなり。我幼年雜誌は、幼年諸君の味方として、親切なる父母として、顯れ出てたり。其記事は、新奇快抜、其文章は、平易明白、明治のあらゆる文學家敎育家は、諸君の良師父となりて、毎號雜誌上に面白き物語を話し、東西古今の偉人豪傑孝子節婦の傳記は、諸君の品性を養ひ、簡易にして斬新なる科學物語は、諸君に實用の知識を與ふ。其他文章研究の塲あり、彩色美麗の口繪あり、以て一部の繪畫帖とすべく、以て大冊の小學百科全書とすべし。

婦女雜誌

正價 一冊金五錢六冊前金廿七錢十二冊前金五十錢廿四冊前金九十五錢●郵税一冊一錢宛

毎月二回(一日、十五日)發兌●本誌ハ一ケ年ヲ一卷トシ毎年一月ノ初刊ヨリ卷數ヲ改ム●明治廿六年ハ第三卷(第一號ヨリ第廿四號迄)ヲ一月ヨリ十二月マデニ發行ス

我邦方今女子に關する雜誌多からざるに非す、たゝ其宗敎に屬せざれば守舊に陷り、高尚に失せされは輕佻に陷る、獨り此弊を一洗して新社會に立ち新家庭を作り、『論說』以て智見開拓の塲に供し、『史談』以て温故知新の端を開き、『漫錄』は愉快なる學校にして、『文苑』は清麗なる遊園たり、『家庭』には適切にして其名に負かず、『社會』は精透にして其眞を描く、高妙なる『小說』あり、警抜なる『批評』あり、『叢談』あり『問答』あり『寄書』あり『詞藻』あり以て智見を擴むべく以て文思を育ふべし、是れ本誌か女子に關する雜誌中に於て獨り時流に異なる所以の大略なり

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

博士學士執筆補助

普通學全書

富山房編

普通教育の忽にすべからさるは何人も是認する所なり然れども世間未だ適當なる著書を見ず弊店爰に玆に感あり先年來より普通學全書と題し簡易輕便を旨とし左に列記の諸科教科書を出版したるに幸に大方諸君の眷愛を蒙り普通學全書の名全國到る處に傳播し好評嘖々たり而して各書ともに各專門の博士或は學士に依囑したれば自から世間杜撰の著書と異り苟も本全書を一讀せば座して百科の學に通曉し師につかずして良師あるに優れり尋常師範中學校の教科書たるは勿論小學教員諸君の參考書として適切なるのみならず凡そ普通學に志す諸君須らく本全書を座右に備へ以て其裨益を判知し賜はんことを

逐次刊行毎月凡二三冊發行毎編頗美本毎編讀切完結正價一冊金二十錢郵稅各四錢

●自第一編至第五編五冊分金八十九錢自第六編至第十編五冊分金九十五錢自第十一編至第十五編上五冊分金九十五錢自第十五編下至第十九編五冊分金九十五錢自第二十編至第二十四編五冊分金九十五錢郵稅一冊に付金四錢宛

自第一篇至第八篇目次

學理通論
物理學新書
心理學新書
生理學新書
萬國新歷史
化學新書
初等幾何學新書
經濟學新書

自第九篇至第十六篇目次

初等算術新書
美術新書
日本新文典
植物學新書
日本地理新書
初等代數學新書
日本新歷史（上下二冊）
萬國新地圖

自第十七篇至第廿四篇目次

礦物學新書
倫理學新書
文章組織法
萬國地理新書
支那新歷史
地質學新書
日本新地圖
動物學新書

（贊助諸君）（イロハ順）

理學博士 石川千代松君
文學士 磯田良君
法學士 石原健三君
理學士 岩川友太郎君
工學士 稻垣銓平君
法學士 稻波鈞三郎君
文學士 服部宇之吉君
文學士 芳賀矢一君
文學士 林曾登吉君

教授 八田三郎君
大學卒業 坂東順策君
〃 得能文君
理學士 岡村金太郎君
在朝鮮 岡倉由三郎君
講師 大屋八十八郎君
損齋 乙黑直方君
法學博士 和田垣謙三君
理學士 金田楢太郎君
法學士 神崎東藏君

在米國 吉田直太郎君
文學士 高田早苗君
文學士 立花銑三郎君
工學士 只野成重君
講師 田邊新之助君
文學士 薗田宗惠君
法學士 中川小十郎君
理學士 松島鉦四郎君
教授 前橋孝義君
法學士 松崎藏之助君

工學士 眞水英夫君
法學士 馬淵鋭二郎君
工學士 近藤會次郎君
文學士 天野爲之君
法學士 天野喜之助君
理學士 酒井佐保君
農學士 作間餘三郎君
講師 木下澄三郎君
在大學 清水文之輔君
文學博士 元良勇次郎君

發兌元

東京神田區裏神保町九番地
電話番號千〇六十二番

富山房書店

●米國醫學博士ヱーア氏新發明方劑

有効保證、無効損害辨償の責任あり

世界無比の毛生新藥

●●ヘアーヴイゴール●●

正價一壜金二圓●運送賃百里以内金十五錢百里以外金二十五錢を要す●着金即刻送藥す●郵便切手代用は一割増しの事

●一名毛の必ずはえる確證藥（久しく品切れ中の所今回米國より新荷來着致候間賣切れさる内速に御注文を乞ふ）

本剤は米國大醫博士ヱーア氏の發明新劑にして總て毛のはえべき所に毛のなき者へ必ず蒼々と毛髪を發生せしむる世界無比の特効藥なり（即ち腫物の痕、はつぼうはげの痕、やけどの痕、頭髪及はゑきわの薄き人、男女陰部に毛なき人、まゆげ口ひげの薄き人等に最も迅速の奏効あり）且つ本劑は種々の原因より來る毛髪の脱落を防止し頭部の腫物を全治し、毛髪を柔軟美艶ならしむる神効を有す●●本劑は日本に從來ありふれたる種々雜多の毛はへ賣藥とは其効勿論同日に語るべきものにあらざるなり（玉瓦混同視すると勿れ）●●●（注意せよ）本劑の賣れ行き非常に夥しきを羨み近頃名もなき和製の毛生藥に本劑類似の效能を付し賣出せる奸商あり又本劑を分ち他の曖昧なる水藥を混和し之を中瓶小瓶と唱へ價を安くし賣出せる奸商あれども眞正の船來「ヘアーヴイゴール」は二圓の分一種より無之ものにて彼の類似和製品及び他藥を混和したる廉價の品は名は「ヘアーヴイゴール」なるも其効能は本劑とは天地月鼈の大差あるものに付眞正確實有効なる「ヘアーヴイゴール」を求めたき方は他の廣告に迷ふとなく必ず本舘に於て購求あれ（僞品及び混和劑は効能大に薄弱なり

日本一手特約發賣元　東京神田區五軒町十九番地妻戀坂下（電話番號三百七十六番）

日新舘藥房

●毛はえ藥は市内は電話或は端書にて發賣元へ御注文あれば直に御屆可申候

廣告取次

國民新聞始全國各新聞雜誌廣告取扱迅速と確實に致割引大勉強

東京京橋瀧山町十一番地

弘報堂

電話呼出七百二十番

家庭雜誌

發行日 每月二回十日廿五日發兌
改正

定價		郵地方税共
一冊	金五錢	金五錢五厘
半年（十二冊）前金	五十錢	金五十六錢
一年（廿四冊）同	金一圓	金一圓十二錢

〇廣告料一行（廿四字詰一回ニ付）金八錢
〇本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便局

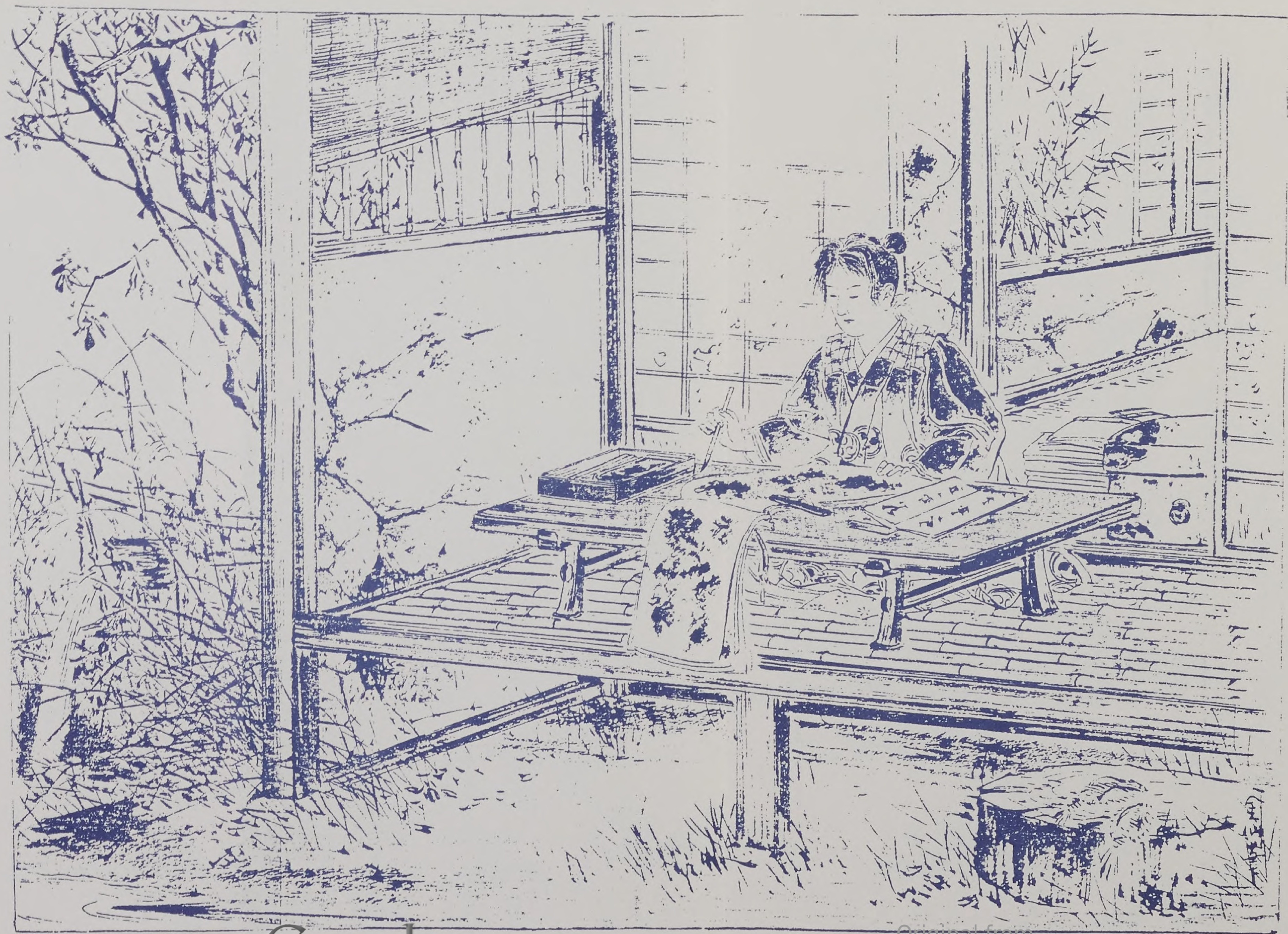
發行兼編輯人 堀田純朗
印刷人 塚越芳太郎

發行所 東京市京橋區日吉町四番地 家庭雜誌社

明治二十六年九月十日發行

家庭雜誌第拾參號

目錄



家庭雜誌第拾三號

（明治二十六年九月十日發兌）

社説

手近き家庭敎育



床の間掛物、壁に釣り下ぐる寫眞、楣間の額面抔、概して一家の裝飾品に相違なし。併しながら能く考へ來れば、獨り裝飾品たるのみならず、家庭敎育に淺からぬ關係を及ぼすものなると分明なりとす。何となれば是れ皆な家庭敎育の敎科書なるを以て也。

人は習ふよりも慣れよと申す諺あり、一家の小兒達が、朝夕見且つ聞く所のもの、如何に深く彼等の胸間に刻まる可きや。古寺の簷下にある礎石には、雨滴の爲めに、鑿もて穿ちたるが如く、窪み居るにあらずや。一滴、二滴、簷より墜つる雨滴にすら、堅き石の穿たるゝを思へば、蠟よりも柔かに、雪よりも白き、小兒等か、日々見且つ聞く所に附ひて、知らず識らずの間に、其の性行を形ち作らるゝと、如何ばかりならむ。思へば實に等閑ならぬことぞかし。

善きものを見且つ聞けば、善き人間となり、惡しきものを見且つ聞けば、惡しきものと爲る。床の間の掛物、楣間の額、彼等に取りては、大なる敎科書たり。家庭敎育に心あるもの、擇ぶ所なくして可ならんや。

小兒は天然の傳習者なり、何事をも他に尋ね、何事をも他に學び、何事をも他に習はんと欲す。試みに楠公櫻井驛の一幅を掛けたらんには、小兒は直ちに彼の『大將さんの前に跪く坊ちやんは誰れた』と聞く可し、『彼の大將さんは何をする人た』と聞く可し。一幅の畫も、彼等の尋問に應じ、繙繹すれば、乍ち楠公物語となり、

元弘雄武の歴史譚もなる可し。忠孝の心、歴史的觀念、油然として發し來らん。

或は又た壁に釣るしたる富士山の寫眞に就ても、『富士山は何處にある』『如何なる山』『日本一の高山』『世界に珍らしき美麗なる景色』問ふに任せて答へなば、一の寫眞は、小兒に向て、日本地理學の活ける研究となる可し。否な崇高なる美術心も出て來る可し、或は日本國を我物と思ひ、我物と誇る愛國心も出て來たる可し。



掛物、若しくは額面の書に就ても亦た然り。此の字は、某先生の書き給ひしものにして、其の讀方は云々なり、其の意義は云々なりと親切に說き聞かする時には、彼等は之に對して自から其人の仰ぐ可きを知り、又た小兒心にも其の言の服膺なる可きを知るに到らん。若し或は詩歌の如きは、之を記臆せしめ、之を吟誦せしむるも亦た可ならずや。

凡そ歴史畫、風景畫の如きは、小兒をして歴史的、修身的、地學的知識を與ふ可く、若し或は大人君子の畫像、書畫の如きは、小兒をして自から大人君子を欽仰するの心を發揮せしむ可し、或は氣韻高き書畫の如きは、小兒をして知らず覺へず高尙なる趣味を解せしめ、鄙陋猥醜の弊より遠からしむ可し。

特に我家祖先の畫像、若しくは彼等が自からものしたる書畫の如きは、小兒をして、自から祖先を敬愛するの心を生じ、小兒心にも家聲を墜さゞる自尊心を養生し來るや必せり。小兒が學校にて學習する『掛圖』の如き

は、一日に僅か數時間に過ぎず、寧ろ如かんや、朝夕諷誦熟覧する我家の『掛圖』に。凡そ彼の掛物や、寫眞や、額面や、皆な小兒を致養する『掛圖』たるを知らば、其の物亦た擇ばざる可らず。且つ小兒の尋問に對しては勿論。若しくは小兒の好奇心を鼓舞し、求尋的精神を奬勵し、以て其の尋問を起さしめ、之れが解説の勞を採るに於て、親切慇懃なるは、其の父たり母たり、保姆たるものゝ責任にあらずして何ぞ。

家は小兒の學校なり、家に在る總てのものは、皆な教科書なり、其の父母若しくは長者たるものは皆な教師なり、苟も斯る覺悟あらば、其の小兒の賢且つ善ならざらんと欲するも、能はざる也。



論説

遊び方の改良

秀香女史

凡そ日々精神をとらしまたは身體をつかひて後ちは、ほどよく遊びて其つかれを休めざれば、身體も精神も自然に衰へ、よき考へも働きも兩つなから出ぬもの故、遊びも一ツの道具にて欠くべからざるものなり。併し遊び方宜しからず、あるは又其度を失ひて遊ぶ時は、却て心を損ひ身をも害するに至ることあり、さればなるべく精神も身體にも利益ある遊びをなすは必要の事なんめり。

利益ある遊びとは、まづ天氣宜しく晴れわたりたる日に戸外に出て新らしき空氣を吸ひ遊山運動などするを最も善しとす。例へは郊外に出て春は野山の花を愛て

菜を摘むなど、夏は海水に浴し夕涼などし、秋は茸狩または紅葉狩などもよかるべく、冬は雪を見るなど、老も若も打まじり心を慰め身躰を動かすに優る事やはある。又天氣惡しくして外出の出來ぬ時には、家内中又は友達相集りて琴を彈き唱歌などにて樂しく遊ぶも善かんめり。總べて遊びには唯他人の爲すをのみ見聞するより、己れ自から身躰を動かし或は歌ひ語るを善しとす。

然るにこれまで多くの人々は寄席芝居などをこよなき樂しき遊びと思はるれども、これは最上の遊び方にはあらずかし。されど世間の人々の好む間は無げに癈する事も出來まじければ、成るべく害を去り利益あるものと爲すの外なからん。隨て演劇演藝改良などいふ事も起りぬ



なるべし。これも呼聲のみ高くして今に至るまで改良の實効は見えぬげなり。其譯は初めより餘り大仕掛なる改良を企て、且つは世間の人々自から却て改良せぬ以前の有樣を愛づる故なんめり。改良も手近きより少しづゝ始め、世間の人もこれまでの惡き所を忌み避くる事とならば、自づと改まるならん。大切なる客人に嫌はれては寄席芝居に到るまで利益なくなり行き、此くては溜らしと改良するに至るは必定なればなり。

世間の人の心掛け改良を催すべき席々はと云へば、先猥褻なる事殘酷なる事怪談めきたるとを咄し、又は仕組みたる寄席芝居には立寄らぬの外あらし。總てみだらなる事やむごき事怪談などを見聞する時は自然と行も亂れがちとなり、心も荒々し

くなり、物に恐れ易くなりもて行き、精神身躰を慰むるどころか却て勞れを催すものなり。此の頃本郷森本座にて興行中なるとか聞きぬる十人斬てふ外題の中には生ながら面皮を剝く事などある由なるが、見るべきものにはあらじ。別けて血に染みたる怪物などは女子供又は産前産後の人々に見聞きさすべきにあらず。これ等は何により先づ改良すべき事なるのみか、風敎の取締上公けの筋より差留めありても然るべき事どもなり。不幸にも此の事望めぬ事とせば、公衆自からこれ等を避くるより外なきなり。然らずは精神身躰を害し遊びの効能もなく全く勞れや惡しき事を求めに行くも同前なり。

故に心や身を慰めん爲め眞正なる遊びをなさんとする人々は、これ等のものに近寄らるゝ事なく、それよりは野山の淸き空氣や美しき氣色を愛て自然を友とし淸潔有益にして餘り金錢の費へさる遊び方を撰ばれたきものなり。善き遊びをすれば勞れを休め養生にもなり、働きも出來身の爲め此の上もなき事なんめり。人々此心になり行かはみだらなる事もこと事怪談めきたる事も自然となくなり、終には世の爲め人の爲めともなりぬべし。

科學

最も勤勉なる國民（つゞき）

かく巢の成りて後一日二日を經て、今迄甚だ靜かなりし女王蜂甚だ忙がはしく動き始む、彼女は巢の外に出で、暫時彷徨ひ、また歸り來る。

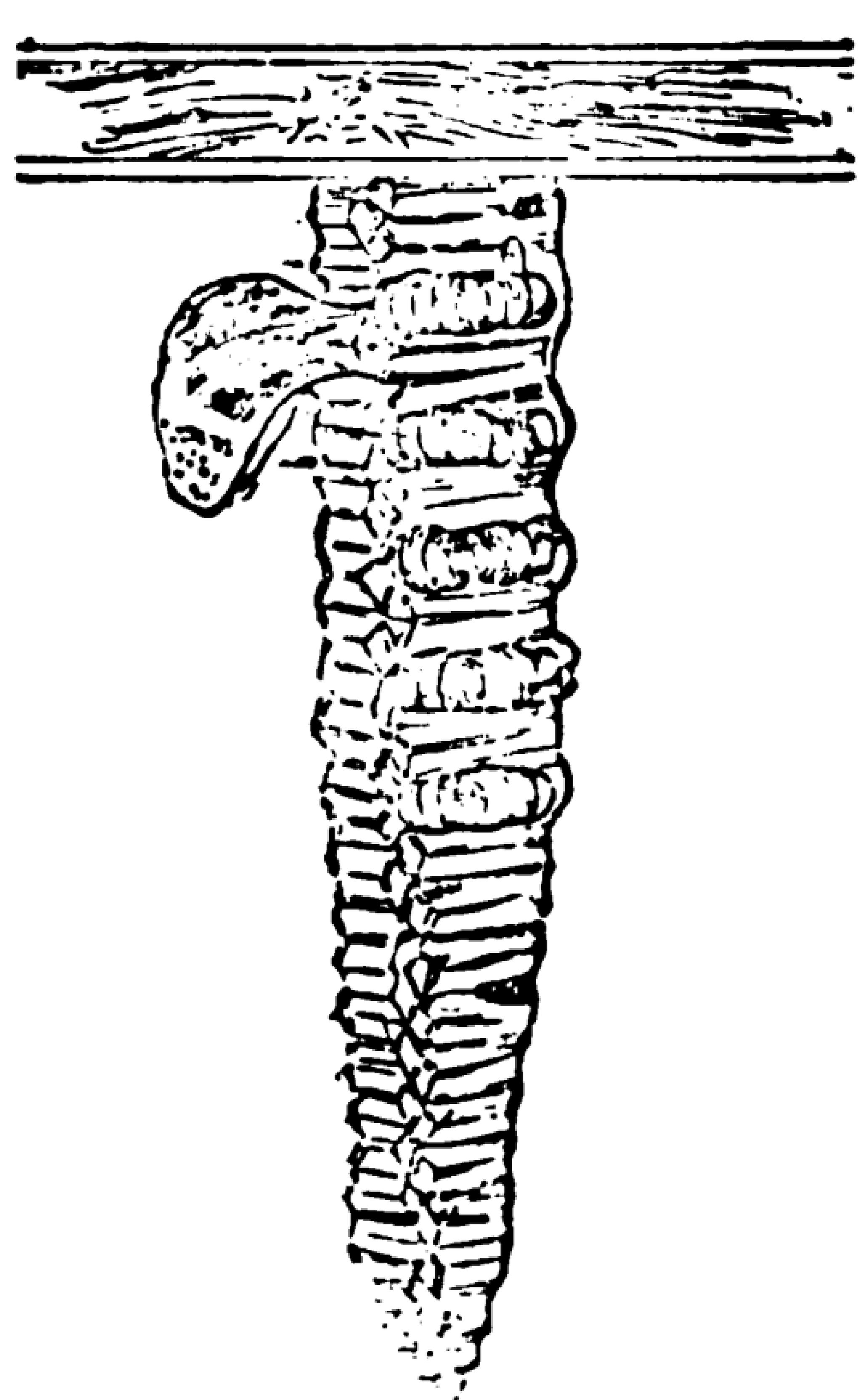
常に女王を衛り、一寸も戸の外に出でざる樣にする他の蜂も、此の時は女王の意を全く知り居れば、別に止めんともせず、女王のなさんと欲するがまゝに爲さしむ。女王はまた外に出でまた歸り來り、遂に空中に高

く飛び上り、遠く彼方に飛び去る。此の時、巣の内にある雄蜂即ち蜜奴は一種の近衛隊となり、女王の前後左右に附き隨ひ、共に飛び去る。

半時間許を經て女王はまた歸り來り、蜜蜂に警衛せられて前の如く巣の内に籠居し、卵を產み始む、巣に於て卵を產むものは唯一の女王蜂あるのみ。飛び廻りたる後殆んど二日を經て彼女は其の子を產み始む。巣の內には、蜜倉の外に卵を置く爲めに備へられたる小室夥多あり、女王は多くの蜂に奉侍せられて此の小室に行き、頭を入れて檢すること一二秒間、次て軀を廻して少さ青白き、楕圓形の卵を置き去る。既に卵を置けば何の意に關するものもなきが如く、次の室に行きて同じことをなし、また次の室に行きてまた同じことをなし、かくて一日に二百の卵を產するあり。

次て保育蜂の仕事始まる。二三日を經て、卵は皆な小さき蛆の形となり、保育蜂來つて花粉と蜜との混合物を其の室に置く、蛆は此の養により五六日にして室を充たす程の大さとなり、蜂はまた蜜蠟を以て其の口を封し、中心に小さき穴を殘し置く。

蛆はかく鎖さるゝや直ちに其の下唇より、二本の絹絲を合せて作りたる白維を出し、繭を作つて其の中に藏るゝこと十日許り。遂に、卵の產まれたる後二十一日にして、圖に示すが如く、十分に發生したる蜂の子、として室の中にあり、繭を嚙み破り、封蠟を嚙み破りて道を開き、



室の外に轉び出づ。此の時保母は再び來り、彼の羽を打つて强からしめ、食を與へて彼を養ふ。

かく養はるゝこと二十四時間にして、彼は十二分の發

達を遂げ、一人前の仕事師となり、一刻の遊戯もなさず、前時代のものと群れ、蜜を集め、花粉を集めん爲め忙はしく巣の外に飛び出づ、彼は勤勞せん爲めに造られたるならん。

老幼力を合せて働き、働くものゝ數愈々多きものから、貯の蜜及び花粉は目覺ましき速さを以て膨脹し、卵を置くの室となり、子の發生の後は空室となつて荒れ果つべきものまでも、保育蜂に掃除せられて蜜倉となる。されど此の室に貯へられたる蜜は其の色少しく黒く、普通の蜜倉に貯はへられたる『處女蜜』の如くに清純ならず。

六週間の後、女王は勞働蜂を産むことを終り、少しく大なる室を求めて蜜奴即ち雄蜂の卵を置く。此の卵は二十日にして蜂となる。かゝる間に勞働蜂の一群はまた立ち並びたる房室の傍はらに、甚だ奇異なる室を造り、（圖を見よ）雄卵を産みつゝある女王は、三日に一度づゝ、此の種の室に來つて卵を產む。

保育蜂は此の別種の卵を特に大切にして食物のごときも普通のものを與へず、特に精撰したる美味を供ふ、これ實に後の女王陛下と仰がれ玉ふべき皇女の卵なればなり。此の食物は甚だ奇異なるものにて、卵の種類は如何なるものにせよ、此の食と此の室とだにあらば女王は成長し得るものゝ如し、不慮の災害起つて巣の群其の女王を失ふときは、普通勞働蜂の蛆を取つて此の皇宮の内に入れ、特殊の食膳を供すれば、普通の卵も尙ほ女王蜂となるなり。王侯將相豈に種あらん。

十六日目の終りに至つて最長の皇女成育を遂げ、繭を噛み、蠟を噛み破つて室の外に出で來らんとし、女王は甚だ安心せざるものゝ如く、放心せるものゝ如く、彼方此方を彷徨ひ行く。天に二つの大陽あるべからず、巣に二つの女王あるべからず、皇女成長して室の外に出で來るの日は女王の位を失ふ日ならざるべから

ず。女王は遂に決心せり、寧ろ其の長女の前に位を避けんと。彼女はかくも大量にして頑迷ならず、また其の長女が己れの如く能く職務を果し得ることを知り、之に譲るの禮に合するを感ず。彼女は遂に其の舊き位を長女に譲り、更に新しき國を建て其の人種の膨脹を計らんと、眷族の一部を率ひて去らんと決心す。諸君若し此の時巣の内を窺はるゝあらば、多くの蜂は新らしき室家を作るに必要なる蠟を腹中に準備せんとて、思ふ樣に蜜を食ひ其が消化するを待ち、女王は出立の日和を氣遣はしげにながめ待ちつゝあるを見らるゝならむ。

かゝる間に皇女は待ち兼ねて、一時も早く室を破つて出でんとし、勞働蜂は力を極めてさはさせじと爭ふ、彼等は二人の女王の相會するあらば、必ず劇烈なる爭鬪の起るべきことを知ればなり。故に彼等は新しき食物を供し置き、新しき蠟を以て室の口を更に堅く封鎖す。

適當なる日は遂に來れり、朝の十時十一時の頃、女王は二千許の雄蜂と一萬二千乃至二萬の蜜蜂を率ひて巣を出で、去つて再たび樹の枝に集まり懸る。

今や古き巣には新しき女王榮光の位に坐し、先王の遺法を守つて萬衆を統御し、萬衆と共に生活し玉ふ。されど彼女は幸福なる能はず、彼女は靜息する能はず、彼女に後れて靜息する他の皇女の室を衝き位を爭ふものを除かんとするも部下の爲めに妨げられて果さず、氣を懆ち、羽を打ち、高き音をなし、水車の如くに巣の内を飛び廻る。

新女王の羽音の外に尙ほ巣の内に高き音をなすものあり、叱々、何物なる乎。カサ〳〵ゴロ〳〵の低き音は第二の皇女が殘れる室の内より來るなり。我等は此の音によつて何が故に新女王が心を安んずると得ざりしかを知る。女王は實に妹なる皇女が室の内より出で來

るべきを知り、彼の音の高くなる程、強くなる程、爭鬪の來る時の迫り來りたるを知る。されど先王の遺法の儼たるあり、新女王位に臨んでより日未だ久しからずと雖も、よく此の法の重んずべきを知り、母の例を追ふて位を讓り、巣を去り、新しき國を建て種族擴張の大是を全ふせんと決心す。かくて第二の群即ち後群速やかに巣を去る。これによつて、女王が三日づゝの間を隔てゝ皇女の卵の産したる理を解し得べし、若し此の隔の日なかりしならば衝突は必ず起るべきなり。時として勞働蜂の不注意より二人の女王相會し相戰ひ、一は殺さるゝことあり、時として二人共に巣を去り、新しき家を作つて後に戰ふことあり。

今や三代の王女位に臨む。第三第四の皇女は尚ほ皇宮の中にあり、彼の女にして出て來るあらば第三代の女王もまた先代の例に傚はざるべからず。されど巣は既に二回の遠征隊を出してより、此の時、殘れる數甚だ多からず、殘れるものはまた巣を去るの意なきが故に、勞働蜂は最早、皇宮に留まれる卵を保護せず、新女王は見るがまゝに室を襲ひ、劍を以て殘れる皇女を刺し殺す。かくて女王の位は安らかたり。數日の後新女王は雄蜂を從へて空中を巡行し、冬籠をなさん爲めに再たび歸り來る。

此より無慘なる虐殺行はる。かく善良なる、勤勉なる、規律ある國民にかゝることのあることこそうたてけれと歎息するものあるなるべし。女王の行幸は最早なければ、近親軍たる雄蜂の用はあらず、用なくして坐食するものは巣の内にあるべからず、少しく理を付けて云へは不生産的の兵士たる蜜奴は勤勉的平民的なる此の社會の平和の時代に存すべからずとの譯にて、總ての雄蜂、總ての雄蜂の卵は數日にして殺し盡さるゝなり、不思議にも禁軍の職たる雄蜂は一の劍を有せず、自ら防拒する能はずして殺さるゝなり。これ實に悲し

むべきことなりと雖も、彼等雄蜂が殺されざるも長くは生活する能はず、而して彼等が生存する爲めに冬の日に於て全社會の餓死を來たさゞるべからざるを思へばまた幾分か慰むべきものなきにあらず、彼等雄蜂もまた、生存する間に其の職分を盡し、死してまた全社會を救ふの大職分を全ふするを思へば些の遺憾なかるべきなり。

此の後無事。巣の内に殘れるものは幼なきものを養ひ、冬の日の食を蓄はへん爲めに勤勉なる生涯に歸る。我等が蜂蜜を採收し得るは此の時にして、始めより保護の手數能く行き届き居らば、勤勉なる國民をして餓えしむることなく三十磅内外の蜜を採收するを得べし。

天下いよ〳〵太平にして無事なれども、勤勉なる國民は皆な夫れ〳〵の職を勤めて敢て怠るものなし、蜜蜂は少しにても多くの蜜を集むるに忙がはしく、保育蜂は最も健全なる國民を養ふに忙がはしく一群の蜂はまた巣内を清潔にし、空氣の流通を自由ならしむるに忙がはし。巣の内には無慮數萬の口數あれば、空氣の不潔不健全になるは甚だ速やかなれども、巣には一の窓もなければ、空氣疏通掛りは巣の入口より淸鮮なる空氣を扇ぎ入れねばならぬなり。彼等が之を爲すの法は甚だ面白し。或るものは外を面して入口に立ち並び、羽を擴げて扇となし、彼方此方に振り動かして風を生じ、或るものは其の後より巣の床に立ち並び、背を入口の方に向け、同し樣に扇ぎ、小路々々に風を送る。

他の一群は子の出でたる後の室を掃除して蜜を貯はふに適せしめ、或るものは巣の門を守つて蠟蛾の入り來つて卵を産むを拒ぎ、黄蜂、蝸牛、蛞蝓、其他の盜賊の闖入するを拒ぐ。此等の盜賊守兵の目を盜んで巣に入り來るあれば、多くは劇しき戰の後刺し殺さる。時として彼等が敵を殺したる後、殺す丈けは殺し果せ

しも、其の軆重くして巣の外に棄つる能はず、其のまゝになし置かば腐敗して不健康を來すあり。此の如き場合に備へんとて勤勉なる彼等はまた木の花より護謨質の粘液を集め、敵の死軆を塗り封し、之をして巣の内にあつて永く腐敗するなからしむ。

かくの如くにして、此の不思議に勤勉なる國民の生活は續く。建築しつゝ、採收しつゝ、貯蓄しつゝ、保育しつゝ、掃除しつゝ、疏通しつゝ、旦より夕まで一の怠惰なるものなく、少しの時をも無益に送るなく、世界に於て最も勤勉に、最も規律正しく、總てのものゝ爲めに總てのものゝ働く獨立的平民的社會を作り成す。

（おはり）



史談

鐵公ビスマアクの家居　下

四十二年前ビ公猶孛露士亞の一代議士たりし頃、夫人に書き送つて曰く、昨夜小舟に乘りてライン河に浮び候ところ、あまり月色のおもしろさに、水に飛び込み、眼と鼻のみ水の上に出して鼠塔の邊まで泳ぎ下り候、此靜夜に仰いでは天上の月と星とを見また兩岸の木立しげき山市府の樓塔などを月光の中に見わが水かく音の外には何の音も聞かず緩やかに流れに從て下る心地何とも言ひ難き恍惚の味有之、每夜斯く游泳し度存候ひき、夫れより數杯の葡萄酒を傾け、ラインの流れを下に見つゝライナル氏と久しく露臺に坐して煙草を喫し候、小生此時小形の聖經を所持し居候所より且つは

此の星の夜の靜寂としたる所より話は基督敎の事に轉じ、小生は熱心にライナル氏のルーソー的不信を駁し、氏も終に沈默致され候」と。誰か思はん、獅子も時あつてか小羊に化することあらんとは。

世に傳ふ、ビ公極めて迷信を有する人なりと。例せば公は幽靈に出會せることありと云ひ、月は植物の生長と毛髮の生長に關係あるを信ずと云ひ、金曜日に事を執るは凶なりと信ずと云ひ、食卓に十三人坐するは不吉なりと唱ふと云ひ、千八百六十六年の戰爭は一週間にて終りたれば佛國との戰爭も七々四十九日にて結了す可しと信じ居たりと云ひ、千八百五十二年の冬夫人に送れる書中に「此たびはレッリンゲンの射獵も獲物多からず候、丁度其日は金曜日にて候ひければ」とあるを引き、曾て獨軍の一傳令使メッツより公の許に來りしが折りしも土曜日にて恰も普軍の大敗北せるホツホカアヒ及セナ兩戰爭の周年に當りければ公は大に傳令使を延見するを嫌ひたりと云へるを引き、凡そボメラニアの人にして伯爵に擧げられたる者の家は皆斷絕したりとて公も其初め伯爵たりし間は大に鬼胎を懷き居りしが公爵に上りて初めて安堵したりと云ふ事を引き、公は迷信家なりと斷言する者多し。然る事もある可く亦あらざる可し。其は兎に角に、公や鋼鐵の意思以て數十年來世の中を押し通し來りたれ共、或は時に氣沈み心悄然として樂まざる事あるなり。「吾事業の爲めに余を愛する者一人もなし、余は未だ曾て何人をも幸福ならしめしことなし、自身をも吾家族をも他人をも、然れども余が不幸ならしめたる者は如何に多きぞ！若し余微りせば三大戰爭はあらざる可く、八萬の人は死せざる可く、父母兄弟姉妹及寡婦等は親近の者を喪ひて喪服を着くるにも及ばざる可し……併し此事につひては余は已に上帝と勘定を濟ましたり、然れども余は吾事業の爲めに少しも喜を享けざるな

り、煩悶心勞困難の外は何ものもあらざるなり」。是れ剛健無比の頭腦に一點の愁雲陰を翳せる時の言なり。此悔恨の念はビ公を小にせずして却て大にする所以のもの也。

ビ公はゲッセン大學より贈れる神學博士の學位を有す。然も固より神學を知らず、亦欠點なき基督敎徒にもあらず。蓋しビ公宗敎を奉ずと云ふと雖ども公は更に他の宗敎—日耳曼帝國てふ宗敎を奉ぜしが爲めに、往々其一を犠牲にし去ることなきにあらざりき。然ども公好んで上帝を言ひ、亦常に聖經を讀み、靈魂不朽を信す。セダン條約の朝、公馬を跳らして條約會議の塲に赴きたる後、秘書官公の寢室に入り見しに、室內には讃美歌、宗敎冊子、千八百七十年分聖書之友、基督信徒の日課等の冊子取り散しあり。而して其翌日英國の一新聞記者ナポレオン三世の一夜を過せし室を見しに、其寢床の側なる卓子の上にはリットンの小說「最後の男爵」の譯本のり居たりと。

交際社會、音樂、美術、此等の趣味は公更に有せざれ共、文學にはおのづから嗜好あり。ゲーテー、セーキスピーアは其常に愛讀する所なり。嘗て曰く、若しゲーテーの著作を携へなば余は荒れ果てし島に多年を過ごすことを厭はざる可し」と。亦近人の作に於ては好んで米のホイッチアル、ホルムスのブレーギフアストテーブルなどを讀めりと云ふ。公亦小說を好み、多く佛國小說を讀む。普佛戰爭中公夫人に一書を送て曰く、小說御送り可給候、併し一度に一卷づゝにて宜敷候」と。ビーコンスフィルド伯の政治小說の如き、蓋し公の尤も愛讀せる所の一なり。公の尤も好み且熟通せるは古今の歴史及地理なり。ビ公佛語に熟し、英語をよくし、露語によく、意太利語は語らざるもよく讀み、羅甸はやゝ逸し、希臘は全く忘却せり。其文章は簡明直截、よく其爲人にかなへり。

公の短氣は世に隱れなし。嘗てビユスト伯に告げて曰く、足下などは怒氣むら〳〵と起る時は如何にせらるゝぞ、何か物を破壞して之を漏らすことはせられざるや、余嘗て彼處（と言ひかけて皇宮を指し）に於て非常に激怒せることあり、戶をハタとしめ、鍵を取り、レードルフ伯の室に行きて、陶器鉢の中に鍵を投げ、鉢を微塵になしぬ、伯余に問ふ貴下病ありやと、然り余は病ありしなり、サレド鉢を碎きて僅に之を醫し得たり」と。亦嘗て公壯年の日、上官に謁を乞ふに、一時間ばかりも玄關に待たせければ、公大に怒りて双の手套を寸々に引裂ひたり。良久しくして上官公を呼びで「何の要ぞ」と問ひければ、公大音に答へて曰く、もと暫時の休暇を願はんと推參致して候得共、今は辭職を願ひ候」と。公自ら人に語て曰く、目下の者共にとりては余の側にあること必らずしも愉快ならざる可し、併し人はよろしく余が易怒の癖を眞面目に引受く可からざるなり」と。蓋し公の怒は疾風暴雨の如く面を向くる能はざる程なるも、唯一霎時の事にて、更に痕をとゞめず。

ビスマアク公の如くしば〳〵危難に遭ふて之を免れし者は稀也。落馬五十度、脇骨を折き腦をいためたることは云ふも更なり、前後數回の大戰爭に矢石の間に立ちたるは云ふも更なり、刺客の難を逃るゝ兩度、爆裂彈を逃るゝ一度、猶また千八百五十二年の昔には山間の隧道に於て朽ちたる板を蹈み破りて五十呎の深坑に落ちんとして危く欄をとらへ、二十七歲の年には吾馬丁の湖水に溺るゝを救はんとして水に飛び入りしに溺者の常として馬丁は必死にビ公に縋りつきアワヤ二人共溺死せんとせしをビ公すかさず水底に潛り馬丁の氣絕して手を離すを待ちて之を小脇に挾みて難なく岸に泳ぎつき此か爲めに「救難綬章」を受けたることあり。斯る危險を逃れ、如斯莫大の事業を成就して、七十八

歳の今日從容と時事を論じ日々庭苑森林の漫歩を樂み得るは、稀有の數と云ふ可し。

近頃公の閑居を訪へる新聞記者あり。云ふ、公は已に命に安んじて復世間に出づるを思はず、近頃やゝ杖にもたるゝ位になりたれ共、日々庭園を漫歩し、猶健にしてよく談ずと。三十年來尤も危險なる世路の大風波を凌ぎ來つて、今やフリドリッシエルヘーの閑居日永く風清く、老妻幼孫傍にあり、煙管愛犬傍にあり、廣大なる邸園森林以て身を安んずるに足り、近くは吾を敬愛する家族と村人に圍まれ、遠くは吾の功績を忘れざる日耳曼人に繞まれ、客あれば談じ、倦めば睡る。公亦以て老ふ可き也。

（完）



文藝

母のおもひ

ウオルツウオルス作
家永ねい子譯

我いとほしむ　なでし子は
何處の庭か　野か山か
枯れしにまさる　かなしさの
母の嘆きの　深み草
などわけて來ぬ　もとの庭
嵐さそひし　ものならば
わが身もともに　ちりてまし
生きて苦しき　思ひより
末野の露と　きえてんを
我掌底の　玉と見て

ふたつなき子の　音信を
きかで過ぬる　七年よ
たえし望を　つなぎては
また幾度　思ひかへ
これぞよすがと　うちよれば
手に取る玉は　はかなくも
蔭と碎けて　わがこゝろ
いよゝ暗路に　迷ふなり

その心情　その容貌
よくうまれ出で　よく生ひて
智恵も勇氣も　いやましに
めでたきわ子が　行末の
さかえほぎてぞ　別れにき
世の濁りにも　しまぬ子の
罪なく清き　擧動なれば

母のこゝろに　かゝり來る
その雲きりも　あらざりき
遊びくるへる　稚子が
さけび聲にも　行末の
子の生ひ立ちを　おもひにき
やう〳〵つもる　年月に
こゝろの重荷　いやませど
子をいとほしむ　心こそ
いよゝ深くぞ　なりまさる

我子はわれを　をもはずや
わすれはせじか　かにかくと
思ひ迷ひて　ある時は
かくもうき子を　もつわれは
よにもまたなき　情ある
母にしあるを　さとらずや

子は知らずやと　人しらぬ
涙の雨は　行く路の
露と袂を　ぬらしけり

汝が境遇は　はかなくて
世にのぞみなき　身なりとも
な躊躇ひそ　家路には
母の悲哀み　かにかくぞ
こゝろなれきそ　母の戸に
富もたからも　尊びも
物のかずかは　わが目には

空飛ふ鳥は　翼あり
天つ風さへ　吹きそひて
またゝくひ間に　その旅路
おへて家路に　つくものを

われと我子は　海陸を
越る鎖に　つながれて
かくもはかなき　のぞみのみ
汝か慰めと　殘れるか

くらき獄の　その中に
ありもやすらん　いとし子は
情なき手に　せめられて
身もたえ〲に　ありやせぬ
あるは沙漠の　そが中の
獅子の穴にや　入りはせぬ
はてしゝられぬ　海原の
そこの藻葛と　なりはせぬ

世にある人と　なき人の
行かふ道の　あるぞとは

いつはりならぬ　ことならば
亡靈にても　いとし子の
その俤を　見せはせぬ
ひるも終日　夜すがらに
待ちわぶる子の　その姿
せめて夢にも　見んものを

迷ふ心の　はてしなく
風の音にも　おどろかれ
空行く雲の　かげにきく
わが子にやあらぬ　さはなきと
ゆきかふ人に　問ひて見つ
物に事にと　たづねても
我子は何處　わかなくて
はかなき世をば　かこつなり

とてもかくても　身のうさを
なぐさめかねつ　わがこゝろ
姨捨山の　それならで
わがいとし子を　戀ひ慕ふ
この苦しさは　誰かしる
かへれ我子や　歸らずは
せめて音信　きかせてよ
我身のうさを　輕めてよ
世には汝が外　友もなし

擣衣

湖處子

隣の姉さわが姉と、
　　はやも衣をうちそめぬ。
かた〳〵〳〵とおもしろく、

きぬたの音の聞ゆなり。

きのふの夕わが姉は、
となりの姉をたすけけり。
かた〳〵とふくるまで、
きぬたの音の聞えたり。

けふの夕にわが姉を、
となりの姉のたすけつゝ。
かた〳〵とひぐれより、
きぬたの音のきこゆなり。

夜ふけてきけば折々は、
わらふ聲さへまじりつゝ。
かた〳〵とおもしろく、
きぬたの音のあひにけり。

規律

新井君美七歳の時人に連られて演劇を見、歸て之を語るに能く其始終をあやまつことなかりき。父曰く、『此兒あしくなるか、よくなるか、なみ〳〵ならず』と。此くの如き資質あるものは教養其處を得されば往々に世のすねものとなることあり。

君美は幸に規律正しく成育せられき。彼は常に課を立てゝ事をなさしめられぬ。

彼が九歳の日は其習字の時代なりしが、秋より冬にかけて、日の中に行草の字三千夜に入りて一千を臨書せざるべからずに彼は課せられき。暮れやすき冬の日脚のいと短かく、西向の竹椽に机持ちいでゝやう〳〵に書き終りし事も度々なりしといふ。夜は睡魔の襲ひ來れば、竹椽にて一桶の水をかけ、二たびかくる程には

課もはやみちてけりとなん。新井筑後守白石が自ら彼を成したりし所以、此の一事にても知らるゝなり。

繪畫

無聲詩話

（四）

愛美の思想は原人よりしてあり。太古の蠻人が木石を抓して粗末なる形象をあらはし、丹石白土を塗抹して一種の彩色をなせしより、下て今時の妙手神に入るの巧畫に至れるも人に愛美の思想あるが故なり。苟くも人に愛美の思想あらば、繪畫は何れの人種間にも自ら發達すべし。

去れば日本にも固より日本人自身に由て進化せられたる繪畫ありし事は、明かなる事實にして、古器物之を證して餘あるなり。然れども支那の開化は日本より早かりしを以て、繪畫の進歩も遠く日本に先ちき。神功后西征以來日韓の交通愈頻繁なるに至り、雄略の



聖徳太子之御像
大和國法隆寺什物
白洲阿佐太子
所画

朝歸化人大岡忌寸ありて畫を能くせし如き、日本繪畫に一變動を與へし時期にして、支那の繪畫は朝鮮を經て入り來り、以て大に日本繪畫の發達を促しき。後忍勝なるもの倭畫師の稱を賜ひ、其術漸く進みぬ。」

欽明帝の世佛教渡來し、其小乘的教法の偶像を須要したるより、佛像を[illegible]み、佛畫を作るの大需用を感じ、佛畫を能くするものゝ歸化したるも多く、日本人にして之を學ぶものも亦其の數を増せり。去れば僧徒の如き、傳道上の方便として同じく之を習ひ、遂に日本佛畫大に起りぬ。

支那に於ても佛教の入來は繪畫の非常なる進歩を促したりしが、日本に於ても亦然りき。



法隆寺壁畫　金仙儒守

蓋し佛畫は、極めて莊嚴崇麗にして一見人に敬意を起さしむべく、又恐怖の念を懷かしめざるべからざるを以て、之を畫くには、大に發達したる理想と精誠と熱情と堅固なる信仰とを有せざれば不可なりしに由れるなり。

而して佛畫は日本支那共に大に印度の感化を受けたることを同時に記憶せざるべからず。

推古帝の時僧曇徵高麗より來りて、繪畫を以て傳道を助くる利器となしき。南都法隆寺金堂の壁畫は、もと彼が作る所にかゝれりと云ふ。

又百濟の太子阿佐王の如きも、嘗て來朝して我が、聖德太子の肖像を畫きし。肖像は藏して法隆寺に存し、今は宮内省に在り。

斯くて奈良朝より王朝に入りては、遣唐使、留學生、常に往て支那に之き、政度文物のすべてを唐制に摸し、唐の畫法も大に輸入せられたり。

遂に中務省に畫工司を置き三十餘人の畫工吏人の命ぜらるゝに至りぬ。

弘法大師空海の如き、智證大師の如き、慈覺大師の如き、或は小野篁の如き、皆巧に佛畫を畫けり。

其後王朝漸く年を經るにつけ遣唐使の如き自ら止み、日本化したる繪畫は油然として興りぬ。是に於て平繪畫社會の新氣運は始めて熟しき。

文德帝の世百濟河成なるもの出づ。

河成は餘姓、百濟人の裔なり、安藝介となり、從五位に叙し、巧に人物及び山水草木を畫けり。仁壽三年卒七十二にして沒す。

それより清和宇多醍醐の昇平を經て、遂に日本繪畫の大王巨勢金岡出るに至りぬ。

家政

家政の要旨

或る有名なる牧師は一度或る婦人と結婚の約束しけるが、或時其婦人の家を訪ひたる時に、其婦人が妹に向つて『私しの針は何處へ行たか知らん』と尋ねたるをきゝて、竟に結婚の約束を破談したりとなん。其故は婦人は物事に注意深くして何事もよく〳〵覺へて居るべきものにして、殊に針などは最も注意すべき事なるに、己の針のあり場を妹に尋る樣なる婦人は到底不注意にして一家を整ふることを能はざるべしと信じたるが故なりと云ふ。

右の話の如く、一家の事務の整ふと整はさるとは一家

の妻君の締りあるとなきとによることにして、妻君の締りの有無は其家事に秩序あるや否やを見て知るべし。一家に入れば色々の品彼方此方と散り、彼處には下女の不平あり、此處には小兒の啼泣ありと云ふ樣なる風にては、勿論締りなくして下女も其勞力を徒費し、一家の事務從つて運ばず、無益の費多く、此から家に養はるゝ小兒はまた亂雜、不規則の惡習を遺傳するに至るべし。家政の第一は妻君が萬事に秩序を定め、凡べての物品のあり場を定め、一たび初まれば傍らより命令せずとも自然に運ぶ樣にするにあり。此くて下女下男小兒の爲すべき職分已に定まる以上は其外の臨時の事務は成るべく妻君自ら之に當りて一定の事務の順序を破らざる樣にすべし。一たび順序をくるはせば、事務はかどらざるあるも之を責るによしなきことなればなり。此事は四十年間、よく家を整へたる老婦人の箴言なれば若き妻君はよく〳〵味ひ給ふべし。

人躰、食物の學理

（一）人間の身躰

人の躰は十四の原素より成り、その原素は肺臟皮膚その他の所より常に蒸發し去られ、その蒸發したるものは食物によりて又躰中に入るものなれば、人の躰に必要なる原素を含みたる食物を常に撰びて食する時は人は常に壯健にて居るを得べし。今ま十三貫五百目の躰量ある人ありとせんに、その人が强壯に働かんには日々百八十目より二百七十目までの固形食物と四百五十目より七十二目の流動食物を飲食し、又た十石より十二石五斗の空氣を吸入するを要す。之を一年に積れば殆んど二萬四千〇〇〇貫目即ち人の躰量の殆んど二百倍に近き養分を要するなり。

人の躰内には夏も冬も晝も夜も絶へず火の燃へて躰温を保つものなるが故に、その煙は絶へず肺及び皮膚等より躰外に溢出す。平常は之を見能はざれども、寒天には馬の背などより煙の如き蒸發氣の上ると、又人間

の口より呼吸の白くなりて出づる等を見る、蒸發氣はかく常に躰外に溢し去りつゝあるなり。故に躰温を保つためには又た好き燃料を供せざるべからず。

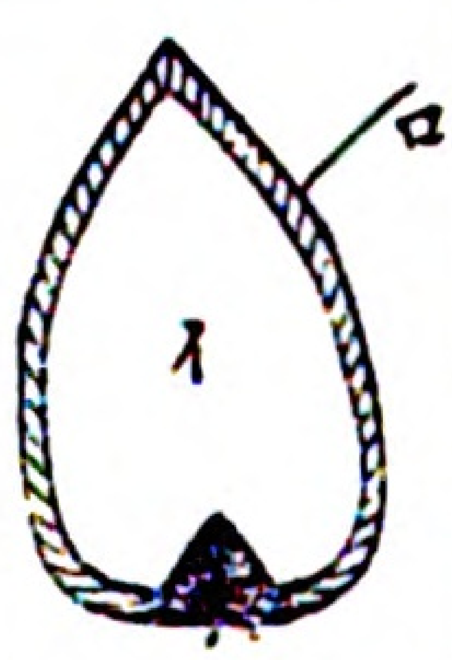
(二)人は何の原素を要するか

さてその燃料には脂肪礦質等の中に最も多く含蓄せらるゝ炭素と云ふ元素の他の元素酸素に合ひて燃ゆるなり。兩つの元素は共に動植物を食し呼吸をなすによりて人の躰中に入り來るなり、人躰に必要なる元素の中にも筋を養ふ窒素、腦と神系とを養ふ燐素、骨を養ふ石灰質、或は血液のために鐵氣、躰温のために要する炭素酸素等の如きは、最の人のために大切の者なれば、そを供する食物を選びて用ゆるを務むべし。

(三)造化の配劑

食物に付きて研究するに當り、一つの驚くべき事實あり。そは人類の食する食物の中に人類に必要なる凡ての原素を人類に必要なる丈けの分量に尤も適當の分量を以て含蓄することなり。

圖に示めせるは麥の一粒を粗大にせしものなり。(イ)



なる白き所は澱粉質とて人體の脂肪を作るために必要なる炭素を有し周圍の薄黒き所は筋に大切なる窒素を含み、(ハ)の黒き所に腦、神系等を養ふ燐素を有す。而してその分量の恰も人體の要する比例にて植物の含有したるは奇と云ふべきなり。尚ほ麥の外皮には人類に尤も必要なる石灰質鐵質等あれども、外皮は不消化なるを以て常用に適せず。故に此等は他の食物によりて補なわざるべからざるなり。

(四)職業によりて食物を異にす

右の分析により我等は麥の滋養に富めるを知る。之と共に篩にて篩はざる粉はその篩て澱粉質即ち炭素のみとなりたるものより遥かに健康に益あることを知るを得べし。人類の食物は體の必要なるに應じて食慾を來すものなり。例へば筋を勞する事多き勞働者は窒素の多き食物を好み、腦を勞する事甚だしき人は之を養ふために又多量の燐素を望む。されど之を食して體の必要を充たす時は更らに他の食物を得んと欲すと。他の

ものを得んと欲するとき強ひて前の食物を食するも、一定の必要の外、皆體外に排出し去れば、何の益にもならざるなり。

(五)試驗の結果

有名なるゼルマンの理學者リービッヒ氏嘗て監獄、兵營、病院等にて大に試驗をなしたりしが、その結果として左の事を發見したり。即ちジャガ芋を重もなる食物として用ゆる時は澱粉質のみ超過して窒素に欠乏するが故に筋力の衰退を來し、肉食をなさんとするの食慾を起さしむ。麥とジャガ芋を比較せんに麥は筋を養ふため百分の十四窒素を有し、腦及び神系等のためには百分の二の燐素を含む。ジャガ芋は僅かに百分の一の窒素を有し、百分一の十分九の燐素を含む事を發見せり。

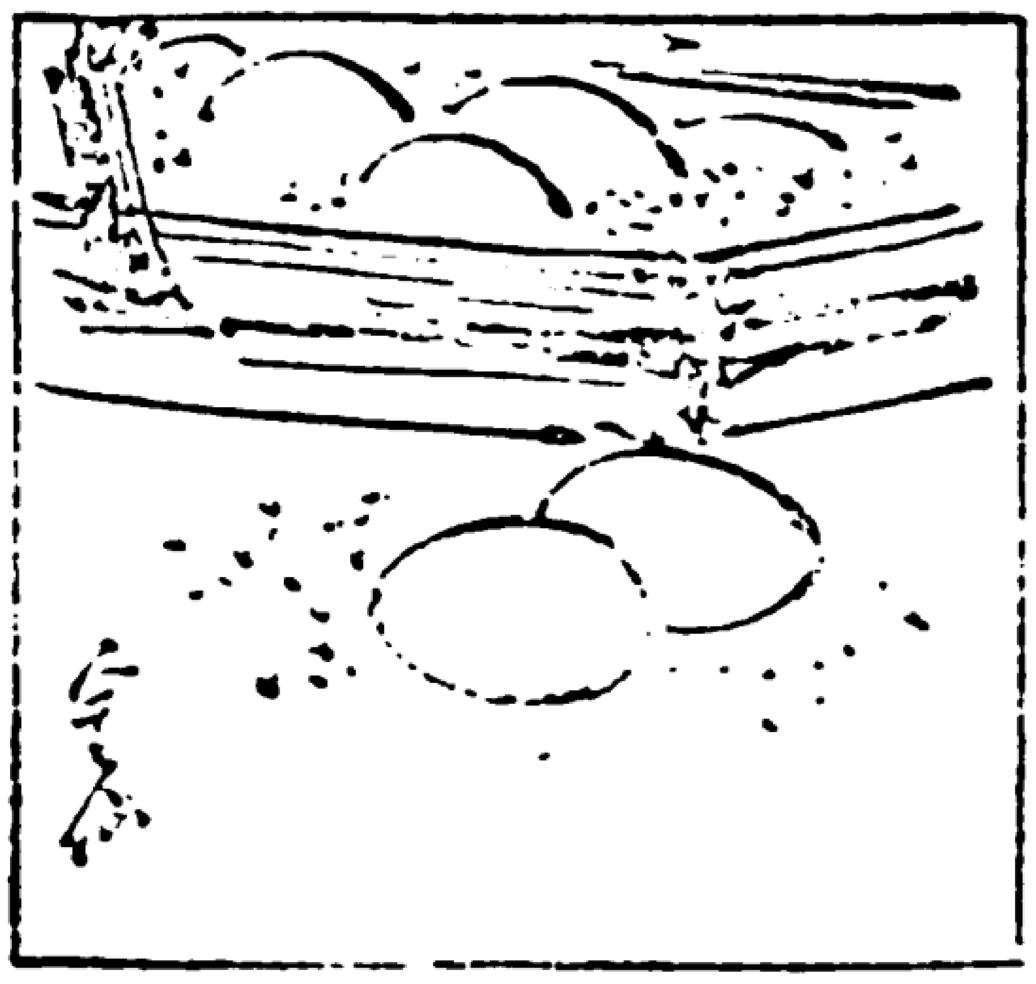
(六)食物上に注意すべき事

人類に必要なる三大要素と稱せらるゝものは、脂肪即ち躰温を保つために砂糖、油、バタ等、筋力榮養のために、獸肉、魚肉、チース、豌豆、蠶豆等、腦、神經のため貝類、肉類、豌豆、蠶豆、鳥類等にして、野菜物果物は酸素とて血液を清潔になし水分を供給す。我等は食物に付きて少なくとも左の事を記憶せさるべからず。即ち第一、蔬菜と肉類は等しく人類に必要なれば一方のみに偏ぜざる事、第二寒冷の氣候には炭素食物を要すること多ければ脂肪のもの砂糖の多きものを多く食する事。但し暑中は成るべく之を避くる事。第三脂肪糖質等の食物を用ゆる時は注意して運動を爲さゞれば胃弱を來たす事。第四學生銀行に勤むる人、家内に蟄居する婦人、仕立屋等の如き勞働をなさゞる人は油砂糖の如き炭素を含みたる食物を多く食せずして魚鳥肉若しくは果實の如き含窒物を撰み食する事。第五熱きもの不消化のものを避くる事。第六間食を爲さず食事の間は必ず三四時間を隔つる事。第七食事を急がずして好く咀嚼する事。

造化已に人類の求めに應して寒熱共に適當の食物を與て、寒國の麥は暖國の麥に比して炭素の部分多きが如く、それ〳〵人類の求めに應して不自由なからしむ。

されば之を撰ばずして健康を害するは人類の過なれば、我等宜しく己が身躰の事に付きて深く研究し、健康を保つの法を守るべきなり。

鶏卵種々の料理法



海魚もまけにして獣肉も危險なりと云ふ時節に最も要せらるゝは鶏卵なり、鶏卵は尋常の料理方にては度々食ふに堪へざるものなれば、此に佛蘭西にて行はるゝ一二の料理法を記さん。

其一　先づ皿一面に薄くバタを塗り、其上にまやけにても豚にても好みに應じてラカン肉を細かく切りさへなみてバタの上に散布し、其上に鶏卵は幾何にても望む丈ケ割りて黄味を破らぬ様にをき、之を熱湯にて充満せる燒鍋の上にをくべし。平生此かるものを作るために酪燒等に用ゆる二重鍋を備へをかば便利なるべし。さて右の鶏卵の白味の白くなりたるを程度として引上げて膳に供すべし。

其二　松葉うど（今は時節をくれなれども何にても同様のものを見つくろうべし）を適宜に切りて之れをうで、また別に鶏卵を幾個にても好むだけ割りて熱したる鍋の中に入れ、かき回はし暫時の後、取上げて右の松葉うどを其中に入れて食膳に供すべし。勿論此の鶏卵の中には少量のバタを入るべし。食塩と胡椒を加ゆることも忘るべからず。

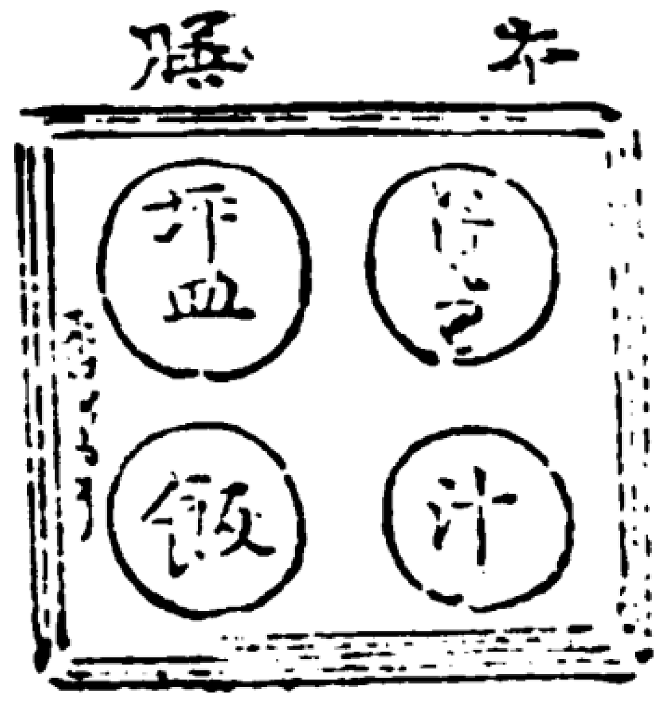
通常の如く鍋にバタを引く所にヲリーブ油（橄欖油）を用ひ、之に鶏卵の黄味をこわさぬ様にして入れてフライを作り、之に少量の赤茄子錯を加ふれば美味を増すべし。

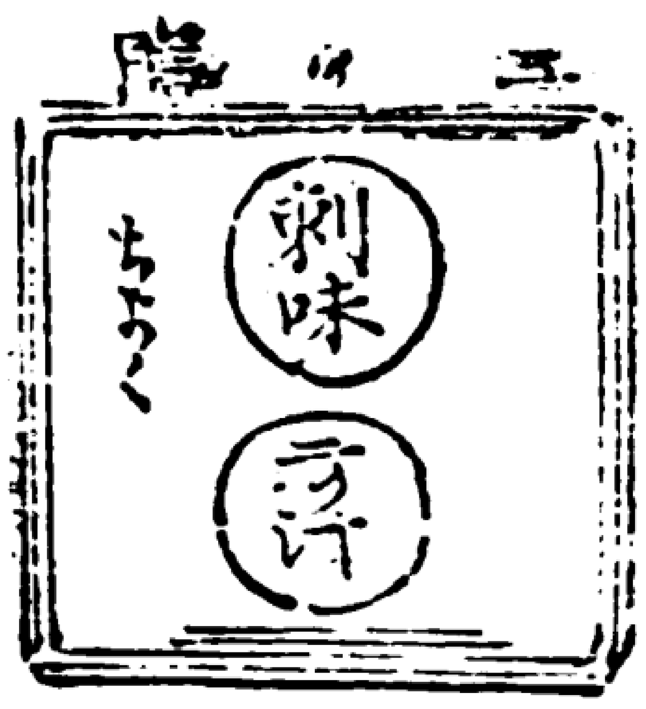
日本古流の献立

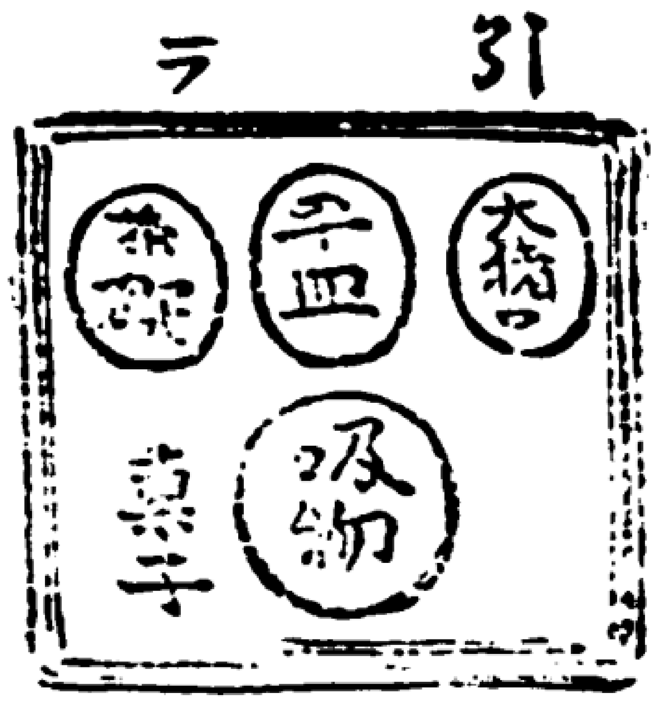
一時西洋熱の盛んなりし結果として女學校を卒業して

今日人の家に嫁し給ふ所謂新日本の婦人の方々は、キャベツの煮方牛の舌の炙り方等には熟練せるも、日本古來の料理法及び獻立等に至りては、四十以上の下女の知りたる程も知らざる所多くして姑の罵りを受くるのみならず、遊宴祝儀不祝儀等の時に大に困難を極むること少なからざれば、日本古流の獻立料理法にも一と通り通じをくこそよけれ。

古例を守る家にては五々、三七、五三或は高盛平盛等種々の面倒なる事あれども是は平素用ゆる所にあらざれば、今日民間の遊宴祝儀等に通例用ゆる處を記さんに、二汁七菜の獻立は左の如くにて、近頃坪皿は不流行なれども本料理には必ならず用ゆるなり。

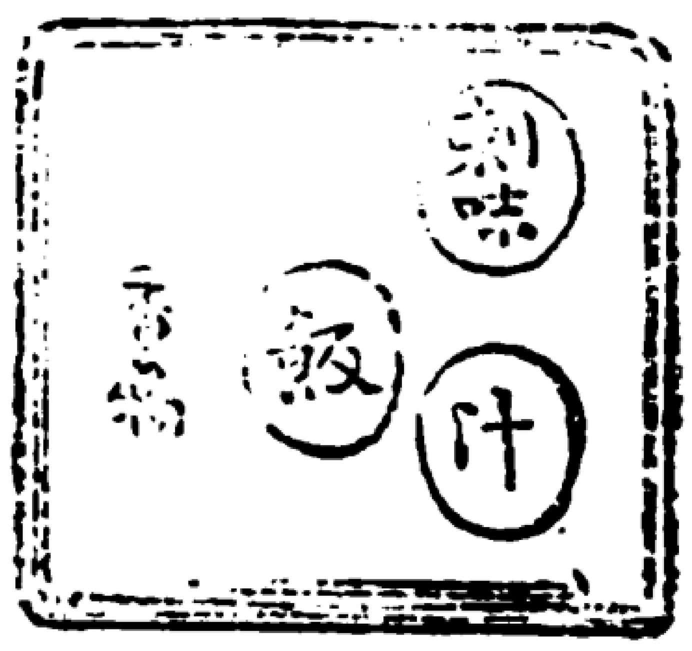


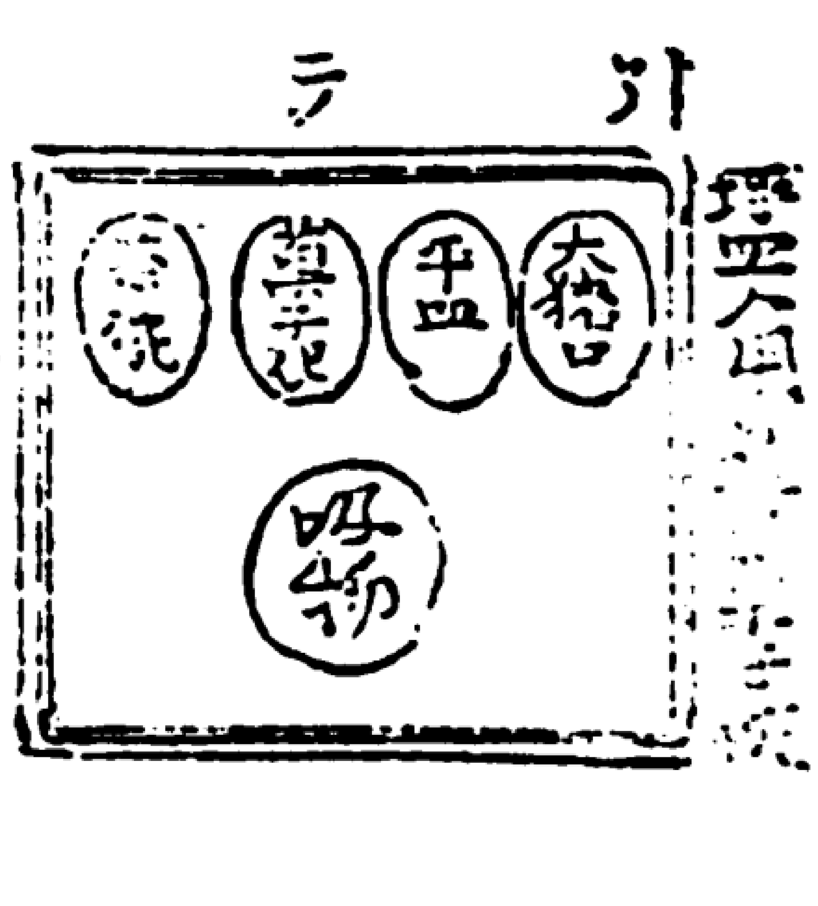


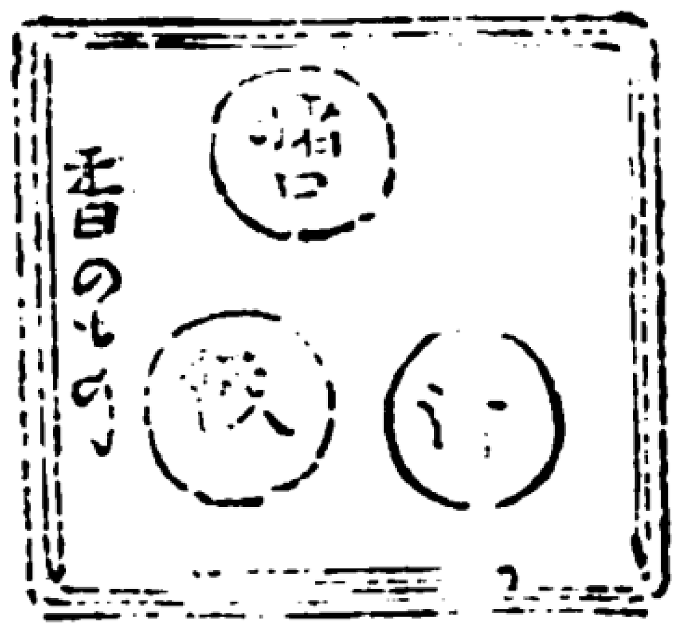


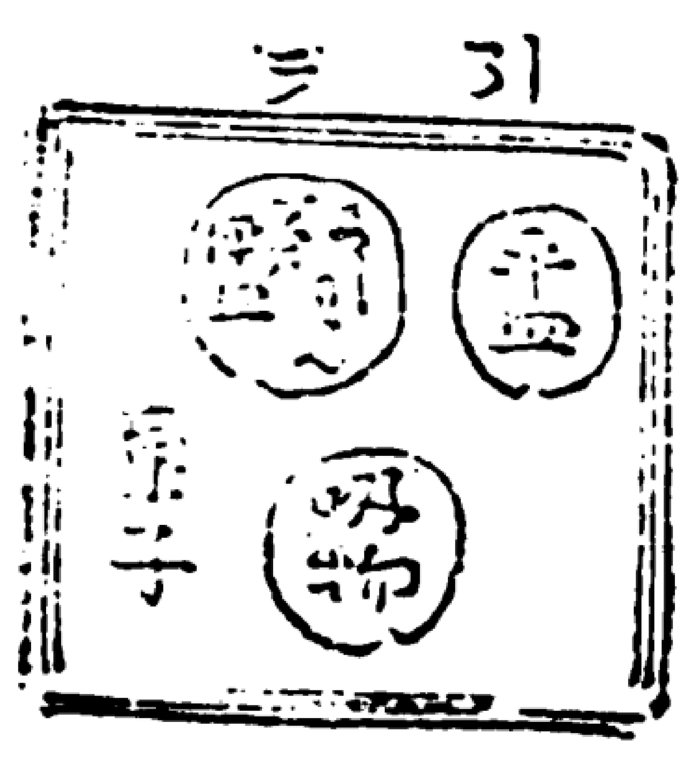
汁五菜の獻立は左の如し。

一汁三菜の獻立は左の如し。

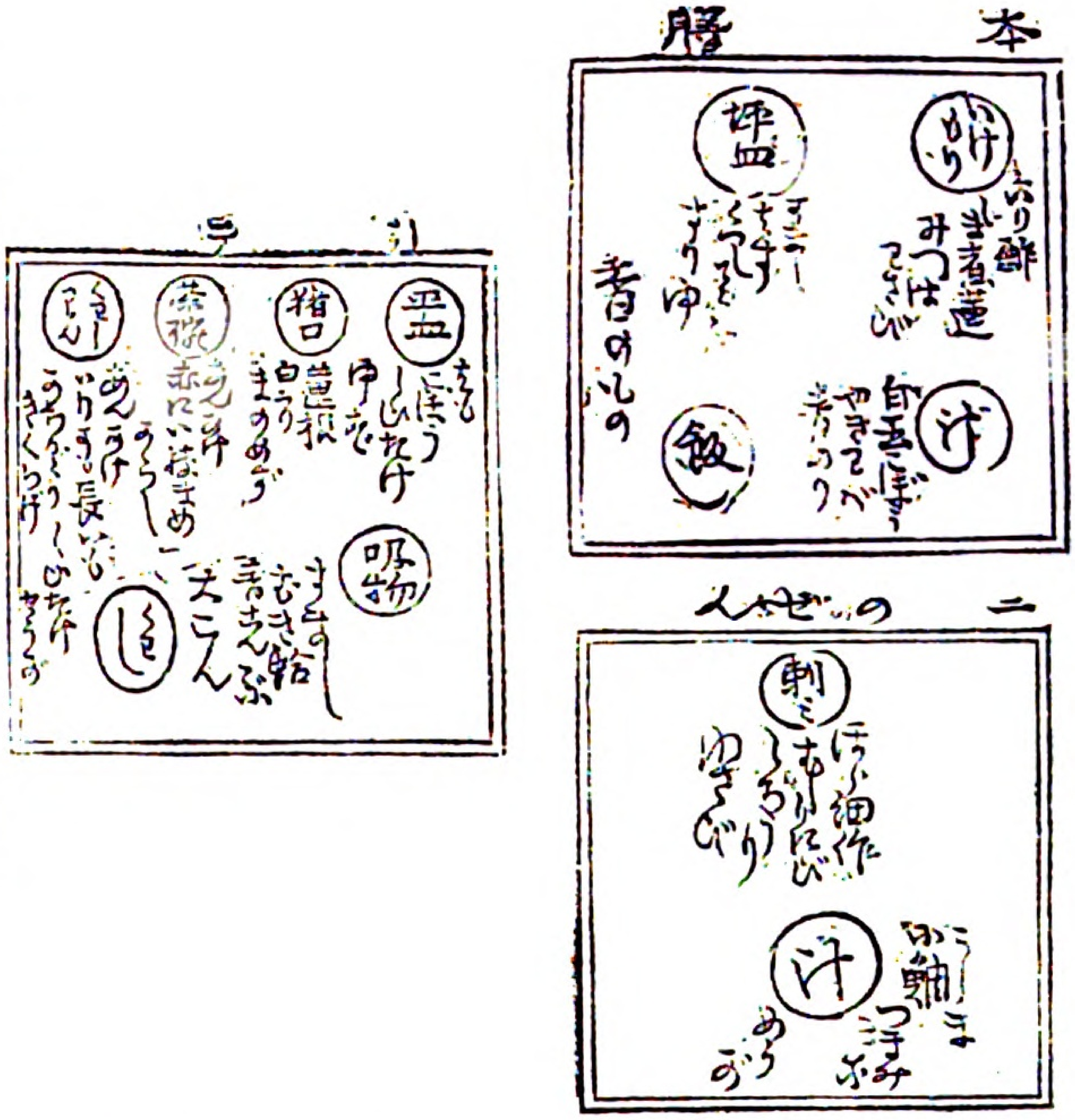








右獻立の碗數に從がひ料理の物品各々異なれば、四季の魚類精進を一々書きつくさば中々紙數限りある小冊子の能ふ所にあらざれば、先づ此頃の時候のものを二汁七菜の獻立料理法を記さんに、



右の料理法の内二の膳引テは通常人々の知りたる處のものなれども、本膳坪皿中のくづどうふは珍らしければ記さんに、とうふの水をしぼり摺鉢にて摺つぶし、魚の摺身とくずを少し入れて固め、すましの汁の沸騰せし中にて煮るべし。又た本膳汁の中なる白玉牛蒡は牛蒡を湯出、暫らく水に冷して引き出して皮を剝ぎ、眞の所を先細き小刀にて圓く形をつけ、之を筆のじくの如きものにて圓く抜き、その中へすり身をつめて湯煮をなし、小口に切りて汁の身となすなり。

家庭衛生

病後の注意

世の母たるもの、子女の病氣となりたる時は狂亂の如くなりて立ち噪げども、病氣本復したる後は打忘れたるごとく更らに注意せざることあり。去れども病後の身は却つて病中より恐ろしきとあり。或る醫師の言に『如何なる病氣にても快愈し後、一週間床の中にあらしむるは余の定めなり』と。病後の大切なること此の如し。

殊に猩紅熱、痳疹の如きは病後最も恐るべし。病中よりも大患を來たすこと少なからずして全く盲目若しくは全くの聾となり若しくは咽喉病となるは多くは痳疹

の病後を注意せざるより來ることあり。故に注意深き醫師は病後一週間は暗室に居らしめ、外出は三週間の後ならでは許るさぬことあるほどなり。
また病後は心臓極めて弱るものなれば少しの動きよりして大につかるゝことあり。よく／＼注意すべし。何病にかゝわらず、病後は凡べて危險なればよく／＼醫師につきて保養法をたづねをくべきことなり。

一種の强壯劑

朝餐の前に湯を飮むことは消化を助くることは能く人の云ふ所なり。之と同じ道理にて牛乳は温かくして飮む時は消化よきのみならず、一種の强壯劑となるの力ありと云ふ。牛乳は其中にありがちなるバチルスを殺さんかために必らず沸騰せしむるをよしとせば、温かくして飮むことは左程手數の入らぬことなれば、試むべき事なり。

小兒の齒

人の病源は齒より來るもの多し。齒より胃を害し、胃病よりは腦病をも生ずべく、肺をも弱むべし。故にくれ／＼も齒の注意こそ肝要なれ。齒は小兒の時より注意して每朝一度づゝよく／＼掃除して汚物のために害されぬ樣にせざるべからず。



然るに母たる者小兒の齒のきたなきは通常のことなりとて放任するものあれども由なきことにして此かる不注意より次にはゆる二年齒にも惡き影響を及ぼし、是より一生齒痛を生ずるに至るなり。故に小兒の齒にして其輝ける白色の中に一點にても黒みたるもの出で來らば、直に齒醫者の療治を受くるを怠るべからず。これ一生の齒痛より救ふの術なり。四才以上にもならば口を嗽くことを習ひ得へきも三才迄の小兒には每朝起き出しとき切の端を指の先きに卷き舌齒等を拭ふべし。牛乳にて養つたる

子供は格別丁寧に試ふを肝要とす。

小兒の遊戯

米國の家庭雜誌に、東西をも知らぬ幼兒に文字を敎ゆるは有害なりと云へば如何なる遊を敎ゆるを有益とするかと問ひたるものありしに、記者は之に答へて『三角四角六角等の木具を與へて其角若しくは平面等を敎へ、または室内に幾個の隅あるかを敎へ、または單純なる色圖を敎ゆるなど、腦力を害せずして可なるべし』と云へり。

母の心がけ

此頃或る人の母は、子供の心を知らぬ母ほど、憐なるものはなかるべしとて、下の話を爲し給へり。或る時余が外出して雨の降る夕方に歸宅の途路、年齢わづか五六歳とおぼしき女子が、片手に人形を持ち、片手に、大人の用ゆべき大なる雨傘をさして、あしだのはな緒はさもゆるそうに見ゆるをはきながら、歩行するを見たり。余は知らぬ子供なれども、アヽあぶなそうだと思ふより、自然に己の足の運びもゆるく、其子供に添ふて歩行し居たるに、五足六足歩むと見る間に、案にたがはず道の小石につまづき大傘をはるかあなたになげ出して、うつぶしにころげたり。余は見るよりたまりかね、自分の手に持居たりし雨傘を打すてゝ、直に其子を引起し見れば、衣服はおろか面までもどろ



にまぶれて、あわれなる有樣にて聲をも出さずなき居たり、余はハンカチーフにて面と手のどろをふきて、其子供の家本を尋しに、つい近くにあるを知り得たれば、其子の手を引て家につれ歸り得させんとするに、其の子供は衣服を汚したれば母に叱らるゝを憚かりて

か、喜んで歸らんともせず、只泣くのみにてはてしなければ、余は其手を引て、無理に其子の家の門口に迄つき行きしに、其日は丁度其村内の祭りの前日にて、其家の母とおぼしき年頃三十歳内外の余り見にくからぬ婦人の、かたには手すきをかけながら、さもいそがしそうなる躰にて、門口に出で來るを見たりしに、其子を見るや直ちに額に八の字をよせて、子供の傍に居る余に挨拶もせず、聲を高く子供を叱し、今晩はおまつりゆへ、よき衣物をきせたれば、此かる雨天には外へは行くべからずと命じたるに、母の命を聽かずして衣服をよごしたれば、もふ今よりはだかにして、雨のふる處へ出すべし、決して内に這入るべからずといひさま、はだかにして二ッ三ッてう／＼と其子供のあたまをたゝくゆへ、余は見るに忍びず、子供の事なれば大きなる傘にひかれて倒れたるものなれば……と詫せんとするや、其母はサァソレなればこそ、小さき傘を與ゆれば、いつも外出を好むが故に、わざと小さき傘を與へざる譯なるに、志らぬ間に大人の傘をさして出たるより、此とふりと、小言最中に子守とおぼしき下女の外より歸り來るを見るより、其母はいつ迄八百屋に買物して居たのだ、内には用事があつて困つて居たと、下女の方へ怒りの風が變たるゆへ、余はそこ／＼其場を出で歸宅したり。

田舍の町を歩行すれば、此樣なる事は度々見ることとなるが、ひなも、都も、高きも、ひくきも、おしなべて子供の敎育法をしらぬ母程あわれなるものはまた多くあるまじ。其子供は成人して如何なるものとなるか、子供の爲には美服を着せられて束縛せられんよりは、粗服を着せられて、自由に遊ぶ方がはるかの幸福ならんに、子供の心を知らぬ母の愚さよ。

手藝案內

紙細工の樣々

紙拂子

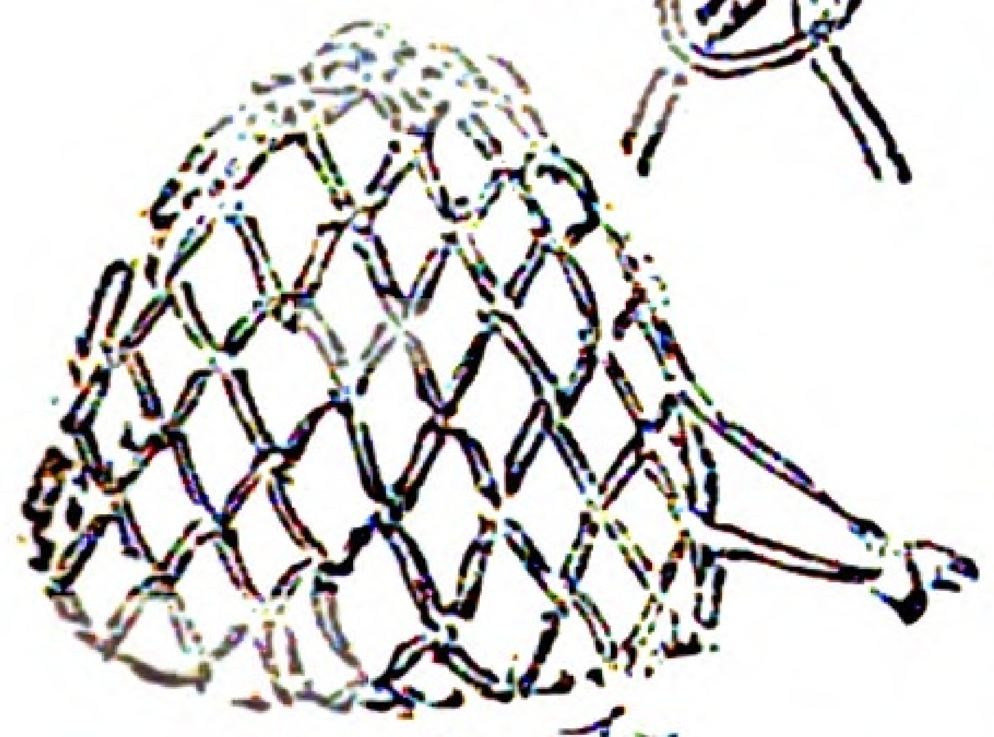
紙拂子は錢にて買はゞ荒物屋等にて一錢より二錢迄に容易に求め得らるべしと雖も、家に反古半

紙あらば誰にても容易に出來得べきものなれば、宜しく製し試みて可なり。其の作法は別に六ケ敷事にあらず。半紙の反古紙を十二筋位に截り、一筋を三ツ折にして、一尺五寸内外の雌竹を持ち來り其頭に竹又金釘を貫き、之に麻絲を結びて紙拂子の心棒と爲し、三ツ折にしたる折紙の一端に糊をつけ一廻りして竹に附しある麻絲もて強く巻きしむなり。斯の如くすること十餘回、始めて適宜の大さを得て折り返し、其上を他の麻絲もて緊縛し、竹の元には錐にて少さき孔を穿ち絲をもて環を爲らば、特に便利なるものなり。



辨當入　は二條の撚絲をもて網形に組む。今簡便なる結方を記せば圖の如し。





製作出來上れば「ログウート」（生藥屋にあり）の染料を塗りて黑色に染め、色止めには柿澁を用ゆべし。

狀嚢　多く用ゐざる家にては買ふも可ならんが、多用なる家にては妻君又は兒女の餘暇に製作し置かば、聊些なりと雖も一家の經濟なり。これは製作最も容易にして厚紙にて圖の如き模型を造り、幾十枚か重ねある紙上に置き、厚板にて壓迫し、其模型の通に裁庖刀（無ければ鋭利なる小刀にても宜し）を以て奇麗に截り裁ち、「ショウフ」糊にて着け合せ其上口には「アラビヤ」護謨を引きて製する也。

狀嚢模型

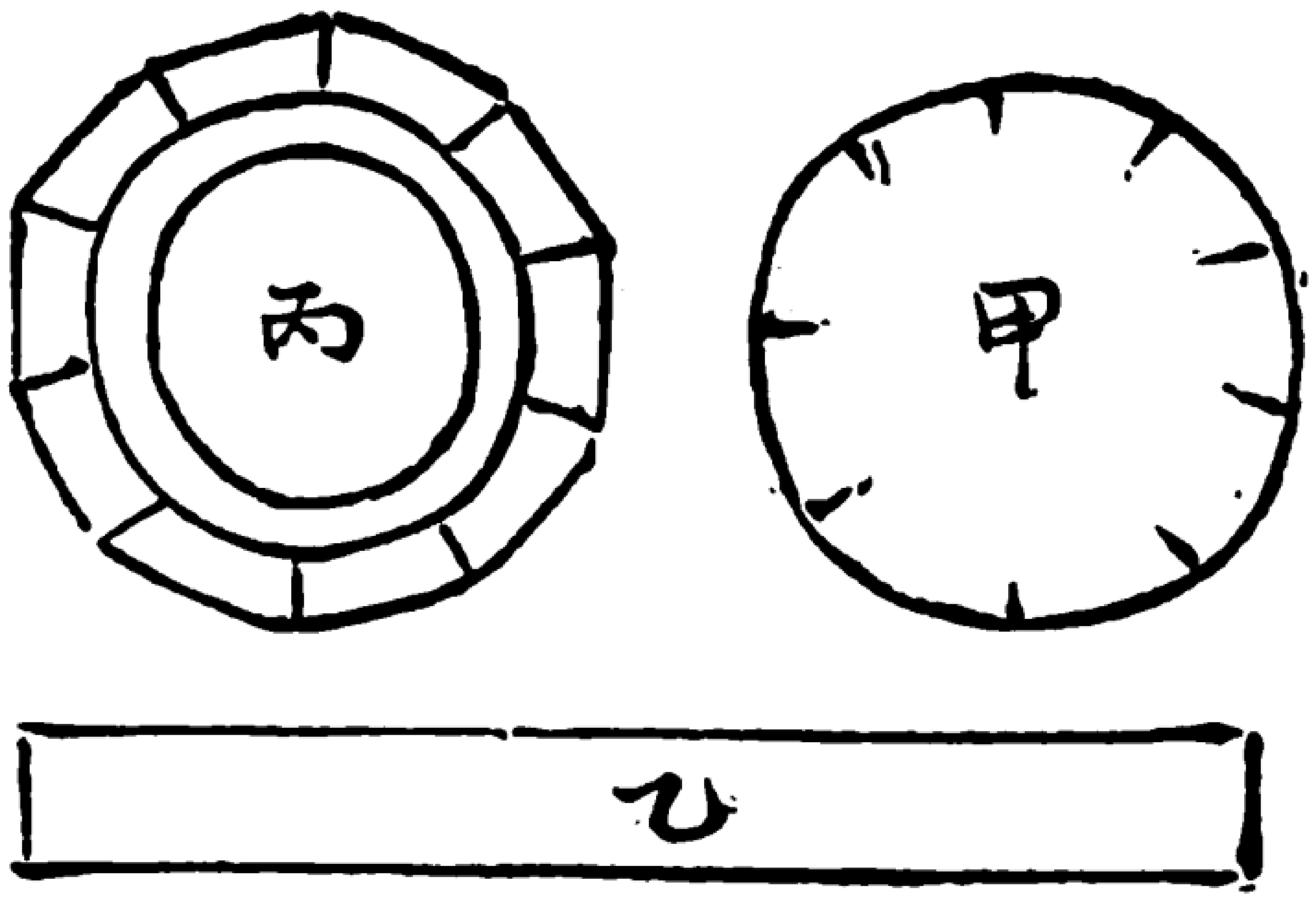


障子張　は何人も熟知する處なれば爰に記述するを要せずと雖も、早や鴻雁南飛天下の秋を報ずる氣候となりぬれば、ソロ〳〵障子の準備も然るべし。障子は幾度も張替ゆるものなれば、拂子には剝き殘りの古紙重積し、且つ棧には塵埃を殘しあれば、新しく障子張を爲さんとならば暫時水に浸し置き、水より揚げて水箒に灰をつけて故紙及び塵埃を奇麗に洗ひ落すべし。左

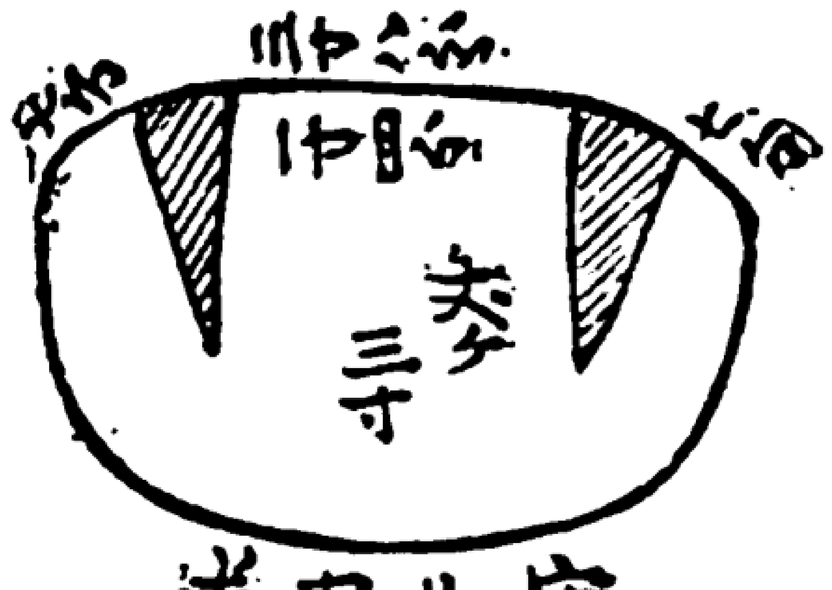
なくては折角張替の勞も甲斐なきものなり。而して障子折は暫時蔭干にし、「シヨウフ」糊と美濃紙とを以てさら／＼と一意氣に張り終り霧を吹き置くべし。但し障子張には雨含みの天氣を最も宜しと爲す。

大黑頭巾と守り巾着

當今にては何事にも毛絲流行なれども、娘の嬰兒などに花やかなる縮緬と黃八丈(綠)とを以て製したる大黑頭巾も隨分可憐なるものなり。普通の大黑頭巾ならば、八寸四方の布を取り直徑八寸の圓形に截り裁ち、甲の如く「ヒダ」を取る爲に其周圍を十に等分し、乙なる二尺四寸の布帛を其緣と爲さば丙の如き大黑頭巾仕立揚を得る。但し表に等しき裏地と些少の綿を要すと知るべし。



守り巾着を製するにも左程面倒なるものにあらず。左圖の如き寸法を用ゐ線の處を「ヒダ」に縫へば製し得らるゝなり。但し兩面の表裏四枚の布帛地を要すと知り玉へ。



守り巾着

社交一斑

西洋禮式一斑 (承前)

YH子

訪問

訪問の時刻――訪問を爲さんとするものは成るべく先方の邪魔にならぬ時に之を爲すべし。而して訪問の時間は十五分乃至二十分とし、新來客を妨くべからず。日曜祭日の訪問は不可なり。回訪する人は晝食の時刻より一時間前、即ち午前九時頃より十一時頃迄に訖るべし。之を英語にてMorning calls(朝間訪問)といふ。

訪問の品々――出產、結婚、其他目出度事を訪ふには朝間訪問を爲して長坐すべからず。不幸に遭ひし人には一週間以内に訪問すべし。實際上(親族又は親友)の訪問には別に嚴格なる規則を設けず、互に心地よき擧動を爲して足りと爲す。然れども成るべく言語動作を愼み、

召使又は小兒等の贅評を試み又は家政上に喙を容れさるを宜しさす。旅宿に止宿中の人を訪ふ時は先づ應接間に控へ居りて自己の名刺を差出す。遠方へ旅行を爲んさする時は、必らず告別訪問を爲すべし。若し其猶豫なき時は若し英語ならばT. T. L(To take leaveの召字)さ記せる狀袋に自己の名刺を封して其友人に分配す。歸鄕の節は友人の方より我を訪問す。若し先方に於て此義務を怠る時は絶交しても差支なしさいふ。又凡て訪問者は必らず粗忽の振舞あるべからず。裝飾品等に手を觸るゝは不可、若し先方不在なる時は名刺を置くか若しくは取次人に姓名を知らせて直ちに引取るを宜しさす。訪問を受けたる人は客の善惡に係らず丁重に應接し、客人の歸るに臨みて其召使を呼びて表戸を開かしむ。主人自ら之を爲すもそれは其人の勝手に任して可なり。

訪問者の心得――婦人は單身にて男子を訪ふべからず、必らず親密の者一人を伴ひ行くべし。たさへ僧侶、公證人、醫者及び銀行役員を訪問する時も亦同じ。又若き婦人は獨りにて男子の訪問を受けざるを宜しさす。餘り多人數にて訪問するは不可なり。家族多き家は幾組にも別れて行くべし。

談話

談話の要――要談を除き談話の目的は双方互に相慰め相樂むにあれば、爭論喧噪は大なる禁物なり。而して人さ談話するには如何なる事あるも温容以て人に接し苟も怒色を顯はすべからず。高聲の談笑は殊に婦人に聞苦しく頗る優美温柔の美德を失ふものなり。

談話者の心得――夜會宴會にては最も耳語を忌む。衆人の前にて餘り學問上の事柄を談すべからず。宗教、政治等の事につき我さ説を異にする人さの議論を避くべし。他人の談話を聞くには面白く思ふ体を爲すを禮さす。談話の節餘り度々先方の名を叫びかくべからず。決して其場に居合す人の友人を批評すべからず。通常の婦人に對する時に、政治上又は學術上の小六ケ敷談話を爲さず、成べく平易にして面白きを要す。衆人の前の長談義は欠伸の基さ知るべし。婦人は余程の親友の前にあらされば其良人を「私の夫」(My husband)などゝいふべからず。他人の談話を中途にて遮るは大なる無禮なり。人の家を訪ふたる時家内の風習、小兒の教育方、婢僕の使ひ方、諸雜費、主婦の身裝、仕事等を他人に吹聽するは賤むべき女さ人より嘲らるゝさ知るべし。凡て無用の談話を爲すべからず。途中又は夜會、宴會等にて友人に出逢たる時は高聲にて挨拶せず、成べく小音にて試むべし。平常の挨拶の言葉は午前十一時頃迄は「お早う」(グード、モーニング)夫より晩景までは「今日は」(グード、デー)夜間は「今晩は」(グード、イヴニング)さ言ひ寐臺に退くか又は夜中人さ相分るゝ時には「お休みなさい」(グード、ナイト)さいふ。

紹介

紹介――人を紹介するは頗る大切の事なれば輕々しく之を試むべか

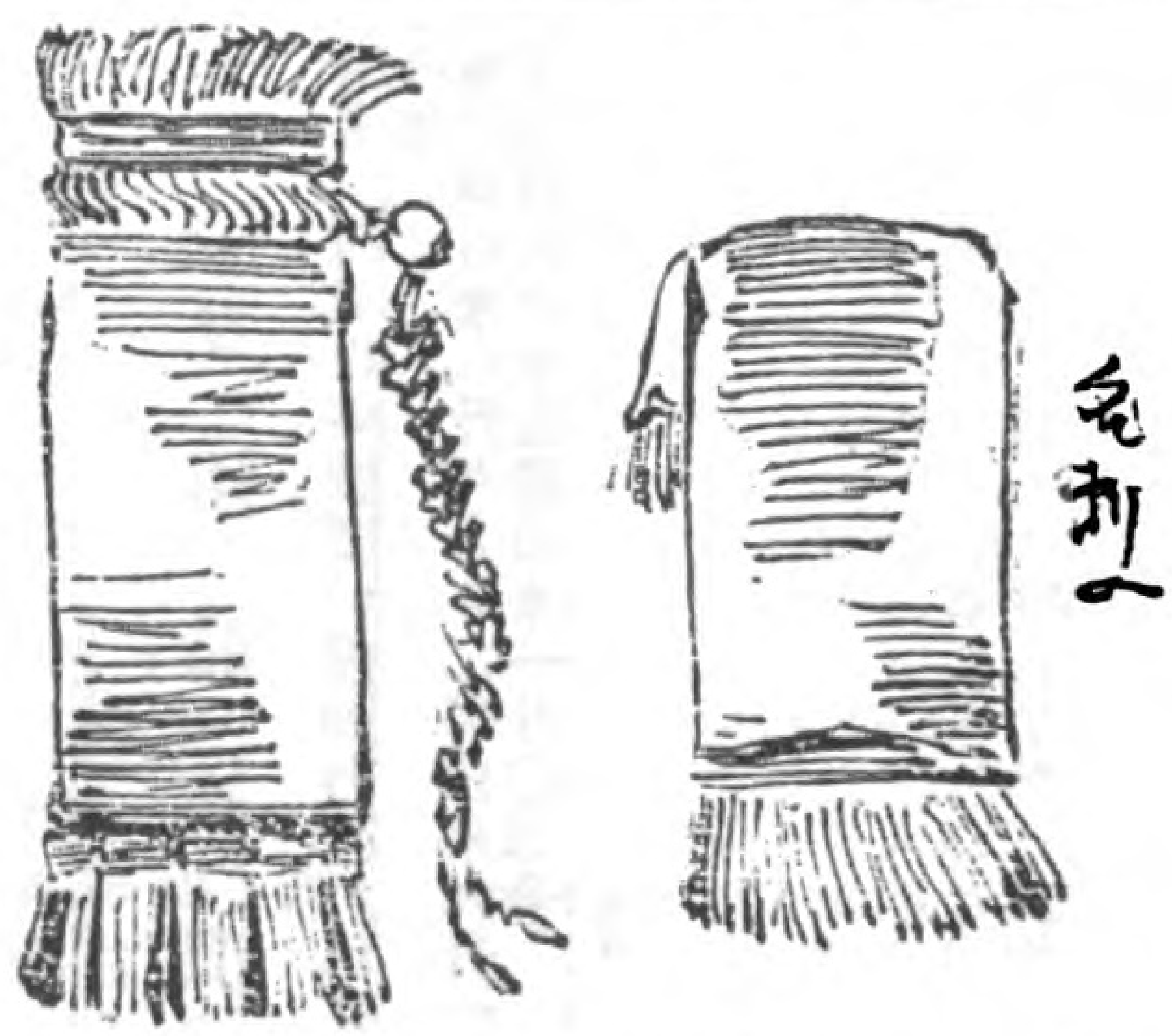
らず、手形の裏書する位に思ふべし。紹介を爲すには上位又は名譽ある人の名を先に言ひ、紳士と婦人とを引合するには婦人の名を先に呼ぶ。如何なる場合と雖も先づ婦人の承諾を得ずして人に紹介すべからず。友人の家に他人を連れ行くは必らず先方の承諾を得たる後に於てすべし。年齡、位置同格の紳士同士を引合すには（婦人同士も）次の如く挨拶して然るべし、「ウアシントン君、ポナパルト君と知合になり玉へ、ポナパルト君此人がウアシントン君です」（Mr. Washington allow me to make you alquainted with Mr Bonnaparte. Mr Washington.）。紹介されたる人は互に握手するを要す。婦人に對して助力保護を要する場合には紹介者なきも禮を正して助力保護の承諾を乞ひ其用を終らば默禮を以て引退くは彼國男子の禮法なりとかや。

流行の栞

春夢

博多織の銀貨入と名刺入

銀貨入の流行には様々あれども最も面白き近來の流行は博多織なり、これは銀貨入丈に三方を袋織にし上方の一方より銀貨を出入する様に製せしものなり、紐には緒〆をつけて口を括り中々面白き工夫なり、體裁も甚だ佳美なれば男女兩用にして可なり、此發明は筑前博多の織工東京に來りて織り始め、弗々流行し始めたり、代價は十五六錢、思の外廉なり、半面に持主の名前を墨痕にて織り交ぜあるも面白し、名刺入も銀貨入と同樣の織方にて唯だ紐の附かぬ迄なり、之も紳士社會の流行品となること見るが如し、代價は十三四錢にて購ひ得らるゝなり、



知惠袋

「よきことを中におさめてちゑ袋」より其名を得たる知惠袋、其形は圖の如し、表は「フラシユ」にて製し裏は甲斐絹を用ゐ、口は紐二つにて括り、婦人の銀貨入として流行す（中一圓小九十錢）其大なるに至りては表を繻珍裏をゴム張にして西洋刻煙草を容るゝに用ゆる由、但しこれは沙汰の外なり、此製造元



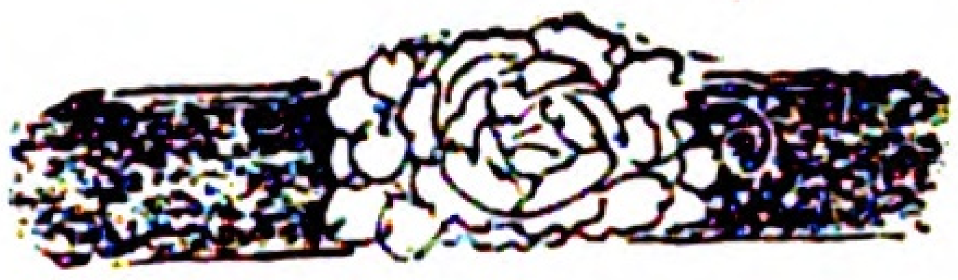
知惠袋

は銀座三丁目袋物商丸屋なり、

面白き金具

帶止の流行が近來金具附よりも寧ろ紐の方に勢力を持ちしは、其多くは金具の裏座が表に見ゆて甚だ不格好なるにして紐の優美なるに如かざるが故なり、然るに此頃圖の如き金具を工夫して賣出せしに忽ち都下の流行となれり、即ち甲圖は帶止を締めたる處にして少しも裏座の見ゆる不格好なく單に花のみを點したるが如し、乙圖は之を解き放して裏面を見せたる處にして金具は自由自在に動き得らるゝ故に體裁も佳にしてひッかけも便利なり、之に幅三分の繻珍を添ゆ金具は銀臺メッキにて三圓より五圓、他の金屬を用ゐなば倚は廉價に購ひ得らるなり、

甲



乙



平民的男帶

小倉も平民的に相違なけれども近來瓦斯絲にて博多織の如く織り爲したる男帶あり、一見本場博多と異ならず、勿論光澤は本場に劣れども小倉に優ること萬々なり、而して代價は七十錢より九十錢の間に購ひ得らる、

衛生ねまき



衛生ねまき

圖は即ち衛生ねまきにして柔かき木綿又は「メリヤス」にて製せらる、此衛生ねまきを着て床に就かば惡寒等に冐さるゝ氣遣なし、昨今の如き寢苦しき時候には得て寢冷の恐あれば、夜間此一着を被らば夫等の心配尠かるべし、

日用品物價

◎白米　前報以來幾度か變動ありたれども目下の處にては大抵同樣即ち左の如し

●一等白米八升九合●二等白米九升一合●三等白米九升四合●四等白米九升九合●五等白米一斗〇三合

◎雜穀　前報より余程上進したり挽割麥は一升小賣六錢五厘より七錢五厘まで其他は次の如し

●新本實麥三斗一升五合●新脇場大麥三斗三升●新粿麥二斗一升五合●相州小麥一斗八升●同船橋小麥一斗八升五合●同上州小麥一斗八升五合●同常州小麥一斗八升五合●下總小麥一斗八升八合●千葉小麥一斗八升七合●札入竹林麥一六八並一八五●上割麥一七〇並一八五●室関小豆一斗三升二合●粕壁薄色小豆一斗三升

◎鹽　は小賣に於ては變らず然し大相場には些少上進したり

●赤穗三俵六分●大鹽弁入家三俵六分五厘●本齋五俵四分●新齋五俵九分

○炭、油　餘り變動なし、炭はドカすにて大俵二十二三錢より二十七錢迄、石油は一升十錢より十錢五厘
○鷄卵　未だ下落せず小賣大玉一錢七八厘中玉一錢五六厘小玉一錢二三厘
○馬鈴薯　昨今は一貫目十錢より十五錢まで
○初栗　二十四五個入一笊十五錢より二十錢迄の相場なり

雜錄

道珠顆々

己れと人

小兒は世界は己れによりて存在すと信ず己れあるを知る如くまた他あるを知るの思想を有する者は是れ已に大人なり

皇女　ウールソー

愛

愛とは何ぞや並し衆人陥札を購ひ一痴漢勝を得る所の福引のみ

ジヤンカロル

沈默

人は恰も魚の如し口を閉し居る魚は危難に陷ること稀なり

セフエルソン

生兒の死亡と父母の年齢

統計家曰く、小兒の死亡と父母の年齢との關係を見るに、妊娠中に死するものは出産後に死するものよりは母の年齢に大關係を有し早婚の不利なる事知らる。而して父の年齢はさしたる關係なけれど、亦同様なる理由を説明するに足るものありて、父の齢三十年より四十年間に擧げたる兒子最も強く、父の齢二十五年以下に生れたるものは母の二十年以下に生れたるものとひとしく死亡す。又父母年齢の差は孰れが年長げたるもとして關係なく、父母年齢十年の差は最も強壯なる兒子を擧ぐるの界なりと。

	年齢	死亡兒百に付妊娠中に原因するもの
母	二十年以下	三七・三二
	二十年以上	二一・〇九
	三十年以上	一四・〇四
	三十五年以上	一五・三五
父	二十五年以下	二〇・四一
	二十五年以上	一八・一七
	三十年以上	一七・〇五
	四十年以上	二一・四六
	五十年以上	一〇・一四

男兒と女兒

世上の常として女兒より男兒の方多く生まるゝ事なるが、こは父と母との勢力上よりしてや然るにあらんか。而して父より母の年長けたるものには女兒多く、私生兒にも女兒の方多し。又食用品の騰貴する事

ありて婦人をして家計上に頗る體力心力を損せしむる時は、其翌年は必ず女兒の出產多きよしに聞く。

談叢

かへり花

古人も『君子之德風也、小人の德草也』といひき。暖かき春の日に逢ひては、意地わるげにすねたる枝も美はしき花の咲き出でつべし。良き爲政者の下に良き國民多きも自から道理なり。

細井甚三郎、名は德民、平洲と號したりし人は、もと尾張の農家の兒なりしが、志を立てゝ大に學び、學ぶ所を直に實行して德行家の名高く、米澤の上杉鷹山公（治憲）に任用せられ、德政四境に及びたりき。

諄々たる彼が敎化は能く匹夫匹婦を化したるのみならず、彼は自家の家庭に於ても、誠勅懇懇、藹乎として掬すべき其情、温乎として樂むべき其容、能く一家打揃ふて、和氣雍々たらしめき。

而して彼が露晃春を行て、甘棠の下屋家に寄せたる其書の如き、以て君子人なる彼を見るべく、以て彼が生平の用意を見るべく、又以て彼が家庭を見、幷せて彼が及ぼしたる德化をも見るべしといふ。

今其一書に左の如きものあり。

芥安賀村に三輪と申候百姓の妻、五十七歳になり申候。夫は十八の時より病身に御座候て、床につき居申候。今年六十四歳になり候よし。十八歳より夫へ貞節を立候間、近邊にててい女の名かくれなく候。呼出し逢申候へば、有りがたがり泣き申候。やがて上よりも御ほうびの有之候はんと存候。十八歳より後家同前に夫を大切にいたし、五十七歳になり申候。誠にめづらしき貞節に御座候。しほらしく俳諧をよくいたし候。拙者へ發句をくれ申候。

かへり花さくや日の恩土地の恩。

といたしくれ申候。手もよくかき、所の娘どもへ指南いたし申候。三わが弟子になり候娘どもは、水際立て行儀正しく候よし、所のものども吹聴致し候。拙者もかんしんの餘りに、歌をよみつかはし申候。

雪をはらふ嵐の風の寒むけさに、
　松のみどりの色も一としほ。

とよみつかはし申候。是は三十年餘夫につかへ、貧苦かんなんをいたし候ゆゑ、貞女のみさほもいよ〱あらはれ申候との心にて候。おみほ（彼が女）へ御聞かせ可被成候。扨々御徳の難有さ、今様の土民の女房まで道を守り、やさしき女も追々あらはれ、誠によその國にはなき事どもに候。子供けがさせぬやうにかまへ、よく〱御申付可被成候。めでたく〱かしこ。

十月廿一日　　平洲

おさめ（彼が妻）とのへ

ことしは、大分としもより、氣もくせ〱といたし候得ども、在郷へ參り、人々のよくなりたる様を見申候得ば、ひたひのしはも大分のび、氣もわく〱となり申候。

枯蘆

熊本の細川銀臺公（重賢）は、上杉鷹山公と共に、當時の賢諸侯として世に名高き君なりき。侯は兄宗孝侯の後を承け、あつく養母靜證院につかへまゐらせ、孝道を以て自ら群下を率ゐたまひけり。侯在國の年は、嚴寒の頃鷹狩して鴨をとり、腸を去りて小豆を充たし、以て色味のかはらざるやうにし、遥々江戸の靜證院に送りこし、之を寒中の見舞とするを例としたまへり。而して其一年の殘し置きたる鴨をば、飛脚の江戸に着きたらん日を數へて調理させ、恭

しく坐して之を食し、せめてもの侍養の意を致したまへるにや、用意の程も知るべかりき。

安永九年の秋の暮、たゞさへも物悲しと聞きつるを、國におはしましける侯の許には、江戸の使者に由て驚くべき報知の齎らし來られぬ。其は靜證院の重き疾に臥したまへる音信なりき。

打驚ろきたまへる侯は、直に使者を江戸に遣り、出府の許を幕府に請ひぬ。當時は幕府の掟として、身堂々たる大諸侯にありながら、心のまゝに人の病を問ふことさへ能はざりしなり。

事の成否もしらぬ火の筑紫の海の彼方より、遠く鷄が鳴く東の空を見給ひつゝ、指折り數へて待ちたまひけるもあやなしや。十月四日といふに、使者は院の空しくなりたまへるよしを告げこしける。

侯いたく打歎げきて斯くなん口ずさみたまひき。

　枯蘆の塒も寒し、夜の鶴。

ア、、高きも卑きもをしなべて、親を思ひ子をしのぶ情の誠はかはらざりけり。

時事一斑

家庭雜誌の新面目

人生誕生節に逢ふて自ら其成長を顧みる、世復たこれより樂しきものあらんや。

吾人が家庭雜誌を作て、第二維新の地をなさんとし、叫て家庭の改革と言ふや、世人の之を歡迎するもの吾人の豫想に過ぎ、初號の如きは爲に數版して、忽ちに非常なる大部數を印刷せざるべからざるに至りぬ。

爾來家庭雜誌は駸々として進歩の途上を走り、初度の誕生節たる今日の如き、已に毎月一回の發兌を増して十日二十五日の兩回發兌となすの止むべからずして、將に方に讀者と新なる面目を以て相見んとす。

家庭の改革はもと目覺ましきものにあらず、健見をも要せず、血を見るをも要せず、唯飲食言語の間に知らず識らずして決行せざるべきものなれば、吾人が嘗て叫びたる改革の聲の果して世に反響したるや否やは見るべからずと雖、吾人は我が家庭雜誌の短時日間に非常なる發達をなしたるを見て、竊に自ら其德の孤ならざるを知て相喜ばざるはあらざるなり。

任愈大にして責愈重し、吾人豈自ら勵まざらんや。今年誕辰此くの如くして迎ふ、明年誕辰知らず如何ぞ、吾人竊に期する所なきにあらず。

修　身　敎　育

文部大臣は令を傳へて、修身敎育は、師道に由て擧るを得べく、敎科書に依賴すべからざるの意と、古今人の善行にして或は矯激に流れて中庸を失ひ又は變に處する權道にして史上の美談たるものは宜しく注意すべきの旨とを告げたり。是れ吾人が常に唱道する所とほゞ同じ、吾人は其の切に實行せられんことを望むのみ。

天何ぞ濃州を禍するの數なる

洪水、地震、又洪水。去月十七日より六日間の大雨は岐阜縣下に氾濫したり。死。傷。悲。泣。一望の田々稲腐りて黄なり、黒なり。

參考する所ありて可なり

我邦公賣淫者の數は、實に左の如くあり、而して年々漸く增加するの傾きあり。世の賣淫國たるを惡むもの、參考する所ありて可なり。

年度	娼妓の數	人口千に付娼妓數
明治廿四年	三、〇五〇三	〇・七三
同廿三年	三、一〇九一	〇・七五
同廿二年	二、九六九七	〇・七二
同廿一年	三、二四六三	〇・八〇
同二十年	二、四九九九	〇・六三
同十九年	二、一四六二	〇・五五
同十八年	二、〇七三〇	〇・五四
同十七年	二、三三五〇	〇・六一

華族と家庭改革

御家騒動なるもの近頃多く世に噂さる、皆侍妾家令等に因縁せざるなし。然らば家庭改革の用は首として華族に要せらるゝにあらずや。

秋風起

秋風起る、世間が安息より甦る時節は來れり。暑を溪山に避けたるものも歸るなり、熱を海水に滌ぎしものも歸るなり、慈親の愛情を忘れかねて歸省したるものも來るなり。而して彼等は皆樂みに滿ち、健康に飽て來るなり。ア、時は新なる爲すあるの時を將て彼等が前に置ける哉。ア、爲すあるの時、爲すあるの時。



大丈人ニ此書謹呈
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

家庭雜誌第拾三號附錄

（明治二十六年九月十日發兌）

文藝



家庭に於ける吉田松陰

蘇峰生

余か十一二歳の頃かと覺ゆ、或人の許にて殉難草なる小冊子を瞥見しつゝありしに、その中に吉田松陰辭世の歌として、

親思ふ心にまさる親心
今日の音つれ何と聞くらん

とあり。何事をも辨へぬ童心にも、何となく感ある心地して、幾度か繰り返し打ち吟し、それより斯の歌と共に、吉田松陰の名は、余か腦中に深く刻まれぬ。

明治十七年の夏、友人六七輩相携へて、土佐に遊へり。偶ま同行者の一人高知市中にて、幽室文稿を購ふものあり。余之を讀み、隨讀隨批、覺へすその卷を塗抹し、而して一讀、再讀、三讀、四讀、遂にその卷を釋くに忍ひさりき。

幽室文稿は、吉田松陰の活ける影見なり、所謂る『猛士可レ罪處、全在二于此一、其可レ功處、亦全在二于此一』とは、松陰か自から欺かさる斯書の評判なり。斯書は安政五年戊午の正月より同しく六年己未の五月彼か安政疑獄の大渦旋に廻き込まれて江戸に檻送せらるゝ迄、僅かに一年半に充たぬ記錄なれとも、其の文字は悉く血を以て書かれ、其の言葉は概ね豫言者の口より出てたるものゝ如し。中にはたわひもなき事、小兒らしき事、若くは可笑しき事さへあれとも、天眞爛熳、瑕瑜相ひ掩はさる彼人の本色は却て此れか爲めに分明に發揮せられたり。或る意味よりすれは、斯書はオーゴスチン若しくはルーソの懺悔錄に多く愧ちさる懺悔錄と云ふも、溢美にあらさる可し。

余は幽室文稿によりて、吉田松陰を知れり。余は彼の短所を知ると共に、深く彼の愛す可きを知れり。彼の高潔新猛なる情火―父母に對しては孝となり。兄弟姉妹に對しては友となり、朋友子弟に對しては信となり、國に對しては愛國となり、君に對しては忠となるの情火は、余を

して彼の短所をさへ忘れしむるに到れり。特に余を動したるは松下村塾血盟書を作りて京師に入りて間部下總守を要撃せんとしたる當時、その父、叔父、兄に與へたるの書簡なりき。書を讀んで泣きしもの、余か是迄の生涯には、有數の事にして、斯書簡は則ち其の一なりき。

余高知より東京に行く途次、京都に入り雨を衝ひて靈山に上り、元治甲子の亂に討死したる久坂、入江、寺島等の墓を吊し、低徊去る能はす、嘗て蕪詩を賦して曰く、

三十六峰雲漠々、　洛中洛外雨紛々、
破簦短褐人揮涙、　秋冷殉難烈士墳、

韵調未た節に入らすと雖、感慨の情乃ち知る可し。余は彼等の英魂を吊ふにつけても、其の主動者たる松陰を懐ふたりき。彼の朋友に於けるを見れは、その家庭に於ける亦た知る可し。國を懐ふものは、家を懐はす、朋友を懐ふものは、父母兄弟姉妹を懐はす、世豈に斯る不倫の事あらんや。余は彼か辭世の句を念ひ出して、其の感化の同志の青年に及ひたるの偶然ならさるを知れり。

頃ろ昨年來屬稿したる吉田松陰論を校定するに際し、楫取男爵を訪ひ屢は松陰の事に就き、與り聞くを得たり。男爵は所謂る幽室文稿中の小田村士毅にして、松陰の妹夫、而して松陰の妹たるその夫人も今尚ほ在り。

男爵曰く、松陰杉氏より出てゝ吉田氏を繼く、吉田氏は其の叔父（父の弟）の家なり。然れとも養

父夙く死し、松陰亦た妻子なし、故に身杉氏に寄れり。杉氏の家友愛輯睦、質素にして勤克、其の父若しくは叔父の如きも、役所より歸れば、直ちに袴を脫して田圃に出でゝ耕作し、母の如きは自から馬を牧するに到る。松陰の幼き、書を挾んで、壠圃の上に在り、其の字義解せさるものあれば、直ちに父若しくは叔父に附て質せりと。

又た一家の慶事には、家内打ち寄り手製の團子杯拵へ、相共に驩を盡して、餘所の見る目も床敷かりきと若し或は村塾の生徒にて困究のものあれば、三椀の食事は二椀に減しても、之を救恵するが、松陰一家の風なりしと。

試みに左に揭くる書簡を見よ、是れ松陰か米艦に乘して、海外に遊はんとしたるの策破れて長門野山の獄中に在る頃、妹に寄せたるものなり。時は安政元年十二月なりとす、細註は記者の挿入に係る

『十一月廿七日と日つけ御座候御手紙并九年母みかんかつをぶしともに昨晩相とゞきかこひ内はともしくらく候得共大かい相わかり候（獄中の情景觀るが如し）まゝそもじの心の中をさつしやりなみだが出てやみかね夜着をかぶりてふせり候得共いよ〳〵涙にむせひついに夫なりに寐入候得共まなく目かさめよもすがら寐入り不申色々なる事思ひ出し申候（松陰其人觀ふべし）そもじや父母樣やあに樣の御かけにてきものもあたゝかに給物もゆたかにあまつさへ筆紙書物まて何一ツふそくこれなく寒さにもまけ不申候間御安心可被成そもし御家おばさまも御なくなりなされ候事なれはそもじ萬たん心悪候はては相すまぬ事ことにおじさまも

年ましよわい高く被爲成事ゆへ別して御孝養を盡したべかし又萬子も日々ふとり可申候得ば心を用ひてそだて候へ赤穴のばあさまは御まめに候哉御老人の御事萬事氣をつけて上け候へかゝる御老人は家の重寶と申ものにて金にも玉にもかへらるゝものに無之候そもじ事はいとけなき折より心得よろしきものとおもひ一しほ親く思ひしか此ほと御文拜しいらさる事まて申遣し候なり

別にくたらぬ事三四まいしたゝめつかはし候間おとゝさまか梅兄樣に讀よき樣に寫しもらひ少しは心得の種にもなり可申候扨御たよりの中にも手習よみものなとは心かけ候へ正月には一日はやぶ入り出來可申哉あに樣の御休日をゑらび參り候て心得になる噺とも聞候へ拙も其日分り候はゝ昔噺なりとも認め遣し可申又正月にはいつくもつまらぬ遊ひ事をすることに候間それより何か心得になるほんなりとも讀てもらひ候へ貝原先生の大和俗訓家道訓なとは丸き耳にもよくきこゆるものに候又淨瑠璃ほんなとも心得ありて聞き候へは隨分役にたつものに候扨又別に認めたる文に付うたをよみ候こゝにしるし侍りぬ

賴母しや誠の心通ふらん文見ぬさきに君を思ひて

右したゝめたるはそもしを思ひ候より筆をとりぬるが其夜そもじの文の到來せしは定めて誠の心文より先に參りたる哉とたのもしくそんじ候まゝかくよみたり〔友情温至〕

三日

別紙〔以上一緒の女訓さして讀む可し〕

凡人の子のかしこきもおろかなるもよきもあしきも大ていは父母のをしへによる事なり就中男子は多くは母のをしへを受くることまた其大がいなり作去男子女子ともに十歳以下は母の敎を受くること一しほ多く或は父はおごそかに母はひたし父は常に外に出て母は常に内にあれはなり〔母の家庭敎育に大切なる事〕然は子の賢愚善惡に關する所なれは母の敎へゆるかせにすへからす併し其敎といふも十歳以下小兒の事なれは言語にてさとすへきにあらす只正しきを以てかんずるの外あるへからす〔家庭敎育の主眼〕昔聖人の作法には胎敎と申事あり子胎内に舍れは母は言語立居より給べもの杯に至るまて萬事心を用ひ正しからぬ事なき樣にすれは生れる子形躰正しく器量人に勝るとなり物しらぬ人の心にて胎内に舍れるみきゝもせす物も言はぬもののゆへ母か行正しくしたりとてなとか通すへきと思ふべけれともこは道理を知らぬ故合點ゆかぬなり凡人は天地の正しき氣を得て形を拵ひ天地の正しき理を得て心を拵へたるものなれは正しきは習はす敎へすして自然持得る道具なりゆへに母の行正しければ自然かんずる事更に疑ふへきにあらす是を正しきを感すると申なりまして生れ出て目も見へ耳も聞へ口も物いふに至りてはたとへ小兒なれはとて何とて正しきに感ぜさるへきを扨また正しきは人の持前とは申せとも人は至てさときものゆへ正しからぬ事に感するも亦速かなり能々心得へきことならすや因て玆に人の母たるものゝ行ふへ

き大切なることを記す此他ちいさき事は記さずとも人々辨ふ所なれは略し置ぬ

◎いろはたとへにも氏よりそたちと申事あり子をそたつることは大切なる事なり

一夫を敬ひ舅姑に事ふるは大切なる事にて婦たる者の行之れに過たる事なし然とも是は誰しも心得ぬるものなれは申さすともすむへし扨肝要は元祖以下代々の先祖を敬ふへし（祖先を敬するは、家風を保つ所以、家も亦た國の如く歴史あり、祖先を敬するは、其の家聲を墜さゞる所以）先祖をゆるかせにすれは其家必衰ふるものなり凡人の家の先祖と申すものは或は馬に乗り槍を提け數度の戰場に身命を擲ち主恩の爲に働きたるか或は數十年役義を精勵し尋常ならぬ績を立てたるか或は武藝人に勝れたるか文學世にきこえたるか何にもせよ一方ならぬことありてこそ百石なり五十石なり知行を賜り子孫に傳ふるなり其以下の先祖と申ものも夫々御奉公其筋を遂けたれはこそ元祖同様に知行を賜りぬる事なりこの處を能々考へこの一粒も先祖の御蔭と申ことを寢ても覺めても忘るゝ事なくその正月き命日には先祖の事を思ひ出し身を潔くし躰を清め是を祭り奉りなとすへし又一事を行ふにも先祖へ告奉りて後行ふ様にすへし左すれは自分邪事なくする事なす事皆道理に叶ひて其家自ら繁昌するものなり若し此心得なく己が心にまかせて吾儘一はいを働きなは如何で其家衰微せさらんや聖人の教は死去りて世に居玉はぬ親先祖に事ふる現在の親祖父に事ふ如くすへしとあり今親祖父現在し玉へは何事も思召を伺てこそ行ふへきに世に居玉はぬとて先祖の御心も察し奉らす吾儘許り働

くは是を先祖を死せりと申し勿躰なき事ともなり

婦人は己か生れたる家を出て人の家にゆきたる身なり然れは己か生れたる家は先祖の大切なる事は生れ落るときより辨へ知るへけれとやゝもすれは行きたる家は先祖の大切なるに思ひ付ぬ事もあらん能々心得へし人の家に行きたる家か己か家なり故に其家の先祖は己か先祖なりゆるかせにする事なかれ又先祖の行狀功績等をも委しく心得置き子供等へ昔噺の如く噺し聞すへし大に益あることなり〔家庭教育に於ける手近き修身科〕

一神明を崇め尊ふべし大日本國と申國は神國と申奉て神々樣の開き玉へる御國なり然れはこの尊き御國に生れたるものは貴となく賤となく神々樣をおろそかにしてはすまぬ事なり併し世俗にも神信心といふ事をする人もあれと大ていは心得違ふなり神前に詣りて柏手を打ち立て身出世を祈りたり長命富貴を祈りたりするは皆大間違なり神と申すものは正直なるを好み又清淨なるを好み玉ふ夫故神を拜むには先己か心を正直にして又己か躰を清淨にして外に何心もなくたゞ謹み拜むべし是を誠の神信心と申すなり其信心か積り行けは二六時中己か心か正直にて躰か清淨なる是を德と申すなり菅丞相の御歌に

心たに誠の道にかなひなは祈らすとても神や守らん

又俗語に神は正直の頭に舍るといゝ信あれは德ありといふ能々考へて見るべし扨て又佛と申ものは信仰するに及はぬ事なりされと強ち人にさからふてそしるも入らぬ事なり一

親族を睦くする事大切なり是も大ていの人の心得たる事なり從兄弟と申ものの兄弟へさしつゝいて親しむべき事なり然るに世の中從兄弟となれは甚疎きもの多し能々考て見るべし吾か從兄弟と申は父母には姪なり祖父母より見れは同しく孫なり左すれは父母祖父母の心になりて見れは從兄弟は決してうとくはならぬなり併なから從兄弟のうときと申は元來父母祖父母の敎の行屆かぬなり子を敎ゆるものの心得へきなり凡そ人の力と思ふものは兄弟に過るはなし若し不幸にして兄弟なきものは從兄弟にしくはなし從兄弟の年齡も互に似寄りものの學ひしては師匠より敎を受けし書をさらへ事を相談しては父母の命をそむかぬ如く計ふは皆他人にて屆く事にあらす此處を能々考へき事なり

玆に一の物語あり吐谷渾と申夷に阿豺と申す人子二十人あり病氣大切なりけれは弟の慕利延を召て申には汝一本の矢をとりて折れ慕利延これを折りけれはまた申には汝十九本の矢をとりて折れ慕利延折ること能はす阿豺申には汝等能心得よ一本なれは折れやすし數本集れは折りかたし皆々一致して國を固めよかしと國にても家にても道理は同し事なりとかく婦人の言よりして親族不和となること多し忘るへからす

右に記しぬるは先祖を尊むと神明を崇むる親族を睦しくすると以上三事なり是か子供を育つるには大切なる事なり父母たるもの此行あれは子供は誰敎へるとなく自ら正しき事を見習ひてかしこくもよくもなるものなり扨また子供の成長して人の中ことも耳に入れ

候樣に成からは右等の事を本とし古今の種々なる物語りを致しきかすへし子供の時聞たる事は年を取ても忘れぬものなれは埒もなき事を申聞るよりは少なりとも善き事を聞するにしくはなし〔人の親たるもの能く記臆せよ〕杉の家法に世の及ひかたき美事あり第一には先祖を尊ひ玉ひ第二には神明を崇め玉ひ第三には親族を睦しくし玉ひ第四には文字を好み玉ひ第五には佛法に惑ひ玉はす第六には田畠の事を親らし玉ふの類なり〔松陰家庭の活ける寫眞〕是等の事吾みな兄弟の仰き法とるへき處なり皆々能心懸へし是則孝行と申ものなり』。

是れ實に彼か二十五歳の時にものしたるもの、其の深き言外の眞情は云ふも愚ろか、其の用意の懇切周到なる、如何に國家を懐ふの彼は、斯く迄家庭の事に濃かなる思を凝たるぞ。

又た安政六年四月十三日、同しく野山の獄中より其の妹に與へたる書簡あり。

『此間は御文下され觀音樣の御せん米三日のうち精進にていたゝき候樣との御事御深切の御こゝろさし感入申候精進潔齋なとは隨分心の堅まり候ものにて宜敷事とそんし候に付拙者も二月廿五日より三月晦日まて少々志の候へは酒肴共一向給不申其の間一度靈神樣御祭のものも頂戴致候はかりにて御座候まして三日の精進は左まて六ヶ敷事にも無之御深切の事に候へは相果し度存候得共當所にては當り前の精進の外にまた精進と申候得は速中又は番人共何故かと怪しみ尋ね候に付夫を夫と相こたへる事面とうに存候八日は幸御精日なれば其日一同にいたゝき申候〔赤子の心を見るが如し、松陰の天眞爛漫たる處此に在り〕抑觀音樣信仰せよとの事

は定めて禍をよけるためにあるべく是には大きに論ある事に候得は委細申進べく候拙者未た觀音經は讀不申候得共法華經第二十五の巻普門品と申篇に悉く觀音力申事尊大に陳て有之候大意は觀音を念じ候へば縄目にかゝり候得共忽ちぶつ〳〵と縄が切れ人屋へ捕われ候へは忽ち錠鑓かはづれ首の坐へ直り候得ば忽ち刀がちん〳〵に折れる者と申てこれあり候是は拙者江戸の人屋にて此經は幾度もくり返し讀て見候得共始終此趣にて夫故凡人は是より難有事はないど信仰するも無理はなく候去りながら佛のをしへは奇妙な仕置にて大乘小乘と二つ分ちて小乘は下こんの人の敎大乘は上樣の人へ敎へと定め有之候小乘にて申候得は觀音は右の經文の通りのものと心得たもの信仰さするに御坐候是は人に信を起さする爲なり信ををこさするとは一心に難有事じやとのみ思込み餘念他慮なき事にて一心不亂と申も此事なり人は一心不亂になりさへすれば何事に臨み候てもちつとも頓着はなく縄目も人屋も首の坐も平氣になれ候から世の中に如何に難題苦患の候てもそれに怠轉して不忠不孝無禮無道等仕る氣遣はないされど初から凡夫に一心不亂じやの不怠轉じやのと申聞せてもさつぱり耳に入らぬもの故に假りに觀音樣を拵て人の信を起させる敎に御坐候是を方便とも申候是に於て法華經の都上のたとへ有之至極面白候得共事長ければ略申候扨又大乘と申候時は出世法と申事が肝要にて御坐候出世と申候ても立身出世なと申事には無御坐候其初めは釋迦が天竺王の若殿に候處若き時から感心のつよ

き人にて老人を見れば吾身も往先は老人に成るかと悲み死人を見ては吾身も往先は死のふかと悲しみ虫けらの死んだの草木の枯れたのまでに悲しみを起し是非に生老病死か此世の習なれば此世を出ねばすまぬと志を立て年二十五の時位を棄て山へ入り右の生老病死を免れる修行をしに參られ候

是にも色々難有話あれども事長ければ略す

左候て三十出山とて僅か五年の間に生老病死を免かれる事を悟り生れもせねは老もせす病も死もせぬ事を悟て出て來て夫から世の人を教化せられた是が出世の法じや故に出世せねば濟世が出來ぬと申も是事なり濟世といふは則此世の人を濟度する事に御坐候扨其死なぬと申は近く申さば釋迦の孔子のと申御方には今日まで生て御坐る故人が尊とみもすれば難有がりもそれもする果して死なぬてはないか〔一種靈魂不滅の觀念〕

孔子の教もやはり此通りに候得共事長ければ略す

死なぬ人なれは細目も人屋も首の坐も前に申觀音經の通りではこさらぬか楠正成公じやの大石良雄じやのと申人には刃ものに身を失われ候得共今以て生てごさるのは刀のちんちんに折れた證據でござる陳又禍福如繩といふ事を御さとりがよろしく候禍は福の種福は禍の種に候人間萬事塞翁馬に御坐候

此わけは物知りに問ふて知るべし

拙者なんと人屋にて死候得ば禍のやうなものに候得共又一方には學問も出來己の爲人のため後の世へも殘り且死なぬ人々の仲間入も出來候得者福此上もない事にて〔武個の業天主義〕人屋を出て候得者禍のこやうやら知れ不申は勿論其禍の中に又福も交り候得共所せん一生の間難儀さいすれば先の福がある事なり何の效けんもない事に觀音へ賴て福を求める樣の事は本本〳〵無益に存候尤も右の通りに申候へは身勝手な申分不孝な申分とも御存があろうこゝに又論がある易の道は滿盈と申事を大にきろうなり某に七人兄弟中に拙者は罪人芳は夭死敏は啞に否樣の惡樣なものなれど又跡四人は可なりに世を過られ特に兄樣そもじ小田村は兩人づゝも子供があれば不足は申されぬ世の中の六七人も兄弟のある家を見くらへよ是程に參らぬ家は多いものの近くはそもじの家にても高須樣にても兄弟內には否樣の惡い人も隨分あるもの然れば父母兄弟の代りに拙者芳敏の三人が禍をかほうたと御思ひ候得者父母樣の御心もすめる譯で御坐らぬか且つ杉は隨分多福の家なれは拙者の身上よりは却つて杉が氣遣ひなものじやないか拙者身上は前に申通りつめが牢死、牢死しても死なぬ仲間なれは後の世の福はずゐぶんあるが杉は今では御父子も御役にて何も不足のない中なれは子供等がいつも此樣なものと思ふて昔山宅にて父樣母樣の晝夜御苦勞なされた事を話して聞かせても眞とは思わぬ程なれば此先五十年七十年の事を得と手を組んで案して見やれ氣遣なものではないか〔忠孝の言、忠孝の人〕去年も端午の客の多のに人は目出度

目出度と婚貌すれど拙者は先の先が氣遣でたまらんから始終稽古場へかゞんて人の知らぬ所にては獨り落涙した程の事でありた［家庭に於ける松陰の本色］若や萬一小太郎でも父祖に似ぬやうな事か有たら杉の家も危い危い父母様の御苦勞を知て居るもの兄弟にてもそもじまでじや小田村でさへ山宅の事はよくは覺いまいまして久坂なんとは尙以ての事されば拙者の氣遣に觀音様を念ずるよりは兄弟をいめいの間へ樂が苦の種福は禍の本と申事を得と申してきかせる方が肝要しやそして又一つ拙者不孝ながら孝に當る事がある兄弟内に一人でも否様の惡ひ人があると跡の兄弟自然と心が和て孝行〳〵でもする様になる兄弟もむつまじくなるものじや夫で是からは拙者は兄弟の代に此世の禍を受合から兄弟中は拙者の代りに父母へ孝行して呉れるがよい左様あれば縮る所兄弟中も皆よくなりて果は父母様の御仕合又子供が見習へ候得は子孫の爲是程目出度事はないてはないか［聖賢の心地、家庭に於ける松陰此の如し］能々御勘辨にて小田村久坂なんとへも此文を見せ佛法信仰はよい事じやが佛法にまよわぬ様に心學本なりと折々御見候かし心學本に

長閑さよ願ひなき身の神詣

神願ふよりは身で行ふがよろしく候」

十三日

是れ彼が三十歳の波風荒き生涯を終り、死に就かんとして、江戸に赴く一月前の書簡なり。人

の將に死せんとする其の言や善し、寔に以上の二書簡は、一部の女子敎訓にして、家庭の金誡なり。其の言は取捨せざる可らざるものなきにあらずと雖、其の精神は、何人も服膺せざる可らざる所なり。

彼れ年少氣銳、頭熱し意昂る、時事の日に非なるを見て、身を挺して國難を濟はんとするの念、益〻縱橫す。惟ふに其の方寸の胸間、萬疊の波瀾を捲き起しつゝある可し、知らず何の餘裕あれば、斯く迄懇到慇懃、其の諸妹を敎誡するの文字を作りたるぞ。惟ふに此の二個の書簡は、分明に家庭に於ける松陰を描き出して遺憾なかる可し。彼れ既に自から語りぬ、吾人亦た何の必要ありて喙々を加へんや。

松陰の父は忠愨篤實なる循吏なり、母兒玉氏賢にして婦道あり、姑に事る至孝、子を敎ゆる則あり、仁恕勤儉、自から貧に處して稼穡の勞に任ずるに到る。松陰の松下村塾を開き、同志の靑年を薫陶するや、兒玉氏彼等を歡待し、松陰をして啓沃の功を擧けしめたるもの與りて力ありと云ふ。彼女は百の困厄に罹るも夷然その措置を誤らず。彼女はその死に先つ十三日、松下村塾再築の上棟式に際し、輿に乘して之を見、欣然として慰む所あり、終に明治二十三年八月二十九日、天年を以て永眠に就けり、年八十二歲、松陰か身を殺して先驅したる維新も、早や第二期に入り、正に時勢は第二の松陰を待の頃なりき。

余嘗て彼女の寫眞を見るに、豐頤細目、健全、溫厚、朴實の風、藹然として掩ふ可らさるものあり。

母たる彼女の如き松陰の母たるに於て恥る所なかる可し。

蘇峰氏曰く、余玉川に遊び、路世田ヶ谷を經て、松陰神社に詣り、松陰の墓を弔す。地は東京城の西一里餘を距つ、所謂る古の武藏野なるものに庶幾し。松風墓門を護して、青苔三尺の碑を封す。若しそれ清光平野に滿ち、秋風枯茅に戰き、蟲聲月に喞くの夜、それ或は髣髴として、

親思ふ心にまさる親心今日の音つれ何と聞らん

と歌ふ人のあるを聞かんかな。





夏休

嵯峨のや主人

去歳の暮余の伯父なる人別莊を鎌倉の片邊に作りて移り住みけるが、夏には余にも遊びに來よ、と屢書面もて勸むるにぞ、余も行く約束を爲しける。さる程に春も過ぎ梅雨もゆきて、夢の間にいつしか夏となりける。夏は毎年鄕里に歸りて父母を省るが例なれども、今年は伯父との約束あれば、父母の元には其旨を記して歸らぬ由を言ひやり、八月上旬都を出て鎌倉に向ひぬ。

汽車が鎌倉の停車場へ着きしは、午後四時頃の事なりき、夕日は御輿嶽の山の端にかゝりて、暑き夏の日も終に傾むきぬれば、日光も眼を射る程にはなし、殊に由井ヶ濱の海面を吹來る風、單衣の袂を拂て涼しければ、精神も俄に爽快を覺えぬ。車を傭ひて着改の旅包と相乘を爲し、神明小路の畑道を伯父の家をさして走らする。神明小路と言へるは、初瀬より雪の下に通ふ往路なり、夏草やつはものどもの夢の跡、と咏み去りし翁の句を彫付し立石のある所より、

右に折れて畑中の小路をゆく。此小路は大町小路とて星月夜の古は、鎌倉府中目抜の町なりしと聞ゆ、小路の中央に幅一間斗の流ありて、之に小やかなる板橋架れり、此橋は是裁許橋とて有名のものなり。古は此橋の邊に問注所ありしと歟、扨は三好康信の別當たりし所ならん、曾て鎌倉繁昌の頃は、幾多の罪人が胸を波打せて此橋をや渡りけん、其罪人も、其問注所も、其鎌倉山の榮花も、今は見ぬ世の夢となりけり、と坐ろに、古の忍ばるゝまゝに、左右の山々をふり返りふり顧りゆく中、車はいつか伯父の家の門前にて止りぬ。伯父の家は小高き岡山の上にあるなり。此方の端に形斗なる門のみ見えて、家はまだ見えざるべし。下より門に至る迄は、幅二間斗傾度廿五六度の坂道なり、是は新に土を盛りて作りしものと覺しく、道を挾む小堤の芝は今尚植し時の形を殘せり。余が車を降りて坂を昇りゆく時、俄に門内に叫び聲聞えて、二人のおさな見坂頭に現はれぬ。一個は伯父の總領にして、今年九歳の腕白なり、一個は其次女にして、今年七歳の愛らし盛なり、二人は余の姿を見るや否や、

やあ、道雄さんだ、

叫びながら驀地に坂をおり來りぬ。走せ登る余を中途に迎へて、左右より取すがる愛らしさは、孰れにまさり劣りのあらんや。姿は瓜を二ッなり。余は引寄せて代る〳〵接吻を額に與へぬ。此時又坂の上に二人の人影ちらちらと現はれぬ。見擧る余の顏を迎へて、先づやさしき微笑を洩せるは、義理の伯母なり、少し離れて傍に立てるは見なれぬ廿五六の婦人なり。伯母は

寢室衣の如き白き單衣の洋服を着て、頭には小兒の麥藁帽子を被ぶりて、白木綿の紐を腮の下に結び、右手には小やかなる提籠を持てり。傍の婦人も伯母と一對の裝なるが、伯父の末の子を抱き居るは、新に抱へし守にやあらん、守にしては品格よし、そも如何なる人なる歟、孰れ水浴に往といふ風俗なり。末の子は今年三歳の男の兒なるが、ぽちや〳〵と肥太りし二重腮の肉も落さうな可愛ゆき兒なり。余の顏を見て、宛然誰なる歟を思ひ出さんとする如く、考へ貌に余の方を望めり。余は二人の兄妹を左右に從へて、急ぎ足にて坂を昇りぬ。伯母は莞爾として余を迎へて

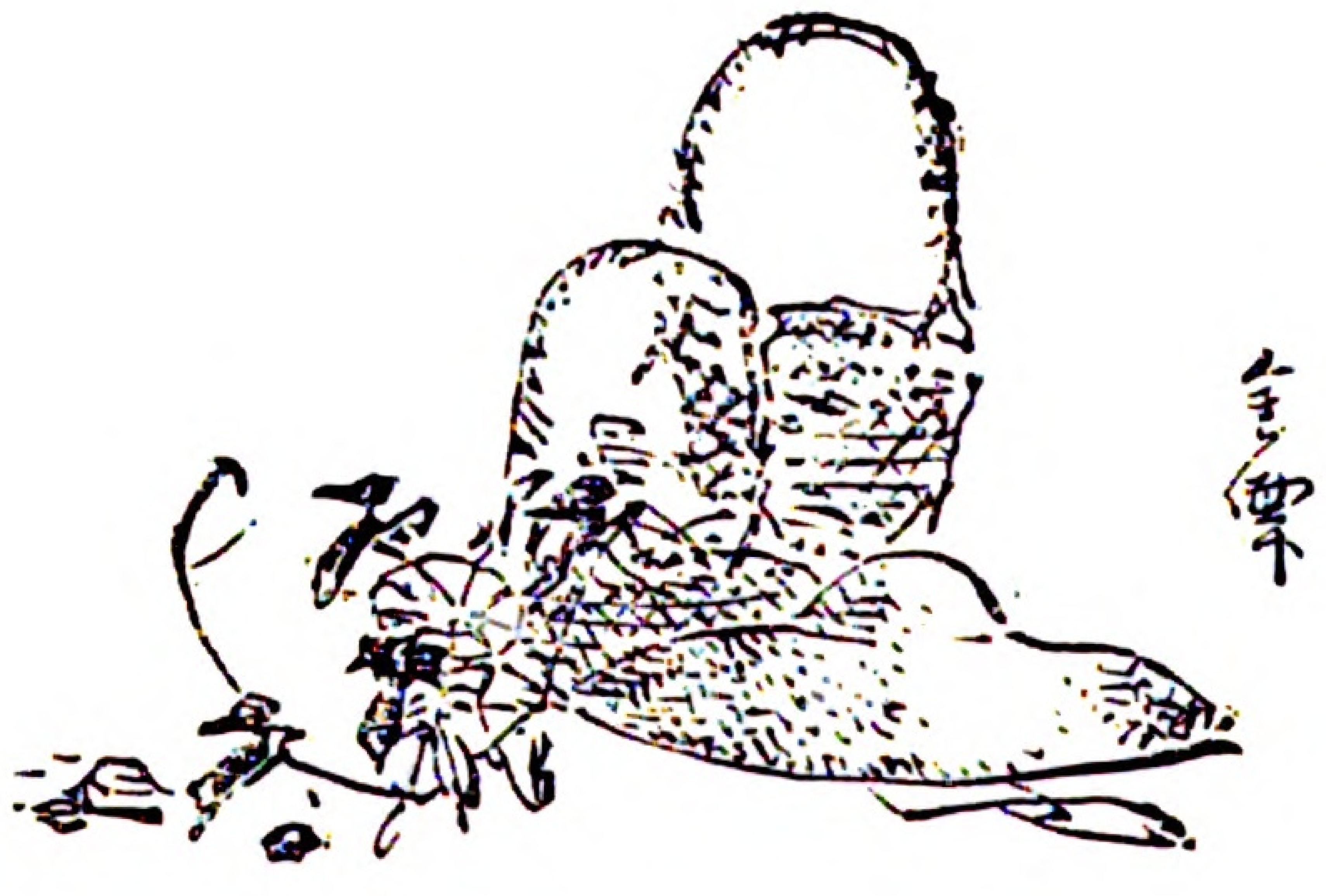
よくねへ。毎日噂計して居ましたよ。

さうでした歟。今日やッと稽古が終りましたから、其で直飛んで來ました。

傍の婦人も帽子を脫て丁寧に禮を爲しける。余は如何なる人なる歟を知らざれば、曖昧の禮を返しつゝ、おさな兒を見て、

茂さん、忘れたかへ、私を、忘れたね、忘れた樣だね。

と言へば、やう〳〵思ひ出せる如く、かぶりをふりて莞爾々々と笑ふ、靨凹頰に現はれて可愛ゆし。



さあ、まアお這入なさい。

と伯母は言ひける。

否、水浴にお出のでは有ません歟？

はい、參らうと思つたのですが、なに、どうせ毎日參る水浴ですから、一日位休みましても。

余等は家の内へ這入たり、伯父は滿面に微笑を含みて、余を玄關の次の間に迎へ、

よく來たの、暑かッたらう、此處へお出、此處が一番風が通す。

と奥坐敷へ誘ひける。稚兒等は皆余を打圍みて、物珍らしげに、或は肩へ取付き、或は膝をゆすり、或は手を引張て、余の來遊を喜びつゝ、其常にほゝえめる目元には、可憐なる親愛の情を現はせり。末の兒は伯母に手を牽れて入來りしが、余が兩手をさし出して抱き寄すれば、遠慮なく余が膝の上におどりはねて、二人の兄姉を顧みつゝ快氣に打笑へり。伯母は氣の毒氣におさな兒を制して、

こら、左樣取附くものでは有ません、道雄樣だッて熱いやね。貴君浴衣におなりなさい、汗におなりでしたらう。

否、何卒おかまひなく、氣車の中は涼しうございましたに、車に乘てからは倘更風が有ましたから。

斯る所へ最前の女、コヒー皿に麥湯を入れて持來りぬ。伯父は角砂糖を麥湯の中へ摘み入な

がら、

學校はいつから休みになッたな？

否、休みはまだ明日からのですが、今日稽古が濟むや否や、直樣飛び出して來たのです。

そう歟、其は大變に早く來たの。

言ひながら銀のサッにて麥湯をかき交つゝ、

まあ、夏休中は滯在して、ゆる〳〵近傍をかけ廻はッて見るが宜い、大に利益する所があるから。予も近來は餘程鎌倉贔負になッて來た。先づ此地の利益を數ふれば、第一に歷史上の地理を實見する事が出來る、第二に歷史上の遺物を實見する事が出來る、第三に古跡に對して歷史上の感念を惹起す事が出來る、第四に空氣も東京よりは清潔だ、其故體にも宜に違ない、其に海水はあびられる、衛生上の利益は無論の事だ、又第五には江山碧水の風色、之に對して大に亦精神を感養する事が出來る。

言ひて麥湯を飲干しながら又言葉を續け、

其に魚は澤山あるしの。唯一ッ不自由なのはお前の好な牛肉のないのだ。之には殆んど閉口だ有るのは有ても品が惡い。

否、其位は我慢しますさ。

まあ我慢するより外仕方はないが。

言ひながら伯母を顧りみて、

其はさうと道雄に何歟御馳走したら如何だ、牛肉は除いて、何歟あるだらう見せにやりなされな。

はい。只今左樣言ひつけてやりましたが、何をして居るのだらう。

言ひながら伯母は勝手の方へ立てば、稚兒等も其跡へ續て立去る。伯父は其後影を見送りて、小兒等の元氣を喜びつゝ、莞爾々々滿足氣に笑ひながら、又此方へ向き直りて、學校の事、學科の事、敎師の善不善、卒業生の成行、學問上の問題、下宿の風儀、朋友の種類、昨年來の生活、と種々の事實をかつぎ出して質問を余に試みつゝ、かくして余の勤惰を試みける。

斯る所へ下女入り來りて

お風呂が湧ました。

人々は代る〳〵湯をつかひぬ。余は正義及び秀子の兄妹と共にあびしが、彼等は面白氣に聲を高く擧て、或は湯をかけやッたり、或は掌と掌を組合せて、其隙より湯を打揚て、ポンプだ、道雄樣にかけてやれ、など〻余に向て打かけたり、惡戯大方ならざりし。

斯て湯よりあがれば、日既に西に沈みて後園の垣の外なる田面には夕霧煙り來、畑中の小路を鍬をかたげゆく農夫の姿も朧なり、此に於て軒にに、やさしき朝貌を畵ける美しき岐阜提燈をさげさせ、室には花やかなる大ランプを燈して、一同晩餐をすましぬ。更に花筵を椽端に

敷かせて庭に向へば、天は一片の雲もなき迄に晴れて、夕月の影源氏山の松にかゝり、吹風植范の梢を揺りて、露に鳴く虫の音哀なり。嗚呼、我等を圍む者は、親しき人なり、無邪氣の稚兒なり、我等に對する者は自然の景色なり、自然の聲なり、此に至りて人誰歟喜びなからん、笑聲は他の歡聲と和し、歡聲は他の笑聲と和して、快談斗のめぐるを知らず、其臥床に入りしは、そも何時なりけん、夕月は全く落て四隣寂寞たる頃なりけり。



是余が夏休に入りたるの門頭なり、之よりは如何にして此夏休を過しつる歟を記さんに、或は由井ヶ濱に潮水浴の客となり、或は逗子の海濱に貝を拾ふの童子となり、或は七里ヶ濱江の島の灣頭に風色を愛するの遊子となりぬ、若夫れ海邊の景色に飽きぬる時は、鎌倉の山々をかけ廻はりて、古跡の埋るゝを探り、古人の墓を吊す、面白き事限なかりき。

今は先づ由井ヶ濱の遊びより筆を染めなん。

余が伯父の家へ着きたる翌日の事なりき、伯父伯母を始めとして、正義も、秀子も、茂も、露女も(例の見馴ぬ婦人の事なり、彼女は伯父が遠縁の者にて、此度正義及び秀子が物學の師として

宿れるなりとぞ）皆余と共に由井ヶ濱の水浴へおもむきたり、伯父の家より海邊迄は、凡そ十町餘も有りぬべし、家を出たるはまだ三時過の頃なれば、暑さはなか〳〵に強かりし。さりながら濱邊に出たる時は、海風面を吹て快涼しく、暑を忘るゝ斗なりし、兼て詩歌、小說、歴史に於て、屢耳にしつる由井ヶ濱は右巖を削りて絕壁を爲る靈山の岬より左怪石巨岩を疊みて海中に斗出する飯島の鼻に致る、一帶灣形の地をいふなり。是昔新田義貞が稻村ヶ崎の濱頭を下り、平砂渺漫の干潟を踏みて上陸しつる、其由井ヶ濱の古戰場なり。曾て和田義盛が老後の孤忠に、兒孫を率ひて奮鬪一晝夜、矢盡馬倒れて屍を平沙に曝したる、其由井ヶ濱の古戰場なるべしと思へば、坐わに古の慕はしく、默然として渺々たる蒼海に向へば、稚子は無心にして高く余を呼んで曰く、道雄さん、何して在ます、何見て在ます磯貝拾ひて遊ばんに、早く來ませと叫びける、兄は裾短なる筒袖の浴衣に唐縮子の帶を締め、頭には麥藁の帽子を被ぶり、左の手に草履と手提籠とを持つゝ、すはしになりて眞砂地をゆけり。妹は水浴の洋服を着て、之も頭には麥藁の帽を被り手に提籠と草履とを持ちつゝ、眞砂地を貝を拾ひながらゆく、嗚呼如何に彼等の姿の愛らしきよ。思ふに兒童等には、濱邊の景色も、打寄する波も、今は目馴て面白からぬにやあらん、之を眺めんともなさゞりき、されど日影てりつく熱砂を蹈み來て後、潮に洗はれて冷やかなる、滑らかなる眞砂地を蹈みゆくは、如何に其心に快かりけん、最も元氣なる顏色にて、いと樂しげなる樣子なり。余もおさな心になりて、彼等の催すまゝ貝を拾ひゆけ

は、岸に寄する漣はちろ〳〵と日光に輝きつゝ影を水底の砂に止めて細蟹の如く足下には
ひ寄り、黒星の下をなめて逃去る、其快き事言はん方なし。余は拾ひし多くの貝を二人の兄妹
にいざとて渡せば、二人は其を籠に収めつゝ、

兄様お前のはどの位有て？

と秀子は物好さうに兄の籠を覗く。兄は自慢さうに籠をさし附て、

此様に澤山。お前のは。どらお見せ。随分在るねへ。やあ、帆立貝を拾ッたね。是は宜いねへ是は宜いのだ。

羨しさうに妹の籠の中を覗て居る妹はにこ〳〵嬉しさうに笑ひて、

其代り兄様のは澤山だ。

澤山だッて帆立貝がなくては。

と訴へ居たり。

余は二人の様子を面白く此方に眺め居る中、前へ行抜し伯父と伯母との高く笑ふ聲聞えたり、何事なる歟、と貌を擧て見れば、末の子の茂を下へおろせしに、茂は無心ながら貝砂地をゆく事の快きにや、いと〳〵元氣の様子なり。遥に打寄する波の砕けて玉と散るを見て、面白しとや、兩手を廣げて前へ突出し、おい〳〵と叫びつゝ踊り擧りて、喜ぶ姿、宛然遥の白波を手に取らんとするが如く、次第に前の方へ進みゆけり。茂の兩親は其姿を愛らしと見て喜び笑へ

るなり。露女は茂さん危ないよと言ひながら、其後へ進み寄りしが、さりとて其爲す所を止めんともせず、如何に爲すにやと愛で試むるが如く、苦し危ふければ直援けなんと用心するが如く、物好と危ぶみと愛らしさとを表する美しき微笑を、目元口元に漂はせつゝ、其後にたゝずめり。其中足下に寄する漣が、沫を乘せて匍ひ寄りし時、茂は其を虫歟、然らざるも何等の小動物歟と思へるが如く、叱々と聲を擧手を擧て叱り追はんとなしたり。されど沫は更におさな兒の叱咤には頓着なく、彼の後へ廻り拔ければ、茂は不思儀さうにふり返り見たるが、此時露女と顏を見合せて、莞爾々々として高く笑へり、此愛度氣なき態度に催されて、一同又高く笑へり。

斯て余等が百歩餘り歩を進めし時、余は右手なる砂山の下より靈山の岬に至る十四五丁の間に、葭簀圍の水浴小屋の幾十となく立並べるを見たり又男女壯幼の彼方此方に水浴する、或は砂原にねころびて遊べる、或は貝を拾ふてそゞろ歩きせる、或は彼方の小屋より水浴に飛びゆく、或は水浴より小屋をさしてあがりゆく、或は其處此處かけ廻はるおさな兒、或は衣服を着改て家路へ歸る人、或は何となく濱邊を歩き居る、或は海士の幾人となく地網を曳く、或は砂山に登りて遠く望むなる、種々の人の有るを見たり。又彼水浴者の中にも寄來る大波を事ともせず、岸を離るゝ二三町の遠きを水瓜の浮べる如く泳ぐもあれば、或は兒童等の岸近くを泳ぎ居て、碎くる白波を潜りつ越へつ面白氣に樂むもあり、或は洋服の少女の帽子を

破ぶれるが、板子をかゝへて泳ぐもあれば、或は空しく波打際に坐りて海水を手拭にて身にかくるもあり、或は又板子を流してそを取競する者もあるを見たり。若し又其肌の色を察れば日に焼て其色紙の如くなりたるもあれば、色白くきめ濃かにして乳房のふさ〳〵と肥あぶら附たるもあり、又さのみは日にも焼ざれど、さりとて焼ぬにてもなく、二ッの間なるもあるべし。されど清らかなる蒼天の下、照輝ける風光の下、此山水の風色を占めて、此天然を楽しめるの情は、何人も皆一様なるべし。嗚呼、彼等は仙界の住人歟、天界の住人歟、世に苦労辛酸の有るをも知らず、おさな児の如く楽しみ遊べり。されど仙人は彼等のみに非ず、余等の一行も又其理の一組なり。茂は兄と姉との如く、坊も貝々を拾ふのだと言ひて、目に見る所の如何なる貝をも撰ぶ事なく拾ひ始めぬ。然して兄と姉とが珍らしき貝を拾へる時、其手柄を誇らんとて、今度は嫁ヶ貝、今度は鰕貝と一々之を持來て示すを見て、茂も亦滅多の貝を拾ひ來ては今度は梅貝、今度は鰕貝と真似をしける。嗚呼、愛らしの稚子等よ、彼等は家庭に在りては家庭の花なり、社會に在りては社會の花なり。誰歟此花を惜しまざるべき。

余等はとある小屋に衣服を脱ぎて水浴せり。余と伯父とはサルマタになり、婦人連は水浴の洋服になりしが、一人正義は真裸躰になりて、第一番に飛び込めり、彼は白波の砕け飛ぶを躍越へて一二間進むや否や、身を投じて泳き始めぬ。余が伯父と話しつゝ徐に波打際に至りし時、彼は早くお出よ、早くお出よと叫びて余を促せり。彼の妹なる秀子は、兄の如く遠く泳げざ

るにぞ、其を羨しく思ひつゝ、抱て兄様の所まで伴て行ッて、と余に甘へぬ。余は秀子を抱きつゝ、正義の傍に至れば、正義は秀子を嘲りて、泳げないものだから抱かッてと笑へり。秀子は笑ひながら、だッてお前は男だものと言譯せり。波はまだ余が胸を過ぎざりき、余は正義に向ひて、何故にもッと先まで往かぬかと問へば彼は丈が立ぬからと答へぬ、秀子は尚余を促して、もッと先まで伴て往て、父上の居る所まで、と言ひぬ。此時伯父は獨り沖の方をさして泳ぎゆきしなり、余は其請ふまゝに尚二三十歩前へ進みしが、此時波は余が肩に及べり。依て余は此に足を止めて、寄する波引波のまに〳〵游泳すれば、秀子は其を面白しとて甚く喜び、後なる兄を顧みて、兄より其身の先なるを誇れるものゝ如く、

兄様は此處まで來られないのよ。

と愛度氣なく余に囁けり。然して屢兄を顧みつゝ、招くが如く微笑みしが、やがて之を呼びかけて、

兄様、來てごらん此處まで、面白くッてよ。

兄は呼びかけられて往て見やう歟と思へるが如く、此方を望み見たりしが、危ぶむが如くたゆたへり。秀子はまた此様子を見て聲高く、

兄様來てごらんよ、面白くッてよ。來られないの?

之を聞きし正義は、決斷を示せる容貌にて、其熟せざる伎倆をふるひて、此方をさして泳ぎか

けゝる、時しも沖の方より、一際高き大波の、人を呑まんず勢にて押来りしが余が躍りて波の上へ出し時波の砕けて飛ぶ勢に、哀や秀子は顔を打れぬ。海水の苦き、辛苦き水の口に入りたれば忽ち眉を蹙めつゝ、

あゝもう厭や、あゝ苦い、もう厭、早く彼方へ、母上様の方へ行の。

と泣きさうな顔なるも可愛ゆし、余は秀子を伴て波打際へ戻りぬ。

秀子は母の傍へ走よりて、

今ね、母様、波が顔へかゝて、面白かッてよ。

さも一大事なるが如く、此事を告たり。余も打笑ひながら伯母と露女の方を見れば、二人は波打際へ坐りて、腰より下を水にひたりつゝ、茂を相手に遊び楽しめり。日毎に潮に洗はする二人の衣服は、宛然白波の花より淸らかなるに、今しも海水をあびたれば、身にひたくと附きて、誠の肌を見るが如くなり。伯母は普通の女なれど、露女は肥に肥あぶらづきて、二重腮のぼちやくとした肉は、今にもちぎれて落さうなるに、色白くきめ濃やかなれば、白衣に透通りて、宛然白雪の解け匂ふが如くなり。若し身体の完全に發達せるを以て、美の一ッと數ふるなれば、彼女は肉美の一點に於ては、疑もなく完全の美人なり。惜しむらくは其容貌の安妃小町には似ず、無盐板額に似たる事を、と余は茫然として見惚居たり。伯母は訝し氣に余を顧りみて

何を其樣に見てお居でなさる?

余は何等の答もせず、莞爾たる微笑を殘したるまゝ、咄嗟走出して沖の方へ泳ぎゆけり。嗚呼、樂哉海水の游泳、波濤は相打相怒りて、千里髮を梳り來る、其怒號は天地の聲なり、其戰は無極に續く、然も何の爲に叫び、何の爲めに戰ふぞや、別に意味なし、唯叫びたきが故なり、唯戰ひたきが故なり、何者の牽制も受ず、何者の束縛も受ず、千古唯叫び、萬古唯鬪ふ、其觀や偉大なり、其想や自由なり、嗚呼、大なる哉蒼海の眺!　余は全く仙界の人となりたり。

余等は現をぬかして、此處に一時間餘りも遊び居たるが、夕日の山の端に傾むくに驚きて、又明日の日を海に約して、靜に家路へ昇りたり。小兒等は路々も元氣よく、路傍の千草生繁る中、夕貌、撫子、野菊などの、ほゝゑむ如く咲けるを見て、其を手に摘みて籠に入れ、或は口元にさし寄せて、いと惜氣にキッスをし、或は夕日にさしかざして、愛喜びつゝありしが、やがて又聲高く張あげて唱歌を歌ひぬ。其歌に曰く、

一やまとなでしこ、さま〳〵に。　おのがむき〳〵、さきぬとも。
おほしたてゝし、ちゝはゝの。　庭のをしへに、たがふなよ。

二野邊の千草の、いろ〳〵に。　おのがさま〳〵、さきぬとも。
生したてゝし、あめつちの。　つゆのめぐみを、わするなよ。

【以下續出】



白薔薇

オリーヴ、シュライテル女史作

蠡湖仙史譯

僕に一個の手箱あり、彫刻なしたる褐色の箱今は古びて、蓋は破れ、紐をもて結びぬ。箱の中には髪毛、および僕等幼年の昔弟の臥床の上に掛けありし小繪、其他こまかなる件々のものを紙に包みて入れたり僕は此箱の中に一朶の薔薇の花を有す。他の婦人亦皆斯かる手箱を有し斯ることまものを藏す、されど何人も僕のもてる薔薇の花を有つ者あらじ。

吾眼盛る時、吾心變ふる時、婦人を信ずる一念の漂ふ時、婦人の現狀は僕にとりて苦痛たり婦人の將來は僕にとりて失望たるの外なき時、十二年來萎れ凋みし枯薔薇の花の香りは依々として僕に復へり來るなり。纖たる緣りの二タ葉の雪の上にさし出たるを見て小鳥も春の近きを知る如く、僕もこれが爲めに必らず春の來る可きを知る。志は決して我等を欺くことあらじ。

此箱には嘗て他の花をも入れたりき。或暑き日の午後、左る男子と共に村巷を過ぐるとて、其男の丈夫なる手もて摘み呉れし一ト房の白アカシアの花も此中にありき。憶ふ、其時雨降りてアカシヤの葉より露ハラ〳〵と儂等の上に墜ちしを。花は濡れたりければ、包みし紙に微かの痕を生じぬ。幾年の後、儂は此花を投げ棄てたり。今は箱の中には乾けるアカシアのかすかなる香のみ殘りて、彼の暑かりし夏の日の午後を思ひ出でしむるのみなれど、唯薔薇の花は依然として箱の中にあるなり。

今は幾年の昔となりぬ。儂猶十五の乙女にてありし頃、片田舎のトある町に行けることありき。其頃町は猶新しく、最寄の村へも猶二日程を隔て、住民は重に男子にて、中には妻あり子ある者も少しはありたれど、大概獨身の輩なりき。儂此町に到りし時は、唯一人の少女あるのみなりき。彼女は年まさに十七ばかり、美はしくして肉肥へ、夢見勝なる大きやかなる碧りの眼に明色の髮浪をうち、唇は稍大きく重やかなりしも、一たび微笑すれば破顏幾個の靨を生じ皓齒一時に皆輝やきぬ。驛亭の主人には娘ありつらむ、村はづれの農夫某は女二人までもちたりき、然れど儂等は終に一タビも之を見たることなく、彼女獨り女王の位にありき。男子は皆彼女を崇拜せり。彼等が思ひ懐ふ婦人とては唯彼女のみなりき。彼等は門關に於て市場に於て驛亭に於て只管彼女の事を語り、巷の角に立ちて彼女を注視し、彼女が辭儀をなし若くは共に街上を歩む男子をば彼等擧りて嫉みぬ、彼等は爭ふて其戸前に花を持ち來り、馬を薦

め、亦所太くも結婚を乞ふことありき。彼等か斯く意中の人に服事せること流石に氣高く且義俠なる節もあり、また彼等が世間より遠かりたる場所に居るが爲めにさもなくば幾多の婦人にも分ち與へつ可き崇拜を唯一婦人の足下に注げることと聊か當然に思はるゝ節もあり、抑また彼等が互に相妬めるやゝ卑劣なる所なきにあらざりき。彼女若し一たび其纖指を擧げたらむには、儂は思ふ、彼女は何れへなりとも隨意に嫁し得べかりしなりと。

斯りし程に儂來りぬ。儂は彼女よりも美はしからざりしならむ、彼女ほどに美はしからざりしならむ、儂は確かに彼女ほどに麗ならざりき。然も儂は活氣あり、儂は新、彼女は故――從て彼等は皆彼女を棄てゝ儂に跟ぬ。彼等は儂を崇拜せり。花は儂が戶に來りぬ。一頭より乘られざるに二十頭の馬は儂に捧げられぬ、彼等が巷の角に立ちて待つは儂なりき。彼等が語る所は儂か言ひ儂か爲せし事なりき。儂も半は之を好みぬ。此時に到る迄儂は常に獨り身にて暮らし來り、何人も儂に向ひて御身は美也御身は一個の婦人也と告げし者はなかりしなり。されば儂は今彼等を信じたり。儂は實に知らざりしなり、此れ唯一人之を始め餘は考へもなく之に從ふ一時の流行に過ぎざるを知らざりしなり。儂は彼等に結婚を乞はせ、而して「否」の一言以て之を拒むことを好みたり。儂は彼等を蔑視せり。當時母たるの情いまだ儂の內に成らず、婦人生長て心情開暢すれば男子てふものは皆吾子供なるを知れ共、儂は未だ之を知らざりき。儂は未だ人にやさしかる可き年配に達し居らざりしなり。儂はおのが勢力を好みぬ。儂

は恰も新しき鞭をもてる小兒の、當るを嫌はず到る處に其鞭を鳴らし廻るが如く、之を卷きて之を藏し得ざりしなり。男子は奇妙の動物にて、何故かは知らず余を好みぬ。唯一事儂の樂を損ひしものあり。彼等が儂の爲めに彼女を見棄たるは、是れ實に儂が忍び得ざる所なりしなり。儂は彼女の夢見勝なる大きやかなる碧りの眼を好み、其緩やかなる歩みぶり其緩やかなる聲を好み、彼女が男子の間に坐し居るを見ては、彼女は終に其群中のものならざるを思ひ。彼女若し男子に對して咲ふ如く唯一度にても儂に向て面を輝やかし靨を湧かし皓齒をかゞやかして微笑せば、儂は彼等の贊辭を擧げて彼女に與へんとまで思ひしなり。然れども儂は到底其難きを知りぬ、彼女は必らず儂を嫉み儂の死を希ひ儂の此村に來らざりしを願ふなる可しと感じぬ。彼女は知らざりしなり、曾て馬を野外に驅りし時、常に彼女と馬を駢べたる男子儂の側に來りければ、儂直ちに之を斥け去りしことを。彼女は知らざりしなり、曾て或男子儂の面前に於て彼女の緩やかなる物言ひぶりを嘲笑し儂の眷顧を獲むとせし時、儂劇しく之を面拆し彼をして再び儂が面前に來る能はざらしめしことを。驛亭に於て男子等儂と彼女と何れか美なると賭をなし、來る人毎に之を問ひ、而して余に賭たる者勝ちぬ、彼女之を知れり、儂も彼女の知れるを知れり。儂は此事のために彼等を惡みぬ、然も儂は彼女の感情につき如何にわが心を勞するかを彼女に曉らるゝを欲せざりしなり。

彼女と儂は未だ曾て語を交へざりき。

村荘に相逢へば、目禮して過ぎぬ。握手をなせば默してしか爲し、顔見合はすとはなかりき。然れども儂は思ひぬ、席を同ふする度に儂は彼女を見ざるも彼女の現在を感ぜし如く、彼女も儂の現在を感ぜりと。

遂に儂が去る可きの時來りぬ。儂は明日出發す可きことゝなりぬ。知己の某儂が爲めに送別の會を開き、一村皆此會に招かれたり。

時は正に冬の半、園には數莖の冬牡丹と寒菊とありしのみ、此あたり二百哩以內には愛を以ても金を以ても購ひ得らる可き一朶の薔薇だにあらざりき。獨り儂が友の園に、窖と煉瓦壁の間の日あたりよき隅に一樹の薔薇生ひて、唯一箇の蕾をもてり。花は白なりき。此は送別の會に帶びむ料に已に彼少女に約されたり。

夕來りぬ。儂が會場に着して、外套を脫がむと待合室に入りし時は、彼女已に先づ在りき。彼女は純白の衣を纒ひ、雪の如き肥たる腕と肩とを露はし、黃金の蠟燭光に映じて燦然と輝やき渡り胃邊一輪の白薔薇花を挿めり。彼女は女王の如くに見へぬ。儂は「好夕」を唱へしまゝ、古びたる黑衣の古びたる黑襟飾をとゝのへむと急に鏡の方に向ひぬ。

忽ち手あり吾髮に觸れぬ。

「少し靜にして居て……」是れ彼女の言なりき。

儂は鏡を覗ひぬ。彼女まさに胃邊の白薔薇を脫して、其を儂が髮に挿みつゝありしなり。

「實に黑髮の美くしきことよ、よく花に映りて…………」彼女は後へ下りてまた打眺め「御身の髮に上れば花は猶美しく見ふるなり」。

僕はふりかへりて彼女を視ぬ。

「僕には御身こそことに美はしく見へ玉ふ」僕は斯く云ひぬ。

「サーヨーナ」彼女は例の徐ろに云ひぬ「嬉しき事を言ひ玉ふよ」。

二人は顏見合せて立ちぬ。

程なく衆人入り來り、我等をはらひ去りぬ。此一夕我等は終にまた相遇はざりき。唯一度、彼女過ぎがてに僕に微笑を送りぬ。

明朝僕は此町を去りぬ。

僕は再び彼女を見ざりき。

數年の後、僕は聞きぬ、彼女已に人に嫁して亞米利加に行けりと。然もあらむ、然もあらざらむ

――されど薔薇は猶箱の中に殘れり。

(完)





織梅

秋風閣主人

第一回

一羽の烏、霧たちこめし森の中より飛て、庚申塚の上にとまり、首を絞らるゝ刑人の苦しき聲をまねて、暁の寂寥に悲みの寂寥を加へぬ。小笹をそよぐ秋風は、ちかきほとりに立てる無縁の卒塔婆をたゝきて、亡者の安否をおとのふものゝ如く、庚申塚に垂れかけたる猿田彦の草鞋を吹き動かしては、同行をいざのふものゝ如く、遂には木の頂上を吹て、幾夜の霜にそめなせる紅葉を颯と吹き散らしぬ。紅葉は、無縁の卒塔婆と庚申塚との間に亂れしきぬ。此紅葉、佐保山に散りしかば、錦の山とや見ん、此紅葉、立田の川に散らんには錦の流れとや云はん、されど、此處に散りしける紅葉は、如何に不幸の紅葉ぞや、血しほの流れとあやまたる夜のほのぼのと明け渡るにつれて、此あたりに見慣れぬ、丈高き白色の怪物は、をぼろげに正躰をあらはし來り、此あたりの自然の悲惨に倍して、人爲の悲惨を添へぬ。村の若者共、朝仕事に急くにや、

五六人打つれ立ちて、或は鼻うたをうたひ、或は女の品定めなどして、村里を立出て、庚申塚より、三町計前にて、此方をながめて、一同立とまり、白色の怪物を指して、私語きたりしが、忽ち鍬や鎌を以て、身を堅め、此方に近くと二町計りにて、笑ひ出しぬ。されど怪しみの心解けやらずと見へ、彼等は怪物めがけて走り寄りぬ。怪物と見へしは、亡者の白き衣にもあらず、狸のなせる白入道にもあらずして、罪人吟味の高札なりけり。若者共は高札の文字を讀まんとせしも意味分明ならず、少し遲れて來れる顏の青白き若者は、村の學者先生と見へて、物識り顏に左の如く讀み下したり。

御尋者

甲州無宿
吉川權六事
甲斐の權六
五十二才

右之者儀叔父を殺ろしたるを手初として十數人を殺害し、所々方々に强盜追剝を働き不屆に付先月御召捕相成候處一昨夜牢破り逐天致せしにより之を召捕りたる者には御褒美として金子五十兩を賜はり塲つけ又は其他死躰を屆け出てたる者には同三十兩、在所を密告する者には二十兩を賜ふ可き者也昨日前橋にて見かけたるものありと訴へ出て

たるものもあれば自然此邊を徘徊候も難測候に付嚴重に見張り致す可き事

學者先生は、次第〳〵に聲をふるはし、遂には足をふるはし、此の如く讀みて止みぬ。一の骨格逞ましき若者は『久公は學者なれど臆病者なり高札見てふるふにあらずや、五十二才の老はれ者、如何に強くとも、血氣の若手には及ぶまじ、吾れうちとりて、褒美の金にありつかん』唇の薄き他の若者は『褒美の金は、何にするぞ、玉村のおはな女郎衆を身うけする積りか』一同ふき出して笑ひ興じぬ。此時日は正に赤城山を出つ。あたら暇をばつぶしたりとて一同己が畑へと急き行く。

第二回

夜は、墨よりも黒ろし、色と形とを沒す。夜は、惡魔よりも、惡しゝ、善と美とを沒す。夜は善人を惡人となし、惡人を更に惡人となす。星は夜を世界の中に碎かんとし、月は夜を世界の外に追はんとす、若し此世に月と星となかりせば、夜と惡魔とは如何に喜ぶべき。神と人とは如何に悲しむ可き。

夜は今ま黒き衣を以て、七重八重十重二十重地を包み、地を掩ひぬ。星の光の助けにて、僅に朦朧と形をのこしたる森さへ、既に夜に呑まれ、石や木や墓や塚や落葉や總て、夜の深みに沈み、萬籟寂として眠り、小河の流れゆるく虫の聲微かに、夜を監視の天の星さへ、睡き近く、睡むた

げに見へ、いと深くしげれる竹やぶの風なきに動くは、狐狸か、野鼠の夜にまぎれて餌を求むる爲めに出でたるにやあらん、折りしも心も細き細道をたどり〳〵て、只一人り、わらんじの地につく音も、憐れげに、時々地に響きて、虫の音を驚かすは、杖の響きにや、前よりも一入暗き所にきかゝりけるが、天地の黒き緣の中にはめられし、只一つのうす白き額に似たるもの、星の光によりて、彼れの眼にとまりぬ。彼れは、何心なく、過ぎ去らんとせしが、何か思ひ出したる樣に懷中より燧をとり出し、火をきり、枯枝をひろひて火を吹きつけたり、枯枝燃へ上がれば火を吹きて立てるものは、いと見苦しき旅僧。彼れの前には古き大草鞋を肩にかけたる庚申塚あり。彼れの右の方には、無緣の卒塔婆あり。火の粉飛て、地に落つれば、鮮血淋漓として地より湧くが如し、手にとりて、之を見れば、血にあらずして、地にしける紅葉なり。燃へたる枝を少くさしあげて、庚申塚の後を見れば、倒れたる死骸に似たるものありて、奥深ふして暗き竹藪の中に橫はる、よく〳〵見れば、大なる枯木の切り倒されたるものにてありき。僧は、枝の火を吹きて、高くさし上げ、白きものを照らし、その中に書せる文字を讀み下しけるが、忽ち、沈默と寂寞とは、此旅僧の口より漏れし一言を以て破られたり。

『甲斐の權六』

心の精か、反響か、『アッツ』の一聲、竹藪の中より應へぬ。旅僧は、少し怪しみたる樣子にて、火の枝をさし伸ばして、きつと四方を見廻はしけるが、人のけはいも更になく、絶へ〳〵に聞ゆる水

車の音は、人の呼吸の絕へなんとするに似て、悲しく、木の葉おのづから落ちて、柔かに地につもる音いと心細し、暗黒は倍し來り、寂寞は倍し來り、手にとる枝の火さへ、消へなんとす。旅僧は、火の枝を地に擲ち、天を仰て大息を漏らしぬ。彼れの唇は忽ちにしてわななき、言はんと欲して言ふ能はず、暫らくありて、獨語して『甲斐の權六二人はあらじ年頃といひ且つ叔父を殺しとある上は、我父を殺害したる甲斐の權六に相違ある可らず。我家より百兩を盜みて、我家を滅ぼしたるは彼れ。我母を勞がいにして、殺ろしたるも彼れ。母が臨終のきわ、旦那寺の方丈を枕近く招し、吾れを御弟子に賴みたりとは、十二才の時、方丈の物語にて知りたり。父の殺され玉ふたるは、我五才の時にて、父の俤すら覺へず。母の死に玉ふたるは、七才の時にして、三月計りは寺の御堂に泣き明したると多かりき、父の非業の最後の事は、十五才の時、村の作太郎老爺より始めて聞きて驚きたり、其時作太郎老爺より親の讐は、甲斐の權六なれは、何時か廻り合ふて、怨みの刄を報ゆへしと勸められ、直樣讐討に出てんと方丈に暇を願ひたるに、方丈は、堅く不心得を戒しめられ、總て前世の因果とあきらめよ、決して無分別の事を爲すましきぞと敎へられ、讐を討つの考は、此時より消へ失せて、一心佛門に歸向し、父母の冥福を祈り、權六の事は、夢にも思はさりしが、今ま此の高札を見ては、如何でか親の敵を打捨て置かるべきぞ、嗚呼口惜し、嗚呼無念、嗚呼此上は我れ日本中を廻國し、かたきに見當り次第、父母の仇、諸人の仇を報ゆ可し、嗚呼宛し玉へ神佛、二十年の苦行難行嗚呼空なし、嗚呼空なし』。

刄は佛に勝てり。

旅僧は、眉をあげ、齒を喰ひしばり、錫杖を瓢と打ふり〱大空をきり、かけ出さんとせしが、『暫し兵助』と、止むる暗中の一聲に心を擊たれて、立ちとまりぬ。庚申塚の後なる竹藪をおし開きて現れ出てたる一個の黑影あり、彼れの動くに從て、鏘々として、音するものは、鐵の鎖にやあらん。『暫し兵助』の一聲を放ちたるものは、實に彼にてありし、彼れは『待て兵助』と再びくりかへしぬ。旅僧は星の光に黑影をすかし見て『我幼名を知りて呼ぶ者は何者ぞ』と問へば、黑影は白みたる星の色よりも冷やかなる聲もて、『汝の從兄叔父殺ろしの權六を忘れたるか』と答へぬ。法師は、毘沙門天の如く、荒れ、錫杖を宙にふり上げ、大喝一聲、『親のかたき』と呼ばゝり、黑影目かけて、打かゝりたるに、餘りに狼狽せしにや、石につまづきて、地に轉びぬ。黑影は、旅僧を捉て押へ、錫杖を奪ひとりて、したゝかに僧を毆ちたり。物音に驚きけん、そのあたりの虫の音は、鳴き止みて、遙かにきこゆる梟の聲、人のうめき苦しむ聲に和して、常よりも恐しくきこゆ。黑影は更に、一痛擊を加へぬ。僧默し、梟默し、天地默す。黑影の冷やかなる聲は、死默の乾坤に向て、更に凄みを與へぬ。『息絶へぬ、親子共我手にかゝりて死ぬるも因果とやら、冥途の旅に不用の杖ところも、我當分借用す、何れ地獄にて返納せん』

彼れは暗中に何事をか爲せり、鐵の鎖は又た音せり、暫くして異しき音せり。冷かなる高笑は左の言に伴ひぬ。『青二才の首にしては堅い』。數分にして藪の中に刄物の石に觸るゝ音せ

り暫くして又た低き聲は言へり。『首は立派に藪の中に葬れり、從弟のよしみ、汝の傀殼關東一の親方株、甲斐の權六の身代とは、此上なき汝の仕合』と、黑影二三步行くと見へしが、再び故へ歸り『猿智にてありし、如何に馬鹿役人たりとて、二十四五年を經たる傀殼を五十二年のものと欺かれん幸に』と言ふや否や、燧の火粉は飛ひぬ。枝を取りて火を吹けども火は燃へず、『嗚呼血歟、嗚呼血なり』といひつゝ血にまみれたる枝を投げ、別に乾ける枝をとりて、火を吹きつけしが、火は忽ち燃へ上がれり。大の僧は不動明王の如く火焰を吹て立ち、鐵の鎖の附きたる首なき死骸は血に浮ひて倒れ、紅葉は、血の河に流れ、庚申塚は紅の露にうるおいぬ。僧は墨染の衣の中より血痕の鍔元に斑々たる出羽庖刀をとりて、庚申塚の左にある大樹をけづりて白ふし、左手に火を持ち、右の手に血にしめる手拭をにぎりて、左の如く血書せり。

『甲斐の國の住人吉田兵助天に代りて父の敵甲斐の權六を此所に殺ろす。其首は、親の墓前に供する爲め持參す』。

僧は、枯枝を折り、落葉をかきあつめて、死骸の上に積み、火を點したり。火焰々として燃へ上るや、雞始めて鳴きぬ。僧は急ぎ去らんとせしが、思ひ出したる樣子にて、髻を根本より切りて、火中に投じ、後をも見ずして、黑暗々の中に沒し去りぬ。

第三回

楠の葉のうら吹きかへす秋の風、雁の聲さへくもる夕時雨、百歳の杉、千歳の楠、枝を交へて、光を閉さし、晝さへ暗き闇み阪、深くしげれる木の下陰は、惡人の刃を隱くして沈默し、阪に轉べる無數の小石は、無罪の血をすふて生動す、刃の電、涙の雨、血の流れ、時として森の奧より野犬現はれて、何なき頭、指なき手をくはへて、一道の血路を遠く森の中にひくとあり。阪の半、辻堂の中に安置する六道能化の地藏尊は冷やかなる眼を以て、强盜、追剝、强姦、辻斬を覩玉ひて、曾て一人の命を救ひ玉へるを聞かず。女は、白晝さへ、此阪を通るもの少く、此の阪の上に立てる、一座の出小屋は、黄昏を待たすして、家路に急くなり。まして時雨るゝ夕まぐれ。風さへいと烈しく木の葉を吹き鳴らせば、往來の人も絶へ果てぬ。折から阪下より傘を斜にあへぎ〳〵上り來たるものあり。うす光りは、猶ほをぼろげに彼れを照らせり、十二三のいと愛らしき一個の少年。その風躰より見れば、何れの店かの小僧なる可し、顔圓く、眼大く、頰は紅熟せる杏の如く、無邪氣にして、愛嬌あり。懷に何か收めたりけん、時々片手を以て、ふくれたる懷をおさへつゝ上れり。地藏堂の前にて、一息つき、又しも攀ち上らんとせしに、地藏堂の狐格子の中より現はれ出てたるは、錫杖を杖ける旅僧なり。少年は驚きて、懷中をおさへ、足をはやめていそきけるに、僧は、追かけ、小僧の襟上を捕へ。懷中のものの我に渡せ』。『是れは金にあらす』。『大金なると

は、狐格子の中より見ぬきたり、早く渡せ』少年は手を以て懐中をおさゆると益かたく、『大金にはあらされども、是れは主人の金なり。私の金は二十文左の袖に在り。私の母は信心者ゆへ、二十文皆な奉納せん、願くば和尚様、主人の金を免し玉へ』僧は『二十文の金何にかせん、渡さぬに於ては、殺して取るぞ』『人殺し。人殺し』坂の上に人の足音聞こゆ。僧は少年の咽をしめて之を殺ろし、小さき手にて堅く握れる懐中の財布を奪ひ取り、其中を改め見れば僅に錢二百文、僧は苦笑して言へり、『無役の殺生。南無阿彌陀佛』。

第四回

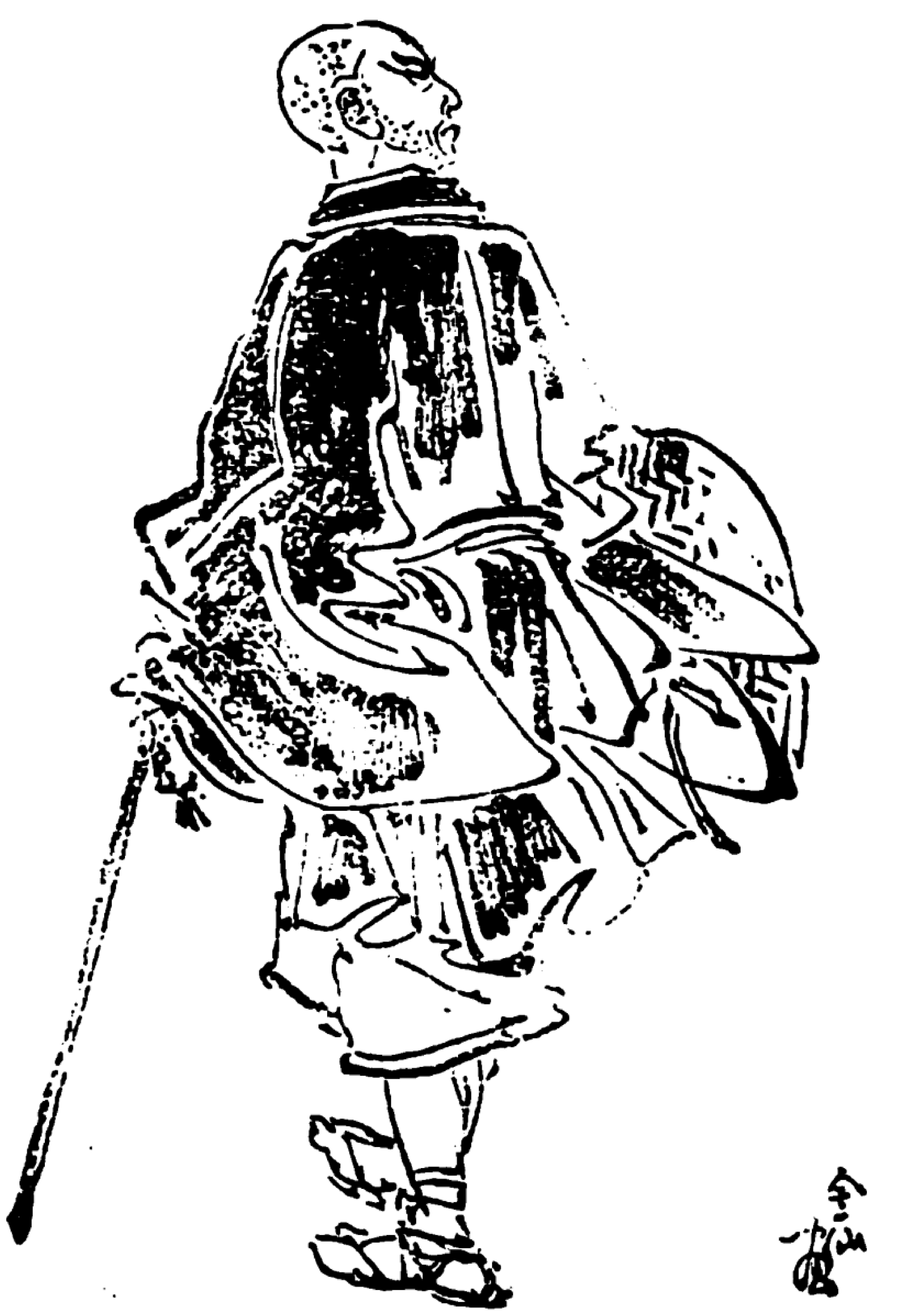
月は龍宮を出でゝ富士の高根に宿りをいそぐものゝ如く、一瞬又た一瞬、海を遠かり、山に近きて歩み。その光は正に清見寺の半ば開ける扉に映じ、明月の光と與に海より來れる清らかなる風は、石階に散りしける木の葉を吹き飛ばしぬ。門前にたゝすみ首を俯して、思に沈める旅僧は懐ろの月、袖の風に驚けるにや、ふと頭をもたげて天を仰ぎ、暫し月に見とれてありしが、何思ひけん、落葉を蹈みて、石階を下り、帶の如き細道を蛇の如く廻り、ひざまづける乙女の如き小松のいと美くしくして水晶の碎け散れる如き砂の上に行儀よくならべる海べに出でぬ。彼れ砂の上に腰うちすへ、月をながめて、獨語せり、『年毎に月を見ざる年はなけれども、今宵の如きうつくしき月はあらず』と、賤のふせ屋の窓うち開きてながむるも、月はうつくし、

まして此の絶景の中に立てながむる月のいかでか、うつくしからざらん。後には、芙蓉峰ありて、天際に聳ゆ。頭は千古の雪を冠として、尊く、面は、朝な／＼海を出る第一の光に洗ふて清よし。腰は、山姫の織りなせる雲の帶をまとひて愈々たをやかに、裾は、東海のかゝみにうつしてます／＼妙へなり。月、斯峰をしたふにや、此峰月をしたうにや、互に相招き、相近かんとするか如く見ゆるも不思儀なり。足もとに波うちよせて、旅の垢をあらひ去るは清見潟なり。周文の筆も及ばぬ妙技を以て、芙蓉の姿を實より清くうつすは、彼れなり。日を吐くは、彼なり。月を吐くは彼れなり。月は今ま彼れの懐より出でゝ、徐ろに青空の頂によぢ、一の月は歩みつゝ天の川を渡り、一の月は、青海原の中心に點す。何れか眞の月ぞ、何れか月の影ぞ。一葉に棹せる漁夫の擲てる網の尾に碎かれては、十疊の錦となり、波に躍る飛魚の鰭に觸れては、一聯の瓊珠となり、帆をあげて走る船の梶に切られては、一道の金光長く延て、海上の電の如し。東の方鯨鯢



の波に横はりて、脊を月光に曝らすか如きものは、豆州の山也。西の方、光を猜みて、影を掩はんかと、暗雲の天の一角に於て黒き怒を發こして月を摑まんとするか如きものゝ是れ、久能、賤機の諸山也。見る間に月は牽牛織女の七夕に渡りて、あかぬ別れを惜み玉ひたる天の河をば、鵲の橋なく、渡り、黒き久能、賤機を避けて、清き玉芙蓉に近かんとして、近く能はす、躊躇するが如くして、月の歩の止まりたるやに見ゆるは、心の惑にやあらん。月の光は、天の川を渡りてより、一しほ、さへてうつくし。物として照

らさゝるはなく、處として、光を惠まさるはなし。大なる者には、大なる光を以て照らし、小なるものには小なる光を與ゆ、海は廣ろし、されど光は隈なく之を照らせり。松葉は小し、されど彼れにも亦影あり。月は又た己れの姿をいろ／＼のものに宿しぬ。萩、女郎花における露にも、姿をやどし、或は、夫の歸りを待ちかねて波とばに立てる漁夫の妻の取りおとしたる一滴の涙にも、姿をやどし、或は、月の光を晝とみて飛び迷ふ山鳥の眼にも、其姿を宿し、或は、老ひたる女の如く、實を結びてしぼめる蓮の葉や陸の蓮ともいはるべき芋の葉に轉へる水玉にも宿し或は谷川、或は小河、或は池、或は井、或は微を厭はすしては、鈴虫の眼にも、或は人間を重んじては、乞食の命を盛るかけ椀にも、その姿を宿す。一天一月、地に落ちては千萬の月となり、世界に照臨する大月、地に下りて、螢より小なるも面白し。旅僧は、此面白き月色に照らされ一秒は一秒より、心熱く、月に凝りてありしが、一片の陰雲、鼠のごとく伊豆の山の方より走り、大圓月を嚙まん勢ひにて近寄れり、僧は拳をにぎれり。鼠雲は月を嚙めり、月の一片は缺けたり。



僧は、『畜生』と號びつゝ全力をもて錫杖をふりあげ鼠雲をめかけて、空をうてり、鼠雲は忽ちにして、立てる猿の如き形に變し、久能山の方へ逃げ失せて、月は一しほ圓ろく見へたり、月疲かれたるか、松と月相戯れるか、月は忽ち天女がほしかはかせる羽衣のにほいゆかしき松が枝を枕として、靜かに休みぬ。風はねたましくや思ひけん、白馬に駕し彼方の海より疾驅し來り、松を吹て、松と月との親しき袖を分ちぬ。此時したゝる一滴の露、松の涙の如く、旅僧の手のひらに落つ。僧は、黄金の玉をあつかふ如くして之を見るに、豆よりも小なる月は、その中に、清くして圓ろやかなる姿をうつしたり。僧は、十分時ばかり、仰ては、天の月をみ、俯しては掌の月を見てありしが、彼れは忽ち過去の彼れに歸りぬ。

『六才か、七才の頃、母上に手を引かれ、氏神の祭りに、大なる紙鳶を買ひたる歸路、吾々二人の影を一は長く、一は短く地にうつしたるは、此の月にてありき。吾れは吾影を蹈まんとして、蹈む能はず、母の影をふみて笑ひ興しぬ。其時母上が天の月を指して月の如く清くあれと教へ玉しひ事は、墓の底に沈める夢の如くして、其時の月と與に我心の底に殘るのみ。其時の月は、今の月なり、心の底に沈める月は今の月なり。思へは、我母は親切なりしよ。小兒の遊は樂しかりしよ。母が死して玉ふて、吾れ三日三夜泣きたるは、紙鳶を買ふたる翌年にてありし。又た月によりて思ひ出す、廿才の時、隣村に土塲の開けるを聞き、一擲萬金の富を賭けんと、夜を犯かして行きたる、隣村の入口にて、色白き十五六の娘に行き逢ひ、互に顔を見合せたるか、縁とな

り、その盛相つれ立ちて、野道をそゝろあるきせしに、今の月は吾々二人を照したり。彼の時には、吾れも二十才の若者にて評判の好男子なりし。今は老ひたる此姿、誰れか此姿の我身を以て、三十二年前花の如き娘を娶りたる立派なる花婿と識らんや。只彼の月は能く我を知る、若き吾を知る、仲よき新夫婦をも知る、實に妻は心がけよき直ほなる女なりしよ、彼れが賭博大酒を諫めたりとて彼れを賤りたる時は、後にて快よからさりき。彼れ一子を殘して、死せし時には、我れも妻の諫に從がひ賭博大酒をやめんと迄思ひしが、忽ちに友に誘はれて、土場につめきり、遂には段々出世して、親分株となり、力も強く意地もあり、喧嘩も強く、狂氣もあり、喧嘩と賭博を職とせしが、三十二の春迄は、人間の味を知らさりし。思へば、一子長吉が十二才の春熱病にて死したる後は、絶望の餘り、酒料も前に倍し、氣分も荒れたる折から、叔父の小六つかしき說諭に、叔父を殺ろしたるが人殺の手初め、今は吾れも見事に人喰ふ鬼となり果てたり。長吉の姿は、今にも眼さきにちらつく樣なり。嗚呼、丁度闇阪にてしめたる小僧位の身の格こうにてありき。顏は少し長顏なりしよ。彼れは年のわりには賢こき子なりしよ。夏の頃、庭の置座にあぐらかき、長吉の酌にて一盃を傾けたる時、吾々を照らし、盃の中に姿をうつしたりしは今の月にてありし。長吉が德利をおさへて、大酒を止めたるは、其時にてありしよ」。

聲は小松のかげより來りて、僧の回想を呼び醒ませり。彼れは過去の彼れより、再び現在の彼れに歸れり。されど過去の彼れと現在の彼れとの間には已に自由の路開け、捨てられし過去

の記憶は拾はれ、過去の快樂は現在の苦痛を愛撫し初めぬ。彼れは鷲の如く鋭き眼をもて、彼方を見渡したるに聲の來る處、一隻の舟あり、兩個の影は、其中に相對す。

乙　善次郎坊が變死とや、彼の親孝行の善次郎坊が。

甲　十日前の事とよ善坊は闇坂にて强盜にしめ殺され、强盜は主人の錢二百文を盜みしとよ。

旅僧は如何に驚きたりけん、身をふるはしたり。掌上の玉は流れて衣の上に落ちたり此時後の方に物悲しき聲の錐もて耳を鑽る如きは、慥かに牝鹿の聲、村里近く來鳴くは、子を呼ぶか、夫を呼ぶか。僧の顏色は忽ち青く忽ち赤く、月光に映して、うす氣味わろく、月色亦青白ふして人をさけしむに似たり。

乙　僅か二百文の錢にて生命とるとは、乞食にも劣り果てたる强盜ならずや。善次郎坊死しては、お時の嫗が嘸かしの歎きならん。

甲　歎きとも〳〵、死骸の昨夜着くや否や、棺より出して、抱き占め〳〵、今朝迄抱きて泣き明かし、今朝よりは兩眼とも泣きつぶれて見へぬとは、重ね〳〵の憐れの話ならずや。

乙　嗚、呼己れも泣き度なりし、十二才の小坊主には、奇特の孝行者、一昨年江戸へ奉公してより、月々己のが小使錢をつかはずに、母に送りて母の暮らしを助けしものを、僅

かニ百文の爲めに殺ろすとは、嗚呼殺ろすとは、

甲　お時媼の冬着にとて、善次郎坊が送りたる反物は次郎藏が、一昨、日江戸より歸つて屆けたとよ、

乙　嗚呼己れも思はす涙を取り落しぬ、反物は一昨日か、そして死骸は昨日か。

僧は此時拳を以て、胸をたゝきてありしが、我ながら、拳をかためて、我頭をうちたり。月は、益々明らかに彼れの上に光を射り、風は愈涼かに、彼れの肩を刺しぬ。彼れは、歯をかみ鳴らし、拳を堅めて、頭をうち、腕をうち、胸、腹をうち、又た頭をうち、幾十度か頭をうち、口には紅の血を含み。兩眼濶と見開きて天上を望んて、月を睨みたり。月は靜かに又た冷かに、彼れの顏をうかゞへり。彼れの兩の眼には小き月飛び入れり。彼れは月に見らるゝを耻つるものゝ如く、顏を地にむけたり、地上には月影彼れの頭を映せり。彼れは立ちて、月の見へぬ木蔭に移りたりしが、忽ち頭を立木に叩き付けたり。月は、木の蔭より漏れて彼れの額を照らせり。彼れは益いら立ちて頭をうつと幾十度血は頭より流れて、耳のあたりに迸はしれり。黑き衣には血痕斑々として點しぬ。十分時計り、頭を毆ちたれとも、頭を碎くとを得ざりき、彼れは休みて長大息を吹きぬ。船中の對話は亦耳邊に來れり。僧は拳を握りつめて聞きぬ。

潮もひく可しいざ歸らん、おとき媼は幾度思ふても氣の毒なり、盲目となりては、是れ迄の如く賃引も出來ず、さりとて近き緣家親類もなし、此後は如何にして落らすにや、

旅僧は握れる拳をゆるめたり。彼れは沈思せり、暫くして彼れの眼、彼の顔は少く笑ひを含めり。月も亦少く笑を含めり。彼れ・は仰て月を望めり。月は澄みて清き光をやはらかに彼れの上に恵みぬ。一道の血は額より口に流れ、他の血は耳より背に入れり。僧は靜かに而も安らかに歩みて海べにゆき顔と頭とを海潮に洗ひぬ。

* * * * * * * * * * * * * * * * *

三保の松原月さへて、昔を思ひ伊豆の山、やまと錦や、賤機の紅葉に霜をおきつ波、波に浮かへる富士の雪、雪にけがれを清見潟、清見寺の鐘の聲、浮世の罪を洗ひ去り、鬼より歸る元の人。

第五回

孝子長吉の死骸が、其故郷なる興津に着して後三日目の眞夜中に、お時媼の家の窓より一封の書を投げ込みたるものあり、隣の老爺に讀ませたるに善次郎の孝心に感じ、是れより毎月若干の金を送りて媼を養ふによりて絶望なく百歳の壽を保てよ、其金は毎月廿五日の夜に窓の子に結び付け置く可しといふの意味なりと誇り顔に説ききかせぬ。その月二十五日の夜は來りぬ、其翌朝に至りて、一封の金窓の子に結ひつけられたるを見出したり。其次の月も

其又次きの月も同しく結ひつけられたるを以て町中の大評判となり、其の慈善家は何人にてあるへきやの疑問起りぬ。好事者は二十五日の夜嫗の家の窓の下に徹夜して探りたれとも、いつも黒き頭巾の様なるものをもて、顔を隠して來るを以て、その誰人たるを確かむる能はす。又たその人の後を追跡したるに三保の松原の中に入りしを以て、翌日松原の中を殘るくまなくさがしたれども、人の影絶へてなかりければ、町の老人共は、清見寺の佛樣が善次郎の孝心を賞し玉ふものなりとなし、若者は隣村の金滿家が人知れず陰德を施すものとなし、兩說に分れ居りしが、お時嫗は固より信仰篤きものなるを以て、深く前說を信しぬ。斯くて三年過ぎ、五年過ぎ、十年過ぎ、お時嫗五十才になるも、十年一日の如く、每月一日も違はす、慈善の行變らされば、若者共も、是れ人間の業にあらすとなして、老人の說に降伏しぬ。後一年にして、お時嫗は卒中風にて頓死せり、嫗を葬りたる翌朝六十計りの老男の死骸、三保の松原の白き砂の上にうち上けられ、それより少し隔たりて、一個の錫杖うち上けられぬ彼れの服は墨染の古き衣にて、彼の頭と顏とは癩病の如く腐され、彼れの胸には刀のきりきず三ヶ所あり、彼れの腕には左右共、三筋の入れ墨あり。町のもの共、打寄りて撿視したるに、或る一人は『是れ十年か十一年前より此町はづれに來り住み、忠實に仕事をはげみ、朝夕粟粥をすゝりて儉約したる土方に似たるにあらすや』と發言し、他の一人は『土方ににたれとも、土方は、僧にあらず』　年長は『僧にしては切り瘡と入れずみは似合しからず、兎に角土方の住みかに入を

走す可し」とて、其家を訪はせけるに、全くの空家同樣にて家財とてはなく、只鍋一個、椀一個、箸一對、行燈一臺の外、何にものもあらず。溺死せる者は果して土方なり。彼れは貧の爲に死せし乎、或は溺れたる乎、彼れの頭と顏のみ腐されて手足のくされざるは、過て漆などを顏頭につけたる故の病乎、或は眞の癩病乎。土方僧服にして死せるは如何なる心ぞ、胸のきず、腕の入れ墨は如何なる經歷をか有する、誰れ一人として之を窮むるものもあらず。彼れの死骸は、小松の下にうづめられ、墓標も立てられず、香火も供せられず、半年を經すして、白砂一面平らかに無名の墓を隱しぬ。墓今ま何くに在る魂魄今ま何くに在る。砂漠々く波茫々く。之を知るものは只月あるのみ。





新婚　無名氏

我は戀の力を疑ふ能はず。シェーキスピーア歌ふて曰く

戀は家を失へり。彼は彼女の塲所となれり、彼女の魂が彼れの美麗に接せしときに、彼女は其住む所を新しくせり。其人と爲りを新しくせり。

かよはき女性をして刄を恐れざらしむる者も戀に非ずや。鐵石の如き堅き心をも摧きて泥の如くするは戀の力に非ずや。

戀人は音樂なり。其傍らに在れば我心は常に美妙の音を聞く。戀人は我世界なり戀人我につらければ天地も亦つらき物となり。戀人我にやさしければ、天地も亦やさしき物となる。吾れ戀人につらならざれば水を失へる魚の如し、長く活きんとは思はれず。

吾れは戀の力を認むるが故に亦婚姻を重んせるを得ず、何となれば戀てふ魔力の障碍を爲さずして善く用ひらるゝは即ち正當なる婚姻なればなり。純潔なる處女と純潔なる男子とが天緣空しからずして伉儷の儀めでたくとゝのひし程喜ぶべく祝すべきとやある。

吾れは常に思ひぬ、世若し「戀」といふとを重んじ徒らに「あはれなる者」「はづかしく者」とのみ思

はず「尊き者」「神聖なる者」と思ふに至らば、即ち國の道德既に數等を上りしなり。戀の理想にして高からずんば、婚姻の理想も亦低からざるを得ず。婚姻の理想低くければ即ち國風猶文明に達せざる也。吾れは此故に戀を説き、婚姻を説く人の多からんことを望む。

此頃、我知れる人亦此の人生の大問題に逢着せり。吾れ之を祝せんとて贈ける文は、極めて堅くるしき書ざまなれど。

新婚を賀する文

○○孃の梧右に、辱知の某

謹んで君の新婚を賀す。人生無上の歡、何者か華燭の夕に如かん。一人身に樂しめば、僕も亦彼れと共に樂しむべし。況んや君喜び、君の夫喜び、君の父母、兄弟と、君の夫の父母兄弟と、君と君の夫との朋友親戚盡く喜ぶをや、僕奚んぞ與に喜ばざるを得んや。

人生見來れば沙漠の如し。悲しむべきもの、憤るべき者、嗟嘆すべきもの慷慨すべき者、長大息すべきもの、流涕すべき者固より多し。無能にして虚名を誇る者に遇へば我心燃ゆるが如し。虎威を挾んで良民を睥睨する狐の如き官吏を見れは我心燃ゆるが如し。名を民權自由に假りて、其私慾を逐げんとする者を見れば我心燃るが如し、自ら文學を以て任じ、而して中は嫉妬、爭勝の念に滿つる者を見れば我心燃るが如し。祖先の遺財を頼んで衣服の美に矜り、肚裏即ち何物もなき柔弱なる貴人を見れば我心燃るが如し。高才にして薄命なる者を見れば我

心燃るが如し。勤勉にして猶且貧しき者を見れば我心燃るが如し。寡婦孤兒世に省みられずして、道上に彷徨する者を見れば我心燃るが如し。而して四顧皆此類也。此世は即ち欠陷の世界に非ずや、此世は即ち秋風商殺の天地に非ずや、此世は即ち情なく、温なく、心なき大魂に非ずや。僕たとへ自ら厭世家を以て期せざるも實に斯の如く感せざるを得ず。誠意の流露する所、誠に口を開きて笑ふべき所、眞個に脈々たる温情の湧く所蓋し太だ少し。唯新婚の夕、夫婿の心、或は之れに庶幾からん乎。

君、今人生の樂園に往かんとす、一ありて二あるべからざる歡會に往かんとす、茫々たる天地の間、此夕のみ眞に樂しみ、眞に笑ふの人を見んとす。人間の眞粹なる情の花は此に開かんとす。僕豈欣然として祝せざるを得んや。

僕は生れながらの野人也。禮節に嫺はず、言語に愼しまざるを以て、未だ嘗て婦人と友たらざる也。況んや一二纔かに相知る所の者あるも多くは是れ饒舌にあらざれば即ち浮誇、浮誇に非れは即ち執拗、一たび語れは直ちに厭棄せんと欲す、僕是を以て獨り婦人の友たらざるのみならず、敢て又婦人の友たるを願はざりし也。獨り君、拙荊の學友たるを以て、屢僕の家を訪はる。始めや僕固より君を異とせざりし也。時に相語るに及んで、漸く君の尋常に卓越するあるを覺ふ。僕固より鑑識の才なしと雖も、而も拙荊に聞く所と、僕の見る所を併せて之を考れば君の人と爲りや蓋し察すべき也。君や天眞、爛熳、毫末も隱蔽し、僞飾し、作爲する所なし、悟る

所は即ち胸中の語也、言ふ所は即ち眞情の言也。君や些の陰翳なく、些の模糊なく、青空一碧、玲瓏として洞視すべきの人なり。而して他人の非を語らず、他人の惡を惡まず。言語の間未だ嘗て圭角を見ずして、而して淸節高標、毅然として犯すべからず、僕是に於て女性も亦侮るべからざる者あるを知る。

君、基督信徒たるが爲めに、其信ずる所を守つて失はざらんと欲し、漫りに他人に嫁するを欲せず、百方君を勸る者ありと雖も、君決して志を移さゞりし也。而して數年の間毎週安息日學校を敎へて倦まず、齡の漸く闌けんとするを顧みざる者の如し。僕、是に於てか君の信ずる所に篤きに服す。

君、好んで小說を讀む、而も浮靡卑猥の文を喜はず、嘗て曰く當今の小說家、多くは妾の好む所に非ず。獨り露伴子の作る所、稍氣魄あり、精神あるを見ると。僕是に於てか君の見る所、尋常婦人に異なるを知る。僕、知る所の婦人、今人の小說を曰ふもの其上は即ち紅葉を說く、其中は即ち涙香を說く其下は即ち改進新聞、倭新聞の類也、露伴を說くに至つては、唯君あるのみ。僕是に於てか君の氣骨に服す。

僕獨り惜む、斯の如きの才女、其信ずる所を守るが爲めに久しく良偶を得ず、徒らに父母をして憂へしむるを、拙荊と語りて君に及ぶ毎に、未だ嘗て相共に此事を曰つて歎せずんばあらず、夫れ父母の子を慮るや深し、女あれば良婿を得んと欲し、子あれば良婦を得んと欲す、固よ

り其至情なり、君の志は固より狂くべからずと雖も嚴君慈萱の情、亦深く察すべきもののなからずや、思ふて此に至る、僕夫妻、亦實に君の爲めに涙なきを得ざりし也。

然るに本年六月下旬、○○君、僕を訪ひ、君の事を語り、將さに君を○○君に媒せんとすと告ぐ。○○君の名は僕の稔聞する所、其風采は僕の嘗て聞きて慕ふ所、其嘗て○○○に在り、大學に在り、博學能文、儕輩をして奔り且僵れしめ、教授等をして舌を卷きて畏れしめたるの狀は、人の多く傳聞する所也。其哲學に精しく、議論に長じ、幽を闡き、微を拆つの才あるは其著はす所の文章に因りて、僕の知る所也、其少年にして、神童の名を博し、鄰里鄉黨に愛せられしは僕の○○氏に聞く所也、而して今君此佳婿を得んとす、僕豈欣然として之を贊成せざるを得んや。僕の○○君と君の事を語る蓋し喜色に顯はる。

人間不平の事、何ぞ才の其所を得ざるに過ぎたる者あらんや、所謂駿馬痴漢を乘せ、美人醜夫に伴ふ者、最も斷腸の事と爲す。世の父母、絕へて其子の心を諒せず、俊爽の小女をして富兒俗漢の餌とならしむ。是れ將さに開かんとするの花を摧きて、泥に塗れしむる也。是れ最愛の兒をして終生憂愁に沈ましむる也。僕之を想ふ毎に惻然として、人間、亦鬼の多きを歎ぜずんばあらず。此故に若し佳人にして眞に才子に遇ふが如きとあらば、知らざる人の事と雖、猶喜ぶべし。况んや友人の事に屬するをや、况んや僕と拙荊との最も敬し、最も愛する君の事に屬するをや。

僕、君の事に於て、始めて人生の最も奇なるを見たり。夫れ君と○○君と固より始めより相知らざるの人也。僕、○○君の名を聞く時。奚ぞ其婦に君と曰ふものあるを知らんや、僕君と語る時奚ぞ君が未來の夫に○○君と曰ふ者あるを知らんや。此事君の父母固より知らず、君の朋友固より知らず、君固より知らず。宇宙の間之れを知る者唯造化翁ありしのみ。赤縄の結ぶ所天命の歸する所誰れか之を察し、誰れか之を知るを得ん。乃ち知る天公自ら經綸あり、必しも人の苦慮し焦心するを要せざるを僕と拙荊と君の爲めに憂へしものゝ誠に杞憂に過ぎざりし也。

然りと雖も僕奚ぞ唯君を祝するのみにして止むべけんや。君今歡喜に滿つ、君今新しき生涯に入る是れ天の新しき試煉を君に爲さんとする也。僕を以て○○君近來の文を観る、識論愈長ずと雖も光焔或は昔に減ずるを覺ふ、是豈博學却つて累を爲す乎、抑も亦眼一世を空ふし、四顧匹敵なく、意滿ち氣驕れるに因る乎。聞く○○君年猶三十に滿たずと、僕天の大に○○君に待つ所あるを信ず。之を助け、之を奬まし其才を養ひ、其名を爲さしむるもの、君の任に非ずや。君今天の靈寵に頼りて、名士の婦となる、奚ぞ天命に背ひて我黨の望を空ふすべけんや。謹んで君の良偶を得たるを賀し、併せて思ふ所を述ぶ、是れ獨り僕の意のみならず併せて又拙荊の意也、不宣、

◎民友社出版書籍目錄◎

○平田久著 十二文豪第一卷 カーライル 定價十八錢 郵稅四錢

○竹越與三郎著 十二文豪第二卷 マコウレー 定價十八錢 郵稅四錢

○山路彌吉著 十二文豪第三卷 荻生徂徠 定價十八錢 郵稅四錢

○平民叢書第一卷 十九世紀之大勢 定價十二錢 郵稅二錢

○平民叢書第二卷 世界經濟上之變動 定價十二錢 郵稅二錢

○平民叢書第三卷 國家と政府 定價十二錢 郵稅二錢

○平民叢書第四卷 教育と遺傳 定價十二錢 郵稅二錢

○平民叢書第五卷 文明之獘及其救治 定價十二錢 郵稅二錢

○平民叢書第六卷 現時之社會主義 定價十二錢 郵稅二錢

○人見一太郎著 國民的大問題 定價二十錢 郵稅四錢

○德富猪一郎著 國民叢書 靜思餘錄 定價十五錢 郵稅二錢

○國民叢書 人物管見 定價十五錢 郵稅二錢

○德富猪一郎著 國民叢書 青年と教育 定價十五錢 郵稅四錢

○高橋五郎著 排僞哲學論 定價十二錢 郵稅二錢

○德富健次郎著 近世歐米歷史之片影 定價二十錢 郵稅四錢

○德富猪一郎著 吉田松陰 近刊

○停春樓主人著 德川家康 近刊

○德富健次郎纂譯 グラッドストン 定價二十錢 郵稅四錢

○德富健次郎纂譯 武雷土 定價十五錢 郵稅四錢

○德富健次郎纂譯 格武電 定價二十錢 郵稅四錢

○竹越與三郎著 新日本史 上 定價四十錢 郵稅六錢

○新日本史 中 定價三十五錢 郵稅六錢

佛教通俗講義

毎月一回五日發兌

第壹號再版●●第二號發兌

科目（維摩經……島地默雷　寶鏡三昧……釋宗演
講（佛經大意……織田得能　倶舍宗大意……齋藤唯信
師（般若心經……大内青巒　八宗綱要……織田得能
因明學……村上專精　梵文阿彌陀經……南條文雄

佛經再興の大勢は本誌の好況に依てトせられたり初版七千部は直に賣切れ既に再版し今や又第二號を發兌せり講義の**平易**て通俗にし**明瞭**なるは本誌の特色とし讃せられたり請ふ僧侶諸君よ俗人の爲めに却て世間一般に稱贊歡迎せらるゝなかれ其無學を憫笑せらるゝなかれ

定價　一部郵稅共金九錢十部前金同八十五錢廿部同一圓六十錢卅部同二圓卅錢●郵券代用一割增○爲替は神田一橋通爲替取扱所

發行所　東京麹町區上六番町四十七番地　**光融館**

發賣所　東京麹町區富士見町一丁目　**益友社**

竹越與三郎君著
基督傳記　本日發賣　定價廿錢　郵稅四錢

内村鑑三君著
なぐさめ（再版）　定價廿錢　郵稅四錢

聖書館發兌十五錢
袖珍新約全書

東京新橋出雲町
警醒社書店

小野鵝堂先生編書

てかみし文

男子用　全一册　定價金參拾錢　郵送料金六錢

近來手翰文書法の必要をいふもの多くは女子に傾き男子の事は殆と置て顧るものなし且昔日編著の手翰文は今の時事に適切ならずこれ先生が（男子用）の爲めに心を潜めて編み且書されし以謂なりされば文は簡易にて而も卑俗に流れず以て尺牘の摸範とすべく書は優美にして而も古癖に陷らず以て習字の手本とすべきなり又卷末には日常必要の語類を草行にものして字引躰に附記せられつれば學生諸君は勿論一般子弟のためには良書なるべし今般刻成につき謹告す

發行所　東京々橋區南傳馬町一丁目　**吉川半七**

明治廿五年九月十四日遞信省認可

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　秀英舍印行